口絵イラスト：日本ファルコム
本文イラスト：かしわ

目次

プロローグ　クロスベル創立記念祭　6
第一章　失われた正義　19
第二章　《仔猫（キティ）》を追って　82
第三章　潜入捜査（せんにゅうそうさ）　136
第四章　黒の競売会（シュヴァルツ・オークション）　180
第五章　キーア　242
あとがき　284

動こうとしても、微動だにできぬ空間であった。
小さな膝を抱きかかえるようにして、身体を折り曲げ。
ようやく彼女は、そこに存在していた。
暗く、狭く、密閉された牢獄に。

しかし彼女は、まだ永い眠りの中にあり、孤立すら自覚できていない。
ただ彼女の無意識だけが、救いを求めて呼びかけていた。
自分を救ってくれる、誰かに向かって。

……私ヲ……見ツケテ……

……私ヲ……見ツケテ……

……私ヲ……

プロローグ　クロスベル創立記念祭

晴れた空に、合図の花火がぽん！　と打ち上げられる。
エリィ・マクダエルは、式典が始まると知って、席から立ち上がった。
「時間です。そろそろ参りましょうか、おじいさま」
呼びかける声は、凛として清廉。
パールグレーの髪をなびかせた少女、エリィは、ベルトに手挟んだ得物に触れた。
共和国ヴェルヌ社製の導力銃、ラスティネイルが彼女の相棒である。
無論、もしもの事態に備えて、実弾も込めてある。
だが警戒する孫娘に、老齢の市長は、穏やかな笑みを浮かべてみせた。
「エリィ、そんなに心配せんでもいい。まさか式典の席で、妙なことも起きるまい。お前は、招待席に座っていなさい」
エリィの祖父、ヘンリー・マクダエル市長は、矍鑠とした足取りで、舞台袖に立った。
白い髭をたくわえた市長の横顔は、老賢者の如き叡智を漂わせている。
しかし孫娘は、心配そうな視線で、会場を見わたしていた。
「でも、あんな事件があったばかりだもの。私が傍で警護を……」

「大丈夫だ。それに今日は、せっかくの休みなのだろう？　休日ぐらい、特務支援課の仕事は忘れたらどうだね？」
「私は休みですけど、事件は起きるかも……」
「いいから。もう少し、肩の力をぬきなさい」
老市長は、ぽんとエリィの肩をたたいた。
「あまりカタい顔ばかりしていると、男の子に敬遠されてしまうぞ。ほら、お前の同僚のロイド君あたりにも……」
「ちょっ！　おじいさま、どうして今ここでロイドの名前が……！」
あせる孫娘に微笑んで、老市長は前へ踏み出した。
「さて、どうしてかな。では、行ってくるぞ……」
そしてマクダエル市長は一人、壇上へ上がった。
同時に、何十台ものカメラが、一斉にフラッシュを焚く。
孫娘は、ピンク色の唇を、不満そうにすぼめてみせた。
「おじいさまったら、急にロイドの話なんかして……え、でも、私、そんなにカタい顔ばっかりしてる……？」
あわてて手鏡を見る孫娘を無視して、式典は始まった。
クロスベル創立記念祭の開会式が。

「このクロスベルが、自治州として成立して七十年。その七十年間は、まさに激動の時代でありました」

市庁舎に集った人々に向けて、マクダエル市長は老齢とは思えぬたしかな声で告げた。

「度重なる戦乱、導力革命……しかし様々な荒波に揉まれながら、今やこのクロスベルは、大陸有数の貿易都市へと発展しつつあります」

式典会場の招待席には、市議会議員、市の名士たちが一堂に参列している。

彼らの大半は、人望厚い市長の言葉を、真摯に受け止めていた。

「その一方、急速な都市開発に起因する問題も出始めており、新たな政策と法整備が求められています。自治州および、その周辺諸国に、より良き未来をもたらすためにも、今こそ我々は、一丸となって前に進む必要があるのです」

孫娘のエリィ・マクダエルも、招待席に座し、祖父の演説に聞き入っている。

だが彼女の視線は、壇上の、老祖父のすぐ傍に控えている男を見据えていた。

ダークスーツをまとった初老の男は、さっきから気難しい顔で、マクダエル市長の言葉を受け止めている。

クロスベル自治州議会、ハルトマン議長。

マクダエル市長と対立し、大国、エレボニア帝国に与する『帝国派』と呼ばれる議員一派の首魁である。

だが市長は、自らを悩ます人物を気にもせず、演説を続ける。

「問題は、山積しています。ですが今はただ、七十年という長く大きな節目を祝い、みなで喜びを分かち合いましょう」

市長は、手を掲げて宣誓のポーズをとった。

「わずか五日間ではありますが……大いなる女神の御名の下、今ここにクロスベル自治州、創立七十周年記念祭の開催を宣言します！」

楽団が、ファンファーレを打ち鳴らす。

フラッシュが市長を包み、式典会場に拍手の音が沸き起こった。

エリィも、席から立ち上がって祖父に拍手を送ったが……

ハルトマン議長の拍手は、おざなりで、祖父への尊敬の念は少しも感じられなかった。

無論、招待席の半数を占める『帝国派』議員たちの拍手も。

エリィは、クロスベル自治州の真の姿をかいま見た気がして、辟易した。

「嫌ね……こんな時くらい、ちゃんと拍手してくれたっていいのに……」

だがエリィと仲間たちは、この五日間で知ることになる。

クロスベル自治州に潜む、真の暗闇を。

いや、頂きすら見えぬ、高い壁を……

クロスベル自治州。首都クロスベル市。

ゼムリア大陸西部に位置するこの地域が生まれ、七十年が経った。

この自治州を緩衝地帯として創設した二大国……エレボニア帝国とカルバード共和国の間にも、不戦条約が成立し、三十年が経過している。

だが水面下での抗争は、熾烈さを増していた。

大陸有数の交易都市となったクロスベル市を自陣に引き入れるべく、二大国はさまざまな工作を用いて、自らの影響力を浸透させつつあった。

それがために、クロスベル市議会も、帝国派、共和国派に二分され、政治対立も根深いものになっている。

政治抗争が途絶えたことは、この七十年間、一度としてなかった。

たとえ創立七十周年を祝う、記念祭の間とても……

市庁舎で、賑々しい祭典が開かれているのと同時刻。

歓楽街に位置する壮麗な建物でも、万雷の拍手が鳴り響いていた。

劇団《アルカンシェル》専用劇場では、魂を打ち震わせるような楽の音と共に、色取り取りのライトがステージを彩っている。

創立記念祭にあわせて公開された演目の名は、『金の太陽、銀の月』。

実の姉妹ながらも、対立する勢力の舞姫として争う、二人の美女の物語に、観客たちは惹き込まれ、呑まれ、終始、圧倒されていた。

太陽の姫を演ずるのは、《アルカンシェル》のトップ女優、イリア・プラティエ。

黄金の髪をたなびかせて踊るさまは、まさしく日輪の舞姫を演ずるにふさわしい。

一方、月の姫を演じるのは、新進女優、リーシャ・マオ。

まだあどけない顔立ちながらも、変転する月の如く、神秘的な舞いを披露していた。

二人が跳び、歌と言葉を交わし、舞い踊り、やがて終幕が下りた時。

ようやく観客たちも、夢幻の世界から目覚めたように、我に返って拍手を送っていたのだ。

その客席には……

「すごい……としか言えないよ、俺」

ロイド・バニングスは、手をたたきながら隣席に呻いた。

「《アルカンシェル》の芝居をちゃんと見たのは初めてだけど……道理でみんな、夢中になるはずだなあ」

ロイドは、まだ幼さの残る顔を呆然とさせていた。

このクロスベル市で生まれ育った十八歳……とは言え、もともとこういった芸術に興味があったわけではない。

まして、十五歳で警察学校に入ってからは、制圧術や捜査術を会得するだけで手一杯で、なにかを楽しむヒマも余裕も皆無だった。

それを知る隣席の女性も、ロイドに小さく微笑みかけている。

「よかった、ロイドも楽しんでくれて……ここのところ、ずっと例の事件にかかりっきりで、大変だったでしょう?」

「ん……まあね」

「あなたたちが解決したから、この公演も無事、開催できたのよ。ロイドたちだって、十分すごいと思うわ」

「……セシル姉……」

ロイドは、あらためて隣席の女性を見つめた。

五つ年上の二十三歳。

いつも穏やかな笑みを浮かべるセシル・ノイエスは、ロイドにとって義理の姉になるはずの人であった。

そう、ロイドの兄、ガイ・バニングスと結婚していれば……

しかし、兄は三年前に謎の死を遂げ、恋人だったセシルは悲嘆の淵に沈んだ。

それでも今は、こうして二人、心の底から観劇を楽しんでいる。

ロイドは、自分と同じ捜査官だった兄を思い出して、つぶやいた。

「俺なんてまだまだだよ、兄貴に比べたら……」

「そんなことないわ。イリアだって、あなたたちのことを凄く誉めていたのよ」

「えっ、イリアさんが?」

言われて、ロイドは舞台に目をやった。

場内ではまだ拍手が続き、俳優たちがカーテンコールに応えている。

その中心にいるイリア・プラティエが、ふとロイドに気づくと、「ちゅっ」とキスするそぶりをしてみせた。

悪戯っぽい笑みに、ロイドはあわてて顔をこわばらせた。

「お、おかげで俺も、今日だけ休暇がもらえたよ。この前の事件を解決したボーナスみたいなもんかな」

「ふふっ、お疲れさま」

ロイドの傍には、クロスベルタイムズの朝刊が置かれている。
その一面には、数日前に発生した、マクダエル市長暗殺未遂事件の続報が大きく報じられていた。
主犯である市長秘書、アーネスト・ライズは、陽動としてイリア・プラティエに脅迫状を送りつけ、劇団《アルカンシェル》の公演中止を迫った。
しかし事件は未然に防がれ、こうして無事に創立記念祭も、《アルカンシェル》の公演も行われている。
それはすべて、ロイドたちの手柄として喧伝されていたのだ。
セシルもその新聞を一瞥すると、嬉しそうに目を細めた。
「今夜は、私の家で夕食を食べていってくれるんでしょう？　うちのお母さんたちも、楽しにしていたわよ」
「うん、ご馳走になるよ」
「お祝いだものね。あなたたちの大手柄の」
「あんまり実感ないなあ、その言葉……」
けれど新聞の見出しにも、大きな活字が躍っていた。

『クロスベル市警、新進気鋭の若手捜査チーム、特務支援課の快挙！』
『ロイド・バニングス捜査官、市長を守る』
ロイドが所属する特務支援課は、結成されてまだ数か月である。
ロイドだけが唯一の正式捜査官という、異色な捜査チームだが、その名は確実に、今回件を通してクロスベル市に広まっていた。
だがロイドは、奢りを戒めるように、新聞をくしゃっと丸めた。
「行こう、セシル姉。夕食まで、街を歩こうか」
「ええ、いいわ。ふふっ、なんだかデート気分ね」
連れだって劇場から出たロイドは、陽光に手をかざした。
記念祭でにぎわうクロスベルの街は、いつもよりまぶしく見える。
しかしロイドが感じたのは、かりそめの平和に過ぎなかった……

＊＊＊＊

「準備に、ぬかりはないだろうな？」
禿頭の男は、どっかとソファに座った。
クロスベル市内の路地裏。

創立記念祭の賑わいから、隠れるように彼らの住処はあった。

「例の件、手落ちがあってはならんぞ。うちの信用だけではなく、ハルトマン閣下にもご迷惑がかかる。そこのところを忘れるな」

ルバーチェ商会会長、マルコーニは、太い葉巻をふかしながら言う。

彼が経営するルバーチェ商会は、帝国との貿易で財を成したことで知られていた。

もっともクロスベル市民なら、貿易業が仮面に過ぎぬことも承知である。

彼らルバーチェ商会は、帝国派議員を賄賂で懐柔し、帝国からの武器密売で巨万の富を稼いでいるのだ。

しかし彼らの後ろには、帝国派の重鎮ハルトマン議長が控え、市警もおいそれとは手が出せぬ存在になっている。

言わば、クロスベルの闇社会に君臨する帝王。

だがマルコーニの顔には、さして余裕は見られなかった。

「集めたブツの保管も、万全だろうな？　客に披露するのは記念祭の最終日……それまでに誰かに奪われては、元も子もなくなるぞ」

すると彼の前に立つ巨漢が、低い声を響かせた。

「お任せください。ブツはすでに、手出しのできない場所に集めてあります。クロスベル警察どころか、警備隊すら指一本触れられやしません」

断言したのは、ガルシア・ロッシ。

マルコーニの腹心であり、ルバーチェ商会営業本部長でもあるガルシアは、かつて《キリングベア》と呼ばれた、名うての猟兵である。

猟兵とは、戦争を生業とし、金のためなら殺戮も厭わぬ傭兵だ。

ガルシアは、名うての猟兵団『西風の旅団』で武名を馳せ、暑苦しいほどの威圧感を放っている。

しかしマルコーニは、その腹心を苦々しい顔でねめつけた。

「警察や警備隊など気にするな。どうせ俺たちには手が出せまい。そのあたりはハルトマン閣下が抑えつけてくれる。問題は……」

「《黒月》……ですか」

ガルシアが言うと、マルコーニの顔はさらに険しくなった。

「他に誰がいる？　奴らはこの街を、俺たちの手からかっさらうつもりだ。俺たちを追い落とす機会を前々から狙っている。まして議長閣下の圧力も効きやしねえ」

「《黒月》は、共和国出身の組織ですからね。東方人の奴らにとっては、帝国派の議長は仇敵ですからな」

「だからよ。討って出てくる可能性は高い」

マルコーニは、不機嫌そうに葉巻をふかした。

「戦争になるぞ、ガルシア。腹をくくっておけ」

「上等ですよ、会長。それに俺は、戦争で食ってきた男です」

「あの若造……ツァオ・リーを舐めてはいかんぞ」
「分かっています。それにあの《銀》も……」
「誰にも邪魔はさせるな。我々の『黒の競売会』の邪魔はな……」

第一章　失われた正義

「はい、駐車違反で二点です」
ロイド・バニングスは、慣れた手つきで違反キップを切り離した。
彼の横顔は、まだ少年にしか見えない。
だがクロスベル市警の記章を縫い込んだジャケットに身を包み、左右の腰に衝撃警棒バ
ハンマーを提げた姿は、立派な捜査官であった。
ロイドは、不法に停められた導力車の運転手に告げる。
「後日、クロスベル市警に罰金を振り込んでくださいね。延滞した場合は、さらに違反金
算されますから気をつけて」
「そんなあ〜、頼むよ、君ぃ」
中年男は、すがるような目でロイドを見つめた。
創立記念祭、二日目。
大陸横断鉄道、クロスベル駅前広場には、イベントや、保養施設ミシュラムのテーマパ
へ向かう人々が、列車から降り立ち、どっと街へくり出していた。

だがそれを阻むように、導力車が何台も違法駐車されているのだ。

導力とは、七耀石が秘めた七属性のエネルギー……つまり、地、水、火、風、時、空、幻の力であり、それを用いたのが導力器である。

このクロスベル市では、導力器を発明したエプスタイン財団が積極的に導力ネットワークの導入を推し進めている。

そのため、夜でもネオンが輝き、導力車が走る光景も珍しくはない。

しかしロイドは、あまりにも多い違法駐車に辟易し、本日、三十六台目の違反キップを手渡したのだ。

「とにかく、ここに停められては渋滞のもとです。免許停止ならその手続きも……」

「いや待ってくれ！　これでどうかひとつ……な？　な？」

そう言って、男が財布から紙幣をちらつかせると、ロイドはあわてて飛び退いた。

「やめてくださいよ！　お金なんて！」

ロイドは毅然としてそれを拒み、エニグマ……結晶回路を組み込んだ第五世代戦術オーブメントの通信機能を起動した。

「とにかくレッカー車を呼びます。ああ、もしもし警察本部ですか、特務支援課のバニングス捜査官です。駅前広場に……」

本来、このような駐車違反を取り締まるのは、交通課の仕事である。

だがクロスベル市警は、各地の警備に狩り出されて大忙しらしい。

そこで、あらゆる任務をこなす、ロイドたち特務支援課に白羽の矢が立ったのだ。

おかげでロイドたちには、警察本部からありとあらゆる雑用が回されてきた。

そしてロイドの市警マークに気づいたのか、観光客らしい老夫婦も近づいてきた。

「あのぉ……すまんが、劇団《アルカンシェル》の劇場はどっちかのう？」

「私たち、クロスベル市は初めてで……」

ロイドは、連絡を手早く終えて、道を指示した。

「このまま真っ直ぐ歩いて中央広場に出てください。向かって斜め左の裏通りを抜けると、《アルカンシェル》の劇場が見えてきますよ」

すると今度は、父親と幼い娘があたふたと駆け寄ってきた。

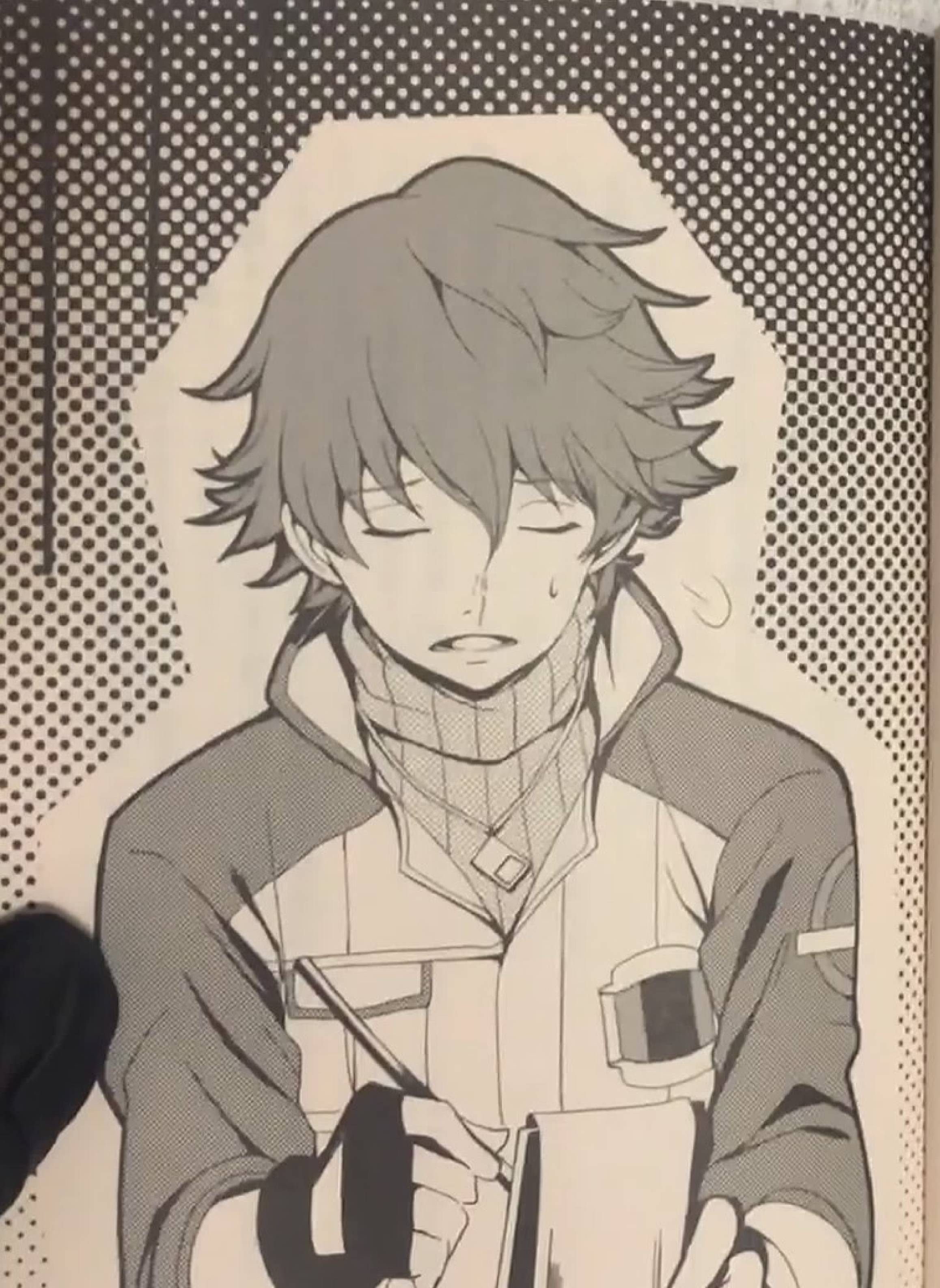
「すみません！　ミシュラムのテーマーパークはどっちですか？」

「おじさん！　みっしい、どこお？」

「お、おじさん!?」

ロイドは憮然としつつも、幼い女の子を見下ろした。

手には、みっしい……つまりミシュラム・ワンダーランドのマスコット・キャラタター、猫



のみっしぃのぬいぐるみを抱えている。

女の子の発言にショックを受けつつも、ロイドはにこやかに対応した。

「テーマパークなら中央広場から左に折れて東通りへ、そこから北に曲がって、港湾区まで行ってください。港からミシュラムへ行く船が出てますから」

「ありがとう、おじさん！」

「ぐっ……二回も言われた……」

だが心の傷が癒えぬうちに、また別の観光客が声をかけてくる。

「龍老飯店ってお店、どう行けばいいんですか？」

「それなら、東通りの外れです！　おすすめは猛虎炒飯！」

「ライブハウス《イグニス》ってどこぉ？」

「旧市街の突き当たり！　あの辺、治安が悪いので、何かあったら市警にご連絡を！」

「どっか大物が釣れそうな、釣りポイント知らない？」

「だったら港湾区の突端へ！　うまくいけばタイタンが釣れますよ！」

ロイドは、矢継ぎ早の質問をさばいて、ふーっと汗を拭った。

「俺……何やってんだ。これじゃ観光ガイドだよ」

だが特務支援課に入ったのは、彼自身の決断だ。

その判断に後悔はないが、さすがにこの忙しさは……

するとそこへ、疲れ切った表情の同僚、エリィ・マクダエルもやって来た。
「お疲れさま〜。さっきから迷子の案内ばっかり〜。もうへとへとだわ」
細身の身体に、ぴたりと合ったスーツ。
引き締まった腰と、長く伸びた脚が印象的な美少女である。
しかし、いつものエリィなら、身だしなみはきちんと整えているが、今日は街中駆け回ったらしく、髪も乱れ、服も埃まみれになっている。
ロイドも、ため息混じりに肩を落としてみせた。
「こっちも朝からばたばただよ。せっかく昨日は休みをもらったのに、リフレッシュした感じがどっかに行っちゃったなあ」
「あら、ロイドは昨日の休暇、どうしてたの？」
「うん、セシル姉と一緒に《アルカンシェル》の芝居を観に……」
と言った途端、エリィの目がぎらりと光った。
「えっ、セシルさんと一緒に？　そ、それどういう意味？」
「意味って……ただ単に誘われたから行っただけだよ。俺もこの街に帰ってきてから、セシル姉とはゆっくり話してなかったしね」
「あ、そう……」
「なんだよ、そのじとーっとした目は！」
「別にっ！　素敵な休日でよかったわね！」

ロイドは、むくれるエリィの気持ちがさっぱり読めずにいた。
エリィは、市長の孫娘として、政界入りを嘱望された才女である。
知識も教養もあり、論理的な判断力は、ロイドもおおいに頼りにしていた。
ただ時々、ロイドに対して不可解な反応をすることが……
「お疲れー。旧市街のケンカ騒ぎは、かたづいたぜ」
悠然と現れたのは、同じく特務支援課の一員、ランディ・オルランドである。
長身と、広い肩幅がたくましく、長めの赤毛は雄ライオンを思わせる。
ロイドより三歳年上のランディは、集団制圧用の斧槍ライアットバスターを担いだまま、すれ違う若い女性の後ろ姿に口笛を吹いた。
「おっとナイスバディ〜。目の保養、目の保養っと」
「ランディ、勤務中じゃないか」
「そうよ、まじめにしてってば」
しかしロイドとエリィにたしなめられても、ランディは超然と微笑んでみせた。
「いつだって俺はまじめさ。まじめに女の子のお尻を鑑賞し、胸元を吟味している。勤務中でもブレないなんて、たいしたもんだろう？」
そう言って笑うランディは、元クロスベル警備隊員である。
国境警備のため、装甲車などを有する警備隊は、言うなれば準軍隊。

ランディも、戦闘となれば警備隊仕込みらしい腕前を発揮してくれる。

しかし普段の彼は、女好きの、ゆるい兄貴分であった。

「まったく旧市街のガキどもも、もうちょっと女性に興味でも持てば、俺のように優しく生きられるのによ。なあ、ティオすけ？」

ランディが振り返った先には、一人の少女が立っていた。

青みがかった長い髪を背中に垂らし、魔導杖デモンズスペルを握ったさまは、魔法使いの少女……といった趣である。

特務支援課最年少のメンバー、ティオ・プラトーは、一切の感情を表に出さぬまま、ランディを横目に見上げた。

「私には、まったく理解できません。どうして彼らは、お祭りでケンカをするんでしょう？　まったく意味のない行為です」

「祭りでハイ・テンションになってるんだよ。ティオすけにもそんな時、あるだろ？」

「いいえ、私はまったく」

にべもなく言い放つ横顔は、とても十四歳とは思えない。

さすがにロイドも、場を和らげようと、笑顔を向けてみた。

「で、でもまあ、ティオも記念祭は楽しいだろ？　昨日はどっか遊びに行ったのか？」

「いいえ、部屋で落ちゲーを遊んでました」

「お、落ちゲー……そんなの、いつでもできるんじゃ……」

「街は、人が多くて疲れてしまいますので」

にべもないティオの言葉に、エリィも笑顔をこわばらせている。

「でも記念祭の間は、街中で楽しいイベントをたくさんやってるのよ。きっとティオちゃんが楽しめるものもあるわよ」

「そうでしょうか？　別に私は……」

と、言いかけたティオが……突然、ぴくんっ！　と反応した。

駅前広場で、子供たちの歓声が上がっている。

その中心にいるのは、たくさんの風船を持った、みっしぃ！

どうやら観光客相手の、宣伝イベントらしい。

その姿を見たティオが、静かに一歩、前に出た。

「みっしぃ……」

引き寄せられるように、ティオはじーっと、みっしぃを見つめている。

彼女のエニグマにぶら下がっているのも、みっしぃストラップ。

ティオは、今にも抱きつかんばかりの勢いだったが……数秒後、我に返ったように、首を横に振った。

「……いえ、今は勤務中です。がまんします」

ティオの言葉に、ロイドはぽんと彼女の肩を叩いた。

「えらいぞ、ティオ！」

「今度、休みになったら、一緒にミシュラムに遊びに行きましょうね」

しかし肩を抱くエリィに、ティオは訝しげな視線を送った。

「ありがとうございます。でもエリィさんは、ロイドさんと遊びに行きたいのでは？」

「な、なんで私が！　そんなこと全然考えてないわよ！」

「本当にそうでしょうか？　ランディさんはどう思います？」

問われて、ランディはさっと前髪を掻き上げた。

「ふっ……エリィお嬢は素直じゃないからな。俺たちには、本当の気持ちなんか言っちゃくれないだろうよ」

「ちょっとランディまで！　ロイドもなにか言ってよ！」

「う、うん。俺も、エリィと遊びに行きたいなんて全然思ってないよ。本当だよ……あれっ？

エリィ、どうかしたのか？」

だがロイドの言葉を聞いて、エリィは突如むくれて、そっぽを向いてしまった。

「ええ、そうでしょうよ！　どうせ私とは遊びに行きたくないわよね！」

「なんだよ、エリィ。さっき自分でも同じこと言ったのに……どういうことなんだよ、ランディ？　ティオ？」

けれど助けを求められたランディとティオも、心底呆れた表情に変わっていた。

「おい、ロイド……お前、またやっちまったな……」

「これはもう手遅れです。救助不能です」

「なにが手遅れなんだよ！　俺、さっぱり意味がわからないよ！」

戸惑うロイドの肩に、ランディはぽんと手を置いて言った。

「その鈍感さが、お前の最大の武器であり、弱点だ。ああ、もちろん戦闘とかじゃなく、恋愛方面の話だけどな」

「な、なんの話だよ、俺さっぱり……」

「いいんだ、さあ本部へ帰ろうぜ。これ以上、話を続けるとお嬢の機嫌がマックス悪くなっちまうからな」

ティオも、こくこくとうなずいて、出店を指さした。

「帰る前に、エリィさんお気に入りのジェラートを買ってあげることをおすすめします。ロイドさんの身の安全のためにも……さあ早く」

「よくわからないけど、じゃあちょっと買ってくる！」

ロイドは、腑に落ちぬ顔で、ジェラート屋へと走った。

ロイド、エリィ、ランディ、ティオ。

傍から見れば、まだ幼く、頼りなく見える彼らこそ、クロスペル警察、特務支援課のメンバーである。

そんな彼らの本拠地は、市内の中央広場近くにあった。

傍から見れば、古びた雑居ビルである。

特務支援課は新設されたばかりのため、警察本部に居場所がなく、まるで島流しのようにそのビルに追いだされた……と見る者もいる。

しかしロイドたちにとってその古びたビルは、自分たちが寝起きする家でもあったのだ。

＊＊＊＊＊

「お前ら、子供か。アイスなんざぺろぺろ舐めやがって」

特務支援課課長、セルゲイ・ロウは、広間に入ってくるなり、呆れて言った。

三十八歳。無精髭を伸ばし、常に煙草をくわえた彼からすれば、そろってジェラートを舐めているロイドたちの姿は、奇異に映っただろう。

しかしランディは、ソファに座ったたまま、肩をすくめてみせた。

「すみません、課長。しかしこれには深いワケが……」

「アイス食うのに、深いワケだと？」

「そうです。具体的に言うと、お嬢のご機嫌取りのために仕方なく……」

同じく広間では、エリィがむすっとしたまま、ジェラートを舐めている。

ロイドは、ひそひそとティオに耳打ちした。

「なあ、本当にこれで機嫌、直るのかな？」

「ご安心ください。ジェラートだけで足りない場合は、冷蔵庫に冷やしてあるスイートケーキを出せば、大丈夫でしょう。ねえ、ツァイト？」

ティオはそう言って、ソファの傍で眠る犬の背中を撫でた。

いや……犬ではない。

白と青灰色の毛に覆われた、大型の狼に似た生き物である。

神狼ツァイト。古から、このクロスベルの地を守護してきた聖獣である。

かつては群れを率いるボスとして山野に隠れ住んでいたが、とある事件を契機に、特務支援課と行動を共にするようになった、ある意味、課の一員である。

もっとも、普段はこうして本部に寝そべってばかりだが、ティオとは意志を疎通させ、人間たちの会話も理解している。

だがそんな風変わりな面々を前にしても、セルゲイ・ロウは叱ることもせず、いつもの放任主義で、見守るだけであった。

「まあ、いい……記念祭の間ぐらいは、大目に見てやる。一応、市長暗殺を未然に防いだんだ、アイスくらい好きに食え。その代わり、支援要請はきっちりこなせよ」

言われてロイドは、しゃきっと背筋を伸ばした。

「普段の数倍、観光客が来ていますし……記念祭が終わるまでは、要請も多そうですね」

「くくくっ……せっかく市長暗殺を防いで名前を売ったんだ。ここらが頑張りどころじゃねえのか？」

「まあ、確かに……」

ジェラートを食べ終えたロイドは、広間の隅に歩み寄った。

広間の端に据えられた導力ネットワークの通信端末には、毎日のように、警察本部から支援要請が送られてくる。

市民の誰が陳情しているかが、一目で分かるシステムである。

ロイドは、慣れた手つきで端末を起動し、画面に見入った。

「えーと、駅前広場の駐車取り締まり……これはさっき終わらせたな。迷子の親探し、これも完了……旧市街のケンカ騒ぎも解決済みと……ん？」

ロイドが首をひねると、仲間たちも集まってきた。

「どうしたの、ロイド？」

「何かいい事件はあったか？　水着の美女が助けを求めているとか？　水着を脱いだ美女が助けを求めているとか？」

「ランディさんのご希望は、いつも同じですね」

ティオは、じとーっとした目でランディを睨むが、ロイドは、画面に映った導力メールに顔をこわばらせていた。

「これは……」

【支援要請・クロスベル国際銀行】

【導力ネットワークの端末に外部からのハッキングが発覚しました。至急、調査をお願いしま
す】

【依頼主・マリアベル・クロイス】

ランディも、表情を引き締めて画面を睨んだ。

「クロスベル国際銀行っていや、大陸中からミラをかき集めてる銀行じゃねえか？　ところ
ハッキングってなんだよ？」

するとティオが、少し思案して声を発した。

「依頼にある通りです。導力ネットワークに不正に侵入することですね」

ティオは、年少ながらも、導力に関する知識は飛び抜けている。

元々、エプスタイン財団で教育を受け、魔導杖の実戦テストのため、特務支援課派に配
れたという経歴の持ち主だ。

ロイドも、ティオを頼るように問いかけた。

「クロスベル国際銀行なら、そのあたりの保守も万全じゃないのか？」

「はい、恐らく簡単にはハッキングできないでしょう。しかし不可能というレベルでもあ
せん。つまり犯人は、導力ネットワークに精通した者ということです」

「見過ごせないか？」

ロイドが問うと、ティオは力強くうなずいた。

が麻痺することになります」
「創立記念祭の今？　たしかにまずいな……」
ロイドの言葉に、ランディとティオも息を呑んだ。
「なるほど……創立記念祭の真っ最中に、そんなことをされちゃあ、クロスベル自治州の面目は丸つぶれだな」
「面目だけではありません。通信機能が途絶えれば、国境警備にも穴ができます。クロスベルが麻痺している間に、大国の軍隊がなだれ込んできたら大事です。ただし……」
ティオは、少し困ったような表情を見せた。
「今現在の法律では、ハッキングだけでは罪にはなりません。たとえ相手を捕らえても逮捕できないんです」
「……ああ、導力ネットに関する法整備は、不十分だって聞いたことはある」
ロイドは以前、新聞で読んだ記事を思い出した。
導力ネットワークがこのクロスベルに導入されたのは、数年前である。
以来、クロスベル市内には急速に導力ネットが普及したが、それに伴う規制や法律が追いつかない状況らしいのだ。
ハッキングなどという、新手の犯罪に対しても、事前に手を打つことは不可能。
だがそうと分かっていても、ロイドは決断を下した。

「ともかく国際銀行に行って事情を聞こう。たとえ逮捕できなくても、早く手を打った方がいいからな」
するとティオが、ふと何かを思いついた。
「待ってください。おおっぴらに国際銀行に入るのは避けましょう」
「どうしてだ、ティオ？」
「相手は、天下の国際銀行にハッキングをかけるような相手です。私たちが捜査に入ったと知れば、すぐに次の手を打ってくるかもしれません」
「そ、そうなのか？　でもどうやってこちらの動きを……」
「たとえば市警が街中に設置している監視カメラ……あの映像を盗み見て、国際銀行に警察関係者が入ったかどうか監視するとか……」
ティオの予測に、ロイドは顔をしかめた。
「そんなことまで出来るのか……わかった、まずは内密に捜査を進めるとしよう。もっともそれには国際銀行上層部の協力も必要だな」
と、ロイドが言った時……
ずっと黙っていたエリィが、おもむろに口を開いた。
「……大丈夫、きっと内密に調べさせてもらえるわよ」
「え……？」

「そのメールの依頼主、私の友達なのよ。マリアベル・クロイス……」
「はあっ？」
「彼女のお父様も国際銀行の関係者だから、事情を話せば、力になってくれるわ」
「そうだったのか……」
「好都合じゃねえか。さすがお嬢、いろんなコネを持ってるな」
安堵するロイドとランディに、エリィは軽く微笑んでみせた。
「まあ、それなりにね……でも、とても忙しい方だから、今この時期、クロスベル市にいらっしゃるかどうか……」
「どんな立場の方なんですか？」
ティオに問われて、エリィは咳払いをひとつした。
「……多分、知ってると思うけど、ディーター・クロイスさんっていうの」
「ええっ！」
ロイドが思わずたじろいだが、ランディは首をひねっている。
「なんだよ、有名なのか？」
「知らないのか、ランディ？　ある意味、知名度で言うなら、《アルカンシェル》のイリアさん並みかもしれない」
ティオもうなずいて、すらすらと言葉を連ねた。
「ディーター・クロイス……世界有数の資産家にして、国際経済の中心人物の一人……現在の

クロスベル国際銀行総裁ですね」
「おいおい、トップと知り合いなのかよ！」
驚くランディに、エリィは少し困った顔を見せた。
「ええ。元々、父の旧い友人だったの……おじいさまとも昔から親交があって……それで仲くさせてもらっていて……」
「じゃあマリアベルさんってのは、総裁の娘さんで……」
ロイドの問いに、エリィは懐かしそうに笑った。
「ええ。幼なじみなのよ。しばらく会っていないけど、たしか総裁の経営を手伝っていだわ」
ロイドは、意外な縁に驚嘆しつつ、エリィを見つめた。
「とにかく行ってみよう。クロスベル国際銀行へ……問題は、どう入るかだ」

＊＊＊＊

クロスベル市の北端に、巨大な高層ビルがそびえている。
他を圧する威容は、さながら経済の城塞。
それがクロスベル国際銀行の本行だった。

だがロイドたちは、犯人側の監視を避けるため、正面玄関ではなく、地下区画からビルに入った。

高層ビルの地下には、無数の制御施設があり、ロイドたちはその間を縫って進んでいく。

ロイドは、通路の壁面を覆う導力パネルや、張り巡らされた太いケーブル類に、目を丸くしていた。

「ここはもう国際銀行ビルか……地下にいても、建物の凄さが分かるな」

「そうね。これだけ先進的なビルは、大陸でも少ないと思うわ」

エリィは、人目を避けてこのビルに入ったことがあるらしく、仲間たちを先導していく。

途中、閉ざされたゲートにぶつかっても、持参していたカードを差し込んで、シャッターを開けていった。

「エリィ、そのカードは？」

ロイドに問われ、エリィはカードに入った国際銀行マークを指し示した。

「個人認証用のカードよ。以前、ディーター総裁に作っていただいたの。なにか極秘の相談がある時は、これを使いなさいって渡されて……」

「ディーター総裁に相談？　なんか凄いな」

「私も、まさかこんな事で使うとは思わなかったけど」

ランディも、しきりと辺りの様子に感心していた。

「なるほどな。しかし最新のセキュリティ技術を惜しみなく使ってるって感じだよな」

ティオも、興味深げにうなずいている。

「元々、クロスベル市における導力ネットワーク計画は、エプスタイン財団ではなく、クロスベル国際銀行の主導だそうですから。噂では、計画の六割の資金を負担しているとか……」

「半分以上か……だったら、ネットワークへのハッキングが成功すれば、クロスベル国際銀行にとっては大打撃だな」

ロイドが言うと、不意にエリィが歩みを止めた。

正面にあるエレベーターの制御装置にカードを差し込むと、小さな電子音が鳴る。

数秒遅れて、カードを認識したのか、天井近くのスピーカーから男声が響いた。

『来てくれたのか、エリィ！　待っていたよ』

その声を聞くと、エリィの表情にも安堵と、懐かしさが浮かんでいた。

「ディーターおじさま、お久しぶりです。今、参ります」

そしてロイドたちは、エレベーターで最上階へと向かった。

クロスベル国際銀行総裁、ディーター・クロイスの部屋へ。

「エリィ、久しぶりだ。半年ぶりくらいになるかな？」

ロイドたちを出迎えてくれたのは、ディーター・クロイス総裁本人である。

高層十六階の総裁室は、南向きの壁がまるまるガラス張りになっており、クロスベル市内が一望できた。

その部屋の主、ディーターは、四十代半ばであろうが、実年齢よりずっと若い印象で、仕立
ての良いスーツに身を包んでいる。

エリィは、昔なじみの人物に臆することもなく、会釈した。

「ディーターおじさまも、お元気そうで何よりです。捜査上、地下通路を使わせていただきましたが……」

「ははっ、水臭いことは言わないでくれたまえ。君は旧友の娘さんで、わが娘の幼なじみでもある。身内も同然だ、気にすることはない」

そしてディーターは、エリィの後ろに控えるロイドたちにも目を向けた。

「では、そちらの彼らが同僚なのかね？　例の特務支援課の……」

「初めまして。ロイド・バニングス捜査官です」

ロイドが敬礼をすると、ランディとティオもそれに倣った。

「ランディ・オルランド。よろしくッす」

「ティオ・プラトーです。初めまして……」

「なるほど……市長暗殺を未然に防いだというから、どんなチームかと思っていたが……私が想像していたより、ずっと若いんだね。これは素晴らしい」

総裁の言葉に、ロイドは少し首をひねった。

「あの、それはどういった意味で……」

「いやね、このクロスベルという街には、様々な旧弊がある。君たちのような若い人にとって

は、少々息苦しいのではないかね？」

「まあ、多少……」

ロイドが苦笑しながら言うと、ディーターは白い歯をちらりと見せた。

「……だろうね。だが君たちは、立派に功績を挙げている。これからも様々な障壁にぶつか
るだろうが、どうか諦めずに、がんばってほしい」

そう励ますディーターの笑顔は、やけに眩しいものだった。

見ようによっては、少し偽善的に見えたかもしれない。

だがロイドは、ディーターの声に力強い意志を感じて、再び敬礼を返した。

「ありがとうございます。それより支援要請の件ですが……」

「おお、そうだったな」

ディーターは、ロイドたちにソファを勧めると、自らもそこに座した。

「導力ネットワークにハッキングの形跡が見つかったのは、昨夜のことだ。どうやら外部か
不正にセキュリティを解除されたらしい。内密に処理してもよかったのだが……事が事だ
市警にも連絡を入れておこうと思ってね」

「そうでしたか……」

「そこで娘が、『せっかくだからエリィに助けてもらおう』と言いだしてね。それで支援要
を送ったというわけなんだ」

するとエリィが、身を乗り出すように聴取を始めた。

「おじさま、ベルは今どこに？」
「地下の端末室だよ。昨夜から、ハッキングした相手を突き止めようと躍起になっている」
それを聞くと、ランディがおもむろに手を挙げた。
「すみません。俺は導力ネットワークについては素人なんですが……どうやって犯人は、ネットワークに侵入できるんです？」
「俺も、そのあたりがピンと来なくて……」
ロイドも正直に白状すると、代わってティオが口を開いた。
「原則的には、導力ネットワークで繋がっている端末同士なら、どこからでもハッキングは可能です。もっとも高度な導力知識と技術が必要ですが……」
ディーター総裁は、困惑を浮かべて嘆息した。
「その通りだ。ちなみに、それを行う者をハッカーと言うらしい。導力ネットワークは、大陸全土でもまだ限られた地域でしか運用されていないが、早くもそういう事例が報告されているらしい」
「今時の犯罪者……ってことですか」
ロイドも、参ったという顔で天を仰いだ。
警察学校で、ひととおりの捜査術は習得したが、導力ネットワークの知識までは会得していない。
姿の見えない犯人を追えるのは、特務支援課でただ一人しかいなかった。

「ティオ、君が頼りだ」
ロイドは、すぐ側に座る少女に告げた。
「相手は、通常の捜査で逮捕できる相手じゃないようだけど……そのハッカーとやらを、捕まえられるかい？」
「……恐らく、可能でしょう」
ティオは、すっと視線を総裁に向けた。
「ただし、こちらのメイン端末を使わせていただく必要があります。そのご許可がいただければ、すぐにでも……」
「分かった、手配しよう。スタッフも詰めているから、詳細も聞けるはずだ」
ディーターが行内電話に何やら指示を下すと、エリィは深々と頭を下げた。
「おじさま、ありがとうございます。これで捜査もはかどります」
「礼を言うのは、こちらだよ。こんなに早く捜査を始めてくれるなんて……しかしエリィ、なかなか充実した部署のようだね、特務支援課は？」
「え……」
エリィが戸惑う表情を見せると、ディーターは一同を見わたした。
「最初、君が警察に入ったと聞いた時は、少々疑問に思ったものだが……なるほど、たしかに良い経験が出来そうな仲間たちじゃないか」
ディーターは、ロイドを見据えて続けた。

「さっきも言ったが、このクロスベルという自治州は、非常に難しい場所だ。一番、問題だと思われるのは、正義というものが完全に形骸化してしまっていることだ」
「正義の形骸化……ですか」
「うむ。このクロスベルでは、正義が曖昧でも、何とか成り立ってしまっているからね」
「……！」
ロイドも、ようやくこの人物が何を言おうとしているか、理解し始めた。
ディーターも察したようで、ロイドの目を真っ直ぐに見つめている。
「そうだ。政治腐敗や、マフィアの問題……それを市警が取り締まらなくても、経済的に恵まれているため、多くの市民は生活に困らない。結果的に、単純犯罪は少ないが、目に見えない巨大な悪がはびこっていく……」
「……大胆なことを仰いますね」
「しかし真実だし、この街の現状でもある。だが、そんな状況でも、やはり人は正義を求めざるを得ない。どんな形であれ、社会を信頼できる安心感を欲してしまうのさ。だからクロスベルでは、遊撃士の人気が高いのだよ」
それを聞いて、ランディも、捨て鉢な笑顔を見せた。
「なるほどね……他国に比べて、妙に遊撃士の人気が高いのはそのせいか」
ティオも、理論だったディーターの言葉に納得している。
「遊撃士のモットーは、民間人の安全を最優先で守ること……確かに正義の味方って感じがし

ますからね」
ディーターは、あらためてロイドたち四人に視線を送った。
「だが知っての通り、遊撃士協会が行使できる正義は、あくまで限定的だ。この街の歪みを根本的に解決することは不可能だろう。だからこそ私は、君たちに期待したいのだよ」
「えっ!?」
「遊撃士の代わりに悪を倒せってことっすか？」
驚くランディに、ディーターは明るく破顔した。
「ははっ、そんな単純なことを言うつもりはないよ。ただクロスベルにもまだ正義が存在している……そう信じられるきっかけを、市民に与えてほしいのさ」
ディーターは、テーブルに置かれたクロスベルタイムズを指した。
無論、その一面にも、市長暗殺を防いだ特務支援課の名前が載っている。
「まだまだ未熟だが、若い捜査官が正義を求めて奮闘している。その事実に、みんな期待しているのだよ」
ロイドも今一度、自分たちの立場を考えてみた。
特務支援課が創設されて数か月、市民からのあらゆる支援要請に応えることで、ロイドたちは次第に信頼を得つつあった。
今までのクロスベル警察は、政治的な思惑に枷をはめられ、市民の保護は遊撃士協会に任せる、というていたらくである。

しかし市民から英雄視される遊撃士協会も、政治腐敗には手が出せずにいた。
特務支援課こそ、あらゆる事態に対処できる、クロスベル唯一の存在だと、あらためて思い知らされた気がした。
「俺たちにどこまでできるかは、分かりません。ですが……ここまでしかできない、と物をはめることはしたくないです」
「…………」
「俺たちはこの街を……いや、今はそんなこと話している場合じゃないですね。早く捜査にからないと」
ロイドが席を立つと、ディーターが握手を求めてきた。
「こちらこそ、興にのって一席ぶってしまったよ。では頼む。この街を……それから私が娘同然に思っているエリィもな」
「は、はい……」
ロイドが自然に返事をすると、エリィが急に赤面し始めた。
「お、おじさま、それはどういう意味ですか！」
「いや、特別な意味はないよ。ただ同僚として頼む、と言ったのさ」
「あ、ああ……そうですよね。やだ、私ったら……」
「エリィ？　もしかして君……」
総裁は、ロイドとエリィを交互に指さして微笑んでいる。

エリィは、首まで赤く染めて、拳を握りしめた。
「違います、おじさま！　勘違いですってば！」
「何が違うのかな？　私にはどう見ても……」
あわててエリィは、ロイドの腕を引っ張った。
「行きましょ、ロイド！　さあ捜査、捜査！」
「あ、じゃあ、失礼します、総裁！」
ロイドは、引きずられるようにして、地下の端末室へ連行された。
だが地下では、さらに混沌とした状況がロイドを待っていたのだ……
「エリィ、久しぶりですわね！」
地下で出迎えてくれたのは、金髪を左右に巻いた勝ち気そうな女性だった。
マリアベル・クロイス。十九歳。
総裁の娘にして、エプスタイン財団で導力工学を学んだという。
その知識と経験を活かし、国際銀行の導力ネットワーク事業を推進する才女は、再会した途端、幼なじみをぎゅっと抱きしめた。
「元気でした、エリィ？　あなた、少し痩せたんじゃなくて？」
妙に丁寧な口調のマリアベルに、エリィは苦笑しながらうなずいた。
「鍛えているから少し筋肉がついただけよ。むしろ体重は少し増えたかも」

「なるほど……言われてみれば、筋肉のしなやかさを感じますわね。ふふふっ、これはこれでなかなかの感触ですわ～」

そう言ってマリアベルは、エリィの肢体を撫で回す。

エリィは、ロイドたちの視線に気づいて、幼なじみから離れようとした。

「も、もう……ベルったら、やめてよ。みんな見てるから」

「だめよ、ちゃんとエリィの身体をたしかめさせて～！」

絡み合う二人を、ロイドは冷や汗を流して見守るしかない。

「な、なんか凄い人だな……マリアベルさんって」

ランディも、複雑な笑みで、二人を鑑賞している。

「おお。しかし美人同士が絡むとそれだけで絵になるっつーか……これはこれで見応えがあるぜ」

ティオは、魔導杖を握ったまま、顔をしかめている。

「と言うか、ただの幼なじみには見えないんですが……」

エリィは、三人のじとーっとした視線に耐えきれず、どうにかマリアベルの抱擁から脱出して見せた。

「しょ、紹介するわね、ベル……彼らは私の同僚で、ロイドとランディとティオちゃんって……」

「紹介は結構ですわ」

「えっ？」
唐突に、マリアベルは厳しい表情に切り替わった。
「私の親友エリィの同僚ですもの。私自身の目で検分します」
「は、はあ……」
呆然とするエリィを放置して、マリアベルは三人の前に歩み出た。
そしてロイド、ランディ、ティオを一人ずつ、凝視していく。
「ふむ……なるほど……」
「あ、あの、俺たち、なにか……？」
マリアベルは、問いかけたロイドも無視して、ティオの腕をぐっと引っ張った。
そして不意に、にこっと笑いかける。
「あなたは合格。ふふふっ、可愛らしいですわね」
「はあ……」
小首を傾げるティオだが、マリアベルは、突如ロイドとランディに向き直り、きっと鋭い視線を突き刺した。
「でも、あなたたちは不合格ですわ！　こんなむさ苦しい男どもが、私のエリィの傍にいるなんて！　女神様も許さざる所業ですわね！」
「ええっ？」
「いや、むさ苦しいって……」
ロイドは無論、女性の扱いに慣れたランディですら、呆気に取られている。
エリィも驚いて、マリアベルを制しようとした。
「ちょ、ちょっとベル、いきなり初対面で……」
「初対面でもかまいませんわ！　大体、なんですの？　そのラフすぎる服装は！　せめてスーツくらい着るのが礼儀というものでしょうに！」
言われてロイドも、自分の服をつまんで見せた。
「こ、これはその……街中や市外で捜査する場合は、この方が都合がいいので……」
「魔獣と戦うこともあるんだ。スーツなんか邪魔だよなあ」
ランディも同意するが、マリアベルは二人を一喝した。
「言い訳は結構ですわ！　まったく！　だから私は、警察入りなんて反対したのよ。私の事を手伝ってくれた方が遥かに有意義だったのに……」
「ああ、もう……ベルってば……」
エリィは、くらくらと目眩をこらえている。
ロイドは、この幼なじみの関係をなんとなく理解した。
どうやらマリアベルは一方的に、エリィを溺愛しているらしい。
マリアベルは、まるで大切な娘を守る母親のように、ランディの女性好きも見抜いているようだった。
「特に、そちらの赤毛のあなた！　そんな派手な格好をして……そんなに服を着崩すなんて、

まるで女ったらしみたいですわよ！」
「お、俺は、まじめっすよ、マジでマジで」
「その言葉遣いが、女ったらしだと言うのです！」
「いやいやいや。俺はロイドみたいに、夜の屋上でエリィお嬢と、良い雰囲気になったりしませんよ～」
ランディが、わざとらしい一言を放つと、予想通り、マリアベルの瞳に、めらっと嫉妬の炎が浮かび上がった。
「な、なんですって～！」
「おい、ランディ、お前！」
「ご、誤解されるようなことを言わないでよ！」
ロイドとエリィも、声を揃えて否定するが、そこへティオが平然とした顔つきで油を注ぎまくった。
「本当に誤解でしょうか？　あの時以来、エリィさんもずいぶん雰囲気が柔らかくなったようですし」
「ティオちゃんてば！」
「ああもう、これ以上、引っ掻き回さないでくれ～！」
ロイドが嘆くと、その胸ぐらをぐいとマリアベルがつかんだ。
「ふふふ……ロイドさんと言ったかしら？　その辺りの事情をもう少し詳しく聞かせてくださ

い。私のエリィにどんな破廉恥な事をしたのか……」
「いや、してませんってば！　それより支援要請！　ハッキングはどうしたんですか、ハッキングは――！」
ロイドが叫ぶと、ようやくマリアベルも我に返った。
「そうでしたわね、来てくれとお願いしたのは、私ですものね」
マリアベルは、ロイドを放した途端、きりっとした表情に戻った。
「どうぞ、ご案内しますわ。我が銀行の中枢へ」
「ふう……助かった」
「あら、後できっちり事情聴取はしますわよ。覚悟なさい」
そう言って、マリアベルは歩き出し、ロイドたちも地下階へ向かった。
言うなれば、クロスベル経済の頭脳へと。
端末室は、ロイドたちの想像を遥かに超えた偉容を誇っていた。
広い空間には、端末がずらりと並び、オペレーターたちが立ち働いている。
画面には、各国の金融市場の推移が映し出されているようだが、ロイドとランディはただ然としてそれを見上げるばかりだった。
「なあ、ランディ、ここで何が行われているか、分かるか？」
ロイドが不安そうに聞くと、ランディも肩をすくめてみせた。

「さあな。デカい金を動かしてることは、確かだろうぜ」
「そ、そうだな……ティオはどうだ？」
　問われたティオは、あいかわらず冷静な顔で辺りを見回している。
「エプスタイン財団製の最新情報処理システムですね。たしかリベールの高速巡洋艦、アルセイユ号にも使われていると聞きましたが……」
「ええ、そうよ。もっともこちらは、大陸中から流れ込む莫大な導力ネット情報に対応するために、処理容量を数倍に強化していますけど」
　マリアベルが説明すると、エリィも思わず息を呑んだ。
「すごいわね……これをあなたが……？」
「一応、お父様から任されていますわ。さあ、こちらへ」
　マリアベルに導かれて進むと、中央端末の近くには、若い研究員たちが集まっている。
　彼らは、マリアベルの姿を認めると、一様にかしこまった。
「だめです、お嬢様……」
「ハッキングの侵入経路は確認できましたが、アクセス元はロストしています」
「メール転送システムにクラッキングをかけたことは分かっているのですが……」
　同時にしゃべり出した彼らに、ロイドは目眩を覚えた。
「す、すみません、もう少し素人にも分かるように説明してもらえますか？」
「お嬢様、こちらの方々は……」

　研究員たちが不思議がると、マリアベルは小さく微笑んで見せた。
「噂の特務支援課の皆さんよ。ほら、市長暗殺を防いだ……」
「ああ、あの……」
　と、研究員たちは感心しながらも、不審な目でロイドたちを見つめている。
　専門知識のない捜査官を呼んでも、この事態を終息できるとは考えていないようだ。
　それでもロイドは、一応捜査らしきものを開始した。
「ではハッカーとやらが、どこから入り込んだのか、分からないってことですか？」
「ええ、巧妙に痕跡を消しています」
「クロスベル市内ということだけは、間違いないけれど……」
「我々が追えないんだ。こうなっては、お手上げだよ」
　研究員たちはみな、ロイドを頼る気はないらしい。
　しかしロイドとて、この事態の危機だけは理解しているつもりだった。
「ですがそのハッカーを捕らえなければ、導力ネットワークが寸断され、都市機能が停止するかもしれないんでしょう？」
「言われなくても分かっているよ……ただし、このハッカー、かなりの曲者だ」
「次に現れたら、必ずとっつかまえるんだが……」
　どうやら研究員たちも、八方手を尽くしたらしい。
　だがそのやり取りを見ていたティオが、おもむろに進み出た。

「……端末を一つ、貸してもらってもいいですか？」
「え……」
「い、いや、それは……」
研究員たちが抗したのも無理はない。
目の前にあるのは、クロスベル国際銀行のメイン端末である。
まだ幼い少女に、おいそれと触らせていい代物ではなかった。
しかしマリアベルは、その時を待っていたとばかりに、うなずいた。
「いいですわ。ティオさんと言ったかしら。お好きにどうぞ」
「しかしお嬢様！」
「かまわないわ。私は、そのためにこの方たちを呼んだのですから」
ティオは、端末の前に座ると、ふうっと小さく深呼吸した。
「……アクセス。魔導杖補助機関、エイオンシステム起動」
そう言った途端。
ティオの魔導杖デモンズスペルの先端が、発光を始めた。
光は、急激に膨れあがり、ティオの身体全体を包んでいく。
その光量の強さに、マリアベルと研究員たちも思わず後ずさった。
「これは……」
「な、なんだこの子は……！」

ティオの能力を知るロイドも、固唾を呑んで見守っている。
するとティオは、端末に繋がるキーボードを、猛烈な速度で操作し始めた。
カタカタカタカタカタカタカタカタカタカタ……
走る指先は、あまりの速さに残像すら見えず、モニターの表示も凄まじい速度で切り替わ
ていく。
しかしティオは、あくまで冷静に操作を続けていた。
「多次元解析によるリアルタイム制御を試行……全端末のログを解析。隠蔽された痕跡の
における不審なアクセスを全て精査……」
変転するモニター表示を見て、研究員たちが一斉に青ざめた。
「おい、冗談だろ……」
「なんだ、この処理速度は……！」
「君はいったい……」
ティオは、画面を見つめたまま、研究員たちに告げた。
「サポートをお願いします。クロスベルの全ターミナルに管理者権限でアクセスをかけます
不審と思われるログを吐き出すので、チェックをお願いします」
「あ、ああ……！」
「任せてくれ！」
研究員たちも、自らの端末に取りついて、作業を開始する。

ロイドは、緊迫感を覚えながらも、この場の状況から置いてきぼりにされているように思えてならなかった。

「……なあエリィ、今なにが起こっているか、分かるかい？」

「う、ううん……流石についていけないわね」

エリィも肩をすくめると、ランディも短く嘆息した。

「俺なんざ、何をやってんのか、理解すらできてねぇぜ……それにしてもティオすけは、たいしたもんだな」

そしてマリアベルは、一心にティオの動きを観察していた。

「なるほど、ティオさんは魔導杖の使い手ですのね……導力魔法をノーウェイトで発動するための高速展開技術が使われているようですが、それを端末のコントロールに利用しているのでしょう」

すると、ようやくティオの動きが止まった。

魔導杖の光も消え、少女はふーっと息を吐き、研究員たちに視線を向けた。

「……いかがですか？」

研究員たちは、ティオが解析した情報を必死に追い、やがて……

「チェック終了、こちらの持ち分はシロだ」

「こちらも見あたらない。そっちはどうだ？」

「待ってくれ……あったぞ！　不正アクセスポイントは、地下区画B、第八制御端末……ここからアクセスしたらしい！」

研究員たちが歓喜すると、ロイドは記憶の糸をたぐり寄せた。

「地下区画B……市の北西部だな。住宅街や歓楽街の辺りか」

「ロイド、どうするの？」

「勿論、行ってみよう」

エリィの問いに、ロイドはすぐ答えた。

「地下区画には、長年放置された場所もたくさんある。魔獣が入り込むだけじゃなく、犯罪者のアジトになっているかもしれないからな」

「そこにハッカーがいると？」

「分からない。端末を使った場所にずっと居るとも思えないが……とにかく手がかりはそれしかないんだ。行って確かめる他ないだろう」

ロイドが、ようやく本領の推理力を発揮し始めると、マリアベルも少し見直したような視線を送ってきた。

「ふふ……どうやら事件の核心に迫ってきたみたいですわね」

「ええ、ご協力、感謝します」

だがロイドの言葉に、研究員たちはこぞって恐縮した。

「い、いや、我々は何も……」

「僕らより、そのお嬢さんの手柄の方が大きいと思うよ」

しかし当のティオは、大事を解決した風はない。
そんなティオに対し、マリアベルは優しげに微笑した。
「どうかしら、ティオさん。エリィ共々、このクロスベル国際銀行へ転職するというのは？」
「え……？」
「ちょ、ちょっとベル……！」
戸惑う二人に、ロイドは思わず割って入った。
「えっと……それはさすがに勘弁して欲しいんですけど……」
「引き抜きたくなる気持ちは、分かりますけどねぇ」
ランディも苦笑すると、マリアベルは悪戯っぽく舌を出して見せた。
「冗談ですわ。ただ、ティオさんのように導力ネットワークに精通した方は、大陸広しといえど、わずかなはず……引き抜きたくなっても当然でしょう？」
「まあ、それは……」
ロイドはうなずきかけて、ふと気づいた。
「だったらマリアベルさん……ここまで保全が厳重な国際銀行の端末に侵入したハッカーも、高度な導力教育を受けているということでしょうか？」
「ええ、勿論」
「もしやエプスタイン財団の関係者……という可能性はありませんか？」
ロイドが言うと、マリアベルの眉毛がぴくっと上がった。

「……素人と言う割りには、鋭いことを仰るのね」
「素人だから分かることもありますよ。導力に通じた人間は、まだ少ない。意外に特定するのは、簡単かもしれません」
「ふーん……」
マリアベルの、ロイドを見る目が少し変わってきた。
だがロイドから見れば、アクセスポイントを割り出すなどという意味不明な方法より、国際銀行に侵入できるほどネットワークに長けた人間を捜す方が、遥かに容易く思えたのだ。
ティオも、深くうなずいて口を開いた。
「私も同感です。あれだけのネットワーク技術を使える人間は限られています。それにハッキングのクセにしてもどこかで見た事があるような……」
「そうなのか？」
「私も、エプスタイン財団の関係者ですから」
マリアベルもそれを聞いて、何やら考えこみ始めた。
「なるほど……忌々しい相手ではありますが、そのハッカー……もし見つけても、そのまま放置しておいていただけますか？」
「え！」
「ど、どういうことなの、ベル？」
ロイドとエリィが叩くと、マリアベルは不敵に笑った。

「現時点では、ネットワークに侵入しただけで、犯罪を犯したわけではありません。それに元々、ハッカー行為を取り締まる法律も、まだ成立していませんから」
「それはそうですが、都市機能を停止させられては……」
ロイドが言い返すと、マリアベルはちっちっと指を左右に振った。
「無論、そこまでさせる気はありませんわ。けれど凄腕の技術者なら、協力を取り付けたうえで、こちらのプロテクト技術の向上に役立ってもらった方がいいと思いまして」
「は、はあ……」
「銀行機能の導力化を実現するにも、ハッカー対策は不可欠ですからね」
マリアベルが嬉々として言うと、ランディは呆れて声を上げた。
「あえて敵を取り込むか……いやいや、大胆と言うか、豪胆な人だねえ」
ロイドも困惑しながら、マリアベルに敬礼をした。
「ハッカーをどうするかは、捕まえてからにしましょう。とにかく我々は、地下区画へ向かいます」
「よろしく、吉報を待っていますわ」
マリアベルも、おどけて敬礼を返してくる。
ロイドにとっては、奇妙に思える捜査が始まった。

＊＊＊＊＊

クロスベル市の地下区画は、広大である。
地下区画は、導力ネットワークを支える送導ケーブルや、上下水道などをまとめて管理しているため、市内全域に広がっている。
ロイドたちは、市の管理課から許可を得ると、すぐさま地下区画Ｂへと向かった。
「しっかしなんでまた、こんな日に……」
ランディは、先頭に立って、薄暗い地下通路を進んだ。
「地上じゃあ、創立記念祭でみんな楽しくやってるんだぜ？　どうして俺たちだけ、こんな穴蔵を這い回らなきゃいけないんだよ」
「ぼやくな、ランディ。愚痴ならハッカーに言えよ」
ロイドは、左右に得物を握りしめて、辺りを警戒した。
彼が手にしているのは、衝撃警棒バトルハンマー。
いつ何があってもいいように、臨戦態勢でランディの後に続いていく。
ロイドの後ろでは、エリィが導力銃ラスティネイルを構えていた。
「そのハッカーだけど……本当の目的は何なのかしら。いまだに何の要求もしてこないようだ

けど」
「さあね。俺はデモンストレーションだと思ったんだけど、もっと他に、目的があるのかもしれないな」
ロイドは言って、金属製の通路を奥へと進んだ。
最後尾では、ティオが魔導杖デモンズスベルをかざし、周囲の情報を収集している。
「この辺りは、クロスベル市の水道施設のようですね。ハッカーが使った第八制御端末は、もっと上層にあるはずです」
「よし、向こうにエレベーターがあるはずだ。それで上がろう」
ロイドも地図を確認しながら、通路を曲がっていく。
やがて地下通路は、資材を運ぶための大型エレベーター・シャフトにたどり着いた。
ロイドは、操作盤のボタンを押して、天井を見上げた。
「エレベーターは上層で止まってるようだな……」
ゴウゥゥン……という機械音と共に、シャフトの上からエレベーターが降下してくる。
しかしティオが、機械音に紛れて、まったく別の気配が近づいていることに気づいた。
「待ってください、属性探知っ……！」
「なんだって！」
「急速に接近しつつあります！　反応は複数っ！」
ロイドたちは、一斉に今来た通路を振り返った。

すると左右の路地から、なにかを吸引するような音が迫ってきた。
ロイドは衝撃警棒を、ランディは斧槍を構えて、前衛に立つ。
エリィは導力銃を、ティオは魔導杖を握って、接近する何かに目をこらした。
「なんなの、魔獣？」
「暗くてよく見えませんが……でも、あれは……」
ティオが魔導杖をかざした時。
その光に照らされて、ふたつの巨体が闇から浮かび上がった。
現れたのは、全身を金属に覆われた、二足歩行の導力オートマタ……つまり導力機関で動く機械生命。
ごうんごうんと推進機関を唸らせ、滑るように前進してくる。
だが、ものものしい姿とは裏腹に、オートマタは前面から床のゴミを吸い取り、通路をきれいに清掃していたのだ。
「なんだ、清掃用のオートマタか、威かすなよ」
ランディは、だらりと斧槍を下ろす。
ロイドも、息を吐いて、緊張を解いた。
「市が管理している自律式のオートマタだな。いったんプログラミングしておけば、後は勝手に掃除してくれるって奴だろ？」
「それにしても、凄い吸引力ね。私もあんな掃除機、欲しいわ」

エリィも笑って言うが、ティオだけは顔をこわばらせたままだった。
「油断しないでください、皆さん！　あれは……」
警告の途中で……
二台の清掃オートマタが、吸引口をロイドたちに向けた。
同時にロイドたちの周囲の大気が渦を巻き、清掃オートマタに向かって、引き寄せられていったのだ。
ロイドとランディも、その渦に呑まれ、一気に吸引口へたぐり寄せられた。
「ちょっと待てぇ！」
「俺たちはゴミじゃねえぞ！」
二人の叫びも無視して、清掃オートマタは吸引を続ける。
だが、さすがに吸引口は狭い。
ロイドとランディは、吸い込まれこそしなかったものの、凄まじい力で吸引口に張り付いてしまった。
「どうなってんだ！　これは！」
「人間を清掃するオートマタなんて聞いたことねえぞ！」
二人は、必死に離れようとするが、吸引力は強い。
路地に逃れたエリィとティオは、遠くから必死に声を飛ばした。
「いったい、なんなの、あれは！」

〈どうやらセンサーが故障しているため、ゴミと人間の区別もついていない……言うなれば、暴走機械です！　早く二人を助けないと……〉
叫ぶうちに、清掃オートマタの胴体から小さなアームがいくつも伸びてきた。
その先端には、鋭利なカッターや回転するチェーンソーが付いている。
吸引口に入りきれない大きな獲物を、細かく切り裂くための腕である。
その刃の閃きに、ロイドは背筋を凍らせた。
「冗談じゃない！　なんとかして逃げるぞ！」
ロイドは、左右の衝撃警棒に念を込めた。
その念が、両手を伝ってバトルハンマーに流れると、衝撃警棒はばりばりと激しい電光を放った。
「壊れた機械は叩けば直るっ！」
叫んで、ロイドは電光をまとった警棒をオートマタに叩きつけた。
すると電光は、光の蛇の如くオートマタに巻き付き、炸裂する。
ロイドが得意とする制圧用の必殺技、スタンブレイクをくらって、清掃オートマタはショートしながら、吸引を止めた。
「今だっ！」
ロイドは、ようやくオートマタから離れて、態勢を立て直す。
一方、ランディも、身動きが取れぬまま、どうにか斧槍の先端を吸引口に向けていた。

「帰ったら市の管理課にクレームつけてやるー　壊れたオートマタを放置するなんざ、ずさん過ぎるぜ！」

叫喚と共に、斧槍ライアットバスターから炎があふれ出た。

火の属性魔法マグナブレイズは、清掃オートマタの内部まで焼き切ると、吸引は止まり、迫っていたアームも動きを停止した。

「あぶねえっー　もう少しで粗大ゴミだぜ！」

ランディも危地を脱すると、導力魔法の準備を終えたティオが、おもむろに魔導杖を振りかざした。

すでに清掃オートマタの分析は終わっているらしい。

「最も有効なのは、属性率二〇〇％の水属性！　行きます、ハイドロカノン！」

瞬間、ティオが突きつけた魔導杖の先から、青白い閃光がほとばしる。

直線状の奔流となった水属性の導力魔法ハイドロカノンは、二台のオートマタを共に捉え、正面から直撃した。

途端に、オートマタ内部から無数の火花が散り、がくがくと故障したように震動する。

エリィもその攻撃を見て、右腕をかざした。

「分かったわ、じゃあこっちも……アイスハンマー！」

エリィも、水属性の導力魔法をオートマタに打ち込んだ。

ティオが放った一撃ほどの威力はないが、エリィも一台のオートマタめがけて、上空から氷

塊に似た魔法を落下させた。

ぱすんっー　という着弾音と共に、オートマタはその場に凍結され、動きを止めた。

そこへランディが素早く、斧槍を振り下ろしたのだ。

「いい子だ、そこでおとなしくしてな！」

大上段から振り下ろした斬撃は、オートマタを脳天からひしゃげさせた。

だがその一撃で仕留めた……と思った次の瞬間。

オートマタの内部から閃光が走り、ランディを巻き込む形で盛大に爆発したのだ。

「つあっっ！」

ランディは、壁面まで吹き飛ばされ、倒れ込む。

ようやくロイドも、清掃オートマタの妙な機能に気がついた。

「自爆したのか？　どうしてそんな機能が！」

エリィは、導力銃を撃ちつつ、ランディを助け起こした。

「しっかりして、ランディ！　ほら、立てる？」

「くっ……絶対、クレーム入れてやるぞ、畜生……」

ロイドの背後では、ティオが表情を曇らせていた。

「恐らくプログラムにも支障を来しているようです。本来なら使う必要のない自己破壊能力も起動している……」

「つまり近づいてとどめを刺せば、巻き添えになるのか」

「遠隔攻撃で仕留めましょう！　ビームザンバー！」
ティオは、残った一台へ魔導杖を振るった。
延伸した光の刃に押し退けられ、オートマタは後ずさりする。
続けてロイドも、導力魔法を顕現させた。
「くらえ、アイスハンマー！」
接近戦を得意とするロイドも、導力魔法の心得はある。
エリィ同様に、氷塊を落下させると、直撃をくらったオートマタは粉々に吹き飛んだ。
距離をとって仕留めたロイドは、飛び来る爆風を手で避けた。
「……ふぅ……とんだ邪魔が入ったな」
振り向けばランディが、エリィの治癒魔法を受けている。
ランディは顔をしかめつつ、ロイドに吼えた。
「くそっ、ハッカーの奴、こんな面倒に俺を巻き込みやがって……見つけたら、髪の毛をちりちりに燃やしてやるぜ」
「髪の毛がある相手なら、いいけどな」
ロイドはほっとして、エレベーター・シャフトを見上げた。
第八制御端末は、もう間近であった。

上層に着いたロイドたちは、再び地下通路を奥へと進んだ。

辺りの景色は、あいかわらず金属の壁とケーブルばかり……
だがロイドは、通路の先から聞こえる異質な音にすぐ気づいた。
「なんだ……音楽？」
耳を澄ませば、確かに軽快な電子音が聞こえてくる。
緊張感のないその音色に、エリィが眉を曇らせた。
「この先に、誰かいるのかしら？」
「それこそハッカーの野郎じゃねえのか？」
ランディが斧槍を構えると、ティオも小さくうなずいた。
「この辺りには、市の職員も滅多に来ないようですし、アジトを作るにはもってこいかもしれませんね」
「よし、みんな警戒して進もう」
ロイドは、先に立って前進すると、すぐに音の出所を突き止めた。
音楽は、通路の左側にあるドアから漏れていたのだ。
「（足音を立てるな）」
ロイドは、目で合図を送ると、ドアに忍び寄った。
背後ではいつでも突入できるよう、エリィたちが武器を構えている。
しかし隙間から内部の様子を探ると……
「…………！」

ロイドたちは、意外すぎる内部の様子に驚いた。
その部屋は、瀟洒なソファとテーブルがあり、卓上には出前で取ったらしい、食べかけのピザが置かれている。
壁際には、人間の背丈を上回る導力コンピュータの筐体がそびえ、大型モニターが七つも繋がれていた。
その端末の前では、金髪の少年が背を向けて、キーボードをカタカタと叩いている。
軽快な音楽は、彼の足下にある導力コンポから流れていた。
「さ〜てと、今日も荒稼ぎするかね〜」
少年は、うきうきした口調でモニターに見入っていた。
「まずはラインフォルト社の新型鉄道車両のスペック……それからヴェルヌ社の新型高級車のスペック……へえ、ＺＣＦでは新しい型の定期船を開発してんのか……オーバルギアの開発といいあそこも相当飛ばしてるよなあ」
その様子に、ロイドたちは顔を見あわせた。
少年は、様々な企業の内部情報に不正侵入しているらしい。
「（……なあ、まさかあの子が……）」
「（……信じられないけど、たぶんそうよ）」
「（嘘だろ、あんなガキがハッカーなのか？）」
ロイドたちが小声でささやき合っていると、ティオが一人、大きなため息を吐いた。

「(……やっぱり、彼でしたか……)」
「(知り合いなのか、ティオ?)」
「(ええ、まあ、一応)」
ロイドに問われて、ティオは不承不承うなずく。
その間に少年は、次々と情報を導力ネットワークに流し、嬉々としている。
「どこの会社も、セキュリティゆるいよなあ。国際銀行だって意外に簡単に入れたし……これだけあちこちハッキングして、いまだに捕まらないってことは、このヨナ様の足取りを追えるヤツなんて、一人もいないってことだねえ、ははっ!」
ロイドは、静かにドアを開けて少年の背後に立った。
「それはどうかな?」
「なっ……!」
驚く少年を、ロイドとランディが取り囲む。
ロイドは、逃げられぬように彼の肩をつかんだ。
「どうやら君が、国際銀行に忍び込んだハッカーのようだな」
「こんな所に棲み着きやがって……」
「な、なんだ、あんたら……いったい……」
言いかけた少年は、ロイドの胸の記章に気がついた。
「ま、まさか市長暗殺事件の……特務支援課かよ!」

「ああ、その通り」
「暗殺事件じゃなく、暗殺未遂事件と言え、未遂と」
ランディが言うと、エリィも導力銃を構えたまま、入室した。
「どうやらこの子一人だけらしいわね。辺りに誰かいる気配はないわ」
だが踏み込まれてなお、ヨナと名乗った少年は首を横に振った。
「い、いや、ありえるもんか! この天才ヨナ様の足跡を追って、ここまでたどり着けるなんて……」
「いいえ、ありえます」
静かに言って、ティオも部屋に足を踏み入れた。
「……あいかわらずですね、ヨナ・セイクリッド」
「お、お前は、ティオ・プラトー!」
ヨナは、苦虫を噛み潰したような顔になった。
明らかに知り合い……しかもヨナは、自分を出し抜けるほどの実力者として、ティオを認めていた。
ロイドは、ティオに向かって問いかけた。
「どういう知り合いなんだ、ティオ?」
「エプスタイン財団の同じ研究所にいた事があるんです。もっとも専門が違ったので、それほど親交はありませんでしたが」

「くそっ、たしかにあんたなら、ボクの痕跡を追えるハズだよな！　ああもう、あんたがいると分かってたら、もっと念入りに仕掛けたのにっ！」

悔しがるヨナに、ティオはにべもなく言い放った。

「詰めが甘いですよ、ヨナ。そんな事だから、悪戯をして財団に大損害を与えるんです」

「う、うっせーな」

ふくれたヨナを、ランディが面白そうに見下ろした。

「なんだ、その大損害ってのは？」

「彼は幼い頃から、財団の研究所でシステムエンジニアとしての英才教育を受けていたのですが……」

ティオは、導力コンピュータをしげしげと眺めつつ言った。

「悪戯がひどく、ある時、研究成果の一つを台無しにしてしまったんです。そして、それを怒られるのが嫌で出奔したらしく……」

「な、なんだそりゃ……」

ロイドが呆れると、エリィも脱力して導力銃を下ろした。

「そんな理由で逃げ出すなんて……そのまま財団で学べば、一流の研究者になれたのに」

「やれやれ……見たまんまのガキってわけか」

ランディも拍子抜けして、頬をぽりぽりと掻いた。

だがヨナはまだ、アジトを突き止められた屈辱にわなないていた。

「く、くそっ……言いたい放題言いやがって……ティオ！　財団に告げ口したりすんなよ！したらあんたの恥ずかしい秘密を導力ネットにばらまいてやるからな！」

「どうぞご勝手に。知られて恥ずかしい秘密なんてありません」

ティオは、気にもせず言いきった。

「もし、あったとしても、あなたにつかまれるような隙は見せませんし、ネットにばらま
たとしても、私ならすぐに対処できるでしょうから」

「く、くぅ～！」

黙りこくるヨナに、ランディも思わず笑ってしまった。

「ははっ、どうやらティオすけの方が、完全に役者が上だな」

「らしいね」

ロイドも武器をしまって、ヨナに向き直った。

「それで……ヨナと言ったな。君はここで一体、何をしているんだ？　国際銀行にハッキ
した理由は？」

「っせえな！　あんたにそれを話す義理は……」

「答えなさい、ヨナ」

ティオは、まるで厳しい教師のように言った。

「この場所にたどり着かれた時点で、このゲームはあなたの負けです」

「ぐっ……分かったよ。ボクはな、今このクロスペルで、情報屋をやってるんだ」

ロイドは、思わず耳を疑った。
「情報屋だって？」
「おいおい……ガキには似合わねえ職業だな」
ランディが言うと、今度はヨナが呆れて見せた。
「はっ！　今時の情報屋は、年齢なんか関係ないっつーの。このクロスベルには、とにかくいろんな情報が集まってくる。帝国や共和国、国際企業の支社なんかも多いしな。そういった所の情報が導力ネットを通じて流れるんだよ。けど、まだセキュリティ意識も低いから、美味しい情報を喰い放題ってわけさ」
ヨナがすらすら説明すると、エリィが眉をひそめた。
「それって……どう考えても違法じゃないの？」
しかしティオは、ため息混じりに肩をすくめる。
「ですから、それを取り締まる法律が、まだないんです。法制化は、時間の問題だと思いますが……」
ヨナも、嬉しそうに椅子の上でくるくる回っている。
「ま、財団の研究室も飽き飽きしてたから、ここで情報屋を開いたってわけ。へへ、あちこちハッキングして、集めた情報を横流しすれば、ガッポリ儲かるんだぜ」
それでもティオは、平然としてヨナを横目で見た。
「しかし、私がクロスベル警察に出向していたことは知らなかったみたいですし……少々、情

報屋としては甘いのでは？」
「うぐっ……仕方ないだろー　ボクだってクロスベルの事を全部は把握してねーんだし！」
むくれるヨナに、ロイドは声を低めて聞いた。
「じゃあ都市機能をダウンさせるような目論見は……」
「なんだよ、それ？　こっちは導力ネットワークがあってこそ、生きていけるんだ。そんな真似、するわけねーじゃん」
「そうか……こちらの取り越し苦労だったのか」
ロイドたちは、顔を見あわせて安堵した。
意外な結末ではあったが、悪い方向に転がらないだけマシというものだった。
しかしランディは、ヨナの部屋をじっくりと吟味した。
「さて……問題はこの小僧をどうするかってことだな」
「な、なんだよ……もうボクに用はないだろ？」
「あのな……この地下区画は、クロスベル市の施設だ。どう考えても不法占拠だろう？」
言われて、ヨナは頬を膨らませた。
「ふ、ふん……使われてない場所を有効活用して何が悪いってんだ。それに地下区画を勝手に利用しちゃいけませんって法律は無いはずだぜ！」
「あのな、利用していいって法律もないんだよ」
ロイドが叱ると、エリィが食べかけのピザを指さした。

「それに、こんな場所で暮らしていたら不健康よ？　食生活にも問題ありそうだし……」

「……ですね。宅配ピザの箱ばかりですし。まさかここまで運んでもらっているのですか？」

ティオが問うと、ヨナは手を打ち振った。

「んなわけねーじゃん。ゲートを出たあたりまで、いつも届けてもらってるんだ。それにこのすぐ先に、出口近くに通じている排気ダクトがあるからな。そっちを使えば、安全に出られるってわけさ」

「だめだこいつ……ここに引きこもる気満々じゃねえか」

ロイドも、当惑をこらえてヨナに諭した。

「まあ、今回は見逃すけど、あんまり悪さをしたり、やり過ぎたりするんじゃないぞ？　恨みを買って危ない目に遭うかもしれないし」

「はっ、そんなヘマするかよ。ま、あんたらも欲しい情報があったら来なよ。ただし、ボクは高いぜ？　新米捜査官に払えるとは思えないけどな～」

「あのなあ……」

すると、絶句したロイドの肩に、ティオがぽんぽんと優しく触れた。

「大丈夫です、ロイドさん。いざとなれば、私がここにハッキングして、必要な情報を取りだしますから」

「な、なにぃ！」

ヨナは、また敵愾心を剥き出すが、相手が悪すぎると悟ったのか、すぐまた苦い表情に戻ってしまった。

「調子に乗るなよ、ティオ。お前より凄いハッカーだって、ネットには居るんだからな」

「……ふむ、興味がありますね。何者です？」

「それが分からないから、凄いんだよ。ボクも正体を突き止めようと、何度か追っかけたけど、まるで追いつけなかったんだぜ？」

ロイドは、ふとそのハッカーの存在が気になった。

「まだそんな奴がいるのか？　名前も分からないとか？」

「いや、さすがに名前だけは知れ渡ってるぜ。そいつの名は、《仔猫》……ハッカー仲間の間じゃあ、知らない奴はいないよ」

ヨナが勿体ぶって言うと、珍しくティオが反応を見せた。

「……ヨナ、もう少し詳しく、その話を聞かせてください」

第二章　《仔猫（キティ）》を追って

すでに時刻は夕暮れになっていた。
だが地下区画のヨナの部屋には、夕陽すら射し込んでこない。
ロイドは、ヨナが出したクリスピークリームドーナツを口にしながら、謎のハッカーについて問いただした。
「《仔猫》か……可愛らしい名前だけど、本当にそんなハッカーがいるのか？」
「嘘言っても仕方ねーだろ。初めてそいつと遭遇したのは、半年くらい前だったかな」
ヨナは、憮然とした表情で回顧した。
「いくつかの会社にハッキングしてたら、突然、知らない奴に追跡されたんだよ。そん時はあわてて侵入経路を切断して逃げたけど……」
「侵入した会社側の人間じゃないのか？」
「ちがうね。それ以来、ボクの仕事に何度もちょっかいかけて来るようになったんだ。他の企業に忍びこんだ時には、こっちをバカにするように、《仔猫》ってハンドルネームを送りつけてきたんだ！」
話を聞いて、エリィは首を傾げた。

「ハッカーって、まだまだ珍しい存在だと思っていたけれど……あなたみたいな人が他にもいるのねえ」
「そりゃあ、最初はボクだって何かの間違いかと思ったぜ！　ボクに匹敵する天才ハッカーがこの街に、もう一人いるなんてさ！」
だがその台詞を、ティオは冷静に一蹴した。
「匹敵するというより、どう考えてもその《仔猫》の方がハッキングの腕は上だと思いますけど……」
「ぐぬぬっ……」
「まあ、あなたの本来の専門は、システム言語の開発ですし……ハッキングで負けたからといって、あまり気落ちしなくていいかと」
「余計な慰めはいいんだよっ！」
ヨナは、鼻息も荒く、椅子の上でふんぞり返った。
「と、とにかくボクとしては、そいつに一矢報いたいんだ！　そのうち、何とかアドレスを割り出して、アクセスポイントをつかんでやる！」
「ふむ……」
ティオは、黙して何か思案しているようだった。
ランディは、コーヒーを飲みつつ、その表情を窺っている。
「どうした、ティオすけ、やけに気になるようだな？」

「はい……そのようなハッカーがこの街にいるというのは初耳です。ヨナのように、こそ泥め
いたハッキングなら、たいした問題ではありませんが……」
「誰が、こそ泥だ、誰が」
むくれるヨナを無視して、ティオは熟考した。
「もしかしたら、その《仔猫》こそ、私たちが警戒すべき相手なのかもしれません。ロイドさ
んが最初に推理したような……」
「導力ネットワークを機能停止できるような奴ってことか」
ロイドは、低く呻いた。
「ティオ、その《仔猫》とやらを捕まえられるか？」
「やってみなければ分かりません。それに《仔猫》がネットに現れるという保証もありません
から……」
するとヨナが、ティオに向かってにたりと微笑んだ。
「へへっ、もうエサは撒いてあるぜ」
「どういう意味です、ヨナ？」
「こっちもそれなりに、傾向を分析したのさ。どうやら《仔猫》はいつもネットに張りついて
いるわけじゃないけど……奴が興味を持ちそうなネタを、前々からネットにバラ撒いておいた
んだ」
それを聞いたティオは、小さな顎を指でつまんだ。

「なるほど……となると、どちらか一人が囮役になって《仔猫》をおびき寄せ……その間に、
もう一人が別のアクセスポイントから《仔猫》の侵入経路を割り出す……」
「おい、待てよ、ティオ」
「それを何度か繰り返して、《仔猫》を追い込んでいく……そういった段取りなら、捕まえる
ことも不可能ではない……」
方策を打ち出したティオに、ヨナはごくりと唾を飲みこんだ。
「じゃ、じゃあボクとあんたで《仔猫》を捕まえるのか？」
「そうです。あなただって、たった今、一矢報いたいと言ったじゃありませんか」
「ま、まあ、たしかに……」
ヨナが身震いすると、その背中をランディがどん！　と叩いた。
「しっかりやれよ。素人の俺たちは、高みの見物だがな」
「ちぇっ、いい気なもんだぜ。でもボクとティオだったら、《仔猫》の処理に追いつけるはず
だ。うん、やれる！　勝てる！」
ヨナは、端末に向かうと、モニターに地下区画の地図を表示した。
「だったら、端末がもうひとつ必要だな。ちょうど地下区画Aの奥に、第三制御端末ってのが
あるんだ。ここはコアルーターが別だから、挟み撃ちには打ってつけのはずさ」
「なるほど……都合が良さそうですね」
ティオがうなずくと、ロイドは急いでドーナツを口に詰め込んだ。

「だったら善は急げだ。すぐに、その第三制御端末に向かおう。ティオはそこで……」
「はい、《仔猫》を待ち伏せします」
ロイドたちは、立ち上がって武器を握りしめた。
「第三制御端末まで、だいぶ距離があるな。また途中で妙な敵に出くわすかもしれない。気をつけて行こう」
ロイドは、ヨナの肩をぽんと叩いた。
「向こうに着いたら連絡する。それまで遊んでるなよ？」
「わかってるって！　相手はあの《仔猫》なんだ、こうなりゃ、もっと美味しそうなエサをばら撒いてっと……」
ヨナが、はりきってキーボードを打ち始めると、ロイドは思わず、複雑な苦笑いを浮かべてしまった。
「頼りになるんだか、ならないんだか……まあいい、行こう！」
ロイドたちは、ヨナの部屋を飛び出し、再び地下迷宮へと戻っていった。
地上では、創立記念祭二日目の夜が始まろうとしている……

「せいっ！　はっ！」
ロイドは、左右の衝撃警棒を鋭く振り抜いた。
地下区画Aに入って、数十分。

すでにロイドたちは、五度目の魔獣の襲撃をむかえていた。
「まさか、こんなにいやがるとはな！」
ランディが斧槍を薙いで叫ぶと、エリィも導力銃を連射する。
「ティオちゃん、右からも来たわ！　お願い！」
「わかりました」
ティオは、襲来する魔獣へ魔導杖を向け、導力魔法で蹴散らした。
襲いかかってきたのは、ハリネズミに似た魔獣ジェラルム・ポーである。
素早く走り回るそれは、トゲのついた身体を回転させ、執拗に肉薄する。
一匹一匹は、さしたる脅威ではないが、後から後から現れるその数に、さすがのロイドたちも辟易していた。
「ランディ、一気にかたづけるぞ！」
「ザコにかまってるヒマはねえからな！　くらいなっ！」
ランディは、斧槍で魔獣の群れを薙ぎ払い、焼き尽くす。
ロイドも、飛びかかってくる魔獣を、バトルハンマーで叩き潰した。
背後では、エリィが援護射撃を続けながら、叫んでいる。
「ロイド！　あの階段の上よ！」
「あれを昇りきれば、第三制御端末があるはずです！」
ティオも、地図を確認して叫んだ。

やっと魔獣たちが逃げ出すと、ロイドたちは目の前の階段を駆け上がり、目的の第三制御端末の前にたどり着いた。
端末は古びてはいるが、十分まだ使えそうだった。
「やれやれ……ようやくだな」
ロイドが額の汗を拭うと、エリィとランディは周囲に視線をやった。
「また魔獣が来るかもしれないわ。私たちは、階段で警戒してるわね」
「どうせ俺は、見張りぐらいしかできねえからな」
二人は、得物を構えて端末から遠ざかった。
その間にティオは、素早く端末の前に坐り、電源を押し入れる。
「ロイドさん、ヨナに連絡してください。私のエニグマを使ってくださって結構ですから」
「ああ、分かった」
ロイドは、ティオの戦術オーブメントを受け取り、通信機能を開く。
呼び出し音がしばらく鳴った後、呑気そうなヨナの声が響いてきた。
『遅いじゃねーかよ、待ちくたびれちゃったぜ』
「そう言うな。このあたり、魔獣がうようよしてたんだ。だいぶ邪魔されたんだぞ」
『で、第三制御端末の具合は？』
ロイドが目線を送ると、ティオがこくんとうなずいた。
「ロイドさん、エニグマのスピーカーをONにしてください。そうすれば、ヨナと通話しなが

「[illegible]」
ロイドは、ティオの助手のように指示に従うと、彼女のエニグマを端末の脇に置いた。
それに向かってティオは、息を整えてから話しかけた。
「……ヨナ、こちらの準備は完了です。そちらは？」
『ああ、こっちはとっくに囮として動いてるぜ。《仔猫》が現れたら連絡する』
「了解しました。それまで待機します」
ティオは、それだけ言って、通信を終えた。
傍で見ているロイドは、拍子抜けした声を上げてしまった。
「……えっと……これで準備は終わりなのか？」
「はい、後はひたすら待機です。本当のことを言えば、私一人でここに来てもよかったので
が……」
「いや、それは危険だよ」
ロイドは、背後で警戒してくれているエリィとランディを見やった。
「ここに来るまで、何度も魔獣に襲われたじゃないか。ティオにもしものことがあったら、ど
うするんだ」
「でも、現れたのは比較的、弱小な魔獣ばかりでしたし……」
「今はそうだったけど、一人で対処できない奴と遭遇する可能性だってあっただろ？」

「は、はい、まあ……」
ティオは、叱られた子供のように首をすくめた。
ロイドも、思わず興奮してしまった自分を恥じて、あわてて話題を切り替えようとした。
「ごめん、俺、そんなつもりじゃ……そ、そう言えば、エニグマのストラップ、みっしいじゃないか！」
わざとらしくロイドは、ティオのエニグマを指さした。
戦術オーブメントには、ミシュラム・ワンダーランドの人気キャラクター、みっしいのストラップがぶら下がっている。
かわいいストラップを身につけるという行為が、普段、十四歳らしく見えないティオの、意外な一面に思えた。
「ずいぶん気に入ったんだな。そんなストラップまで付けて」
「はい……私は、あまり物には執着しない性質ですけど……不思議とこれだけは、ずっと持ち続けていますね」
「ずっと？ それ、クロスベルに来てから買ったんじゃないのか？」
「いえ、これはもらったんです。五年くらい前に……」
「へえ、誰からもらったんだい？」
「それは……」
ティオは一瞬、口ごもって……

意を決したような表情で、ロイドを見上げた。
「……ガイ・バニングスさんから、もらったんです」
「……え……」
ロイドは、ティオが告げた名前に硬直した。
聞いた瞬間、三年前の悲劇が甦る。
そしてもっと昔の、幸せだった頃の記憶も。
ティオも察して、声量を低めた。
「ガイさんって……ロイドさんのお兄さんですよね？」
「ああ、勿論そうだけど……ティオ、兄貴と面識あったのか？」
それすらも、ロイドにとっては意外だった。
一緒に特務支援課で活動するようになって数か月。
亡くなった兄ガイを知っていたなんて、一度も聞いたことがなかったからだ。
ティオも、すまなそうにうなずいている。
「……はい、実は……」
「知らなかったよ……だったらもっと早く言ってくれればいいのに」
「……すみません」
「でも、ティオはたしかレマン自治州から来たんだろ？ どうして兄貴と……？」
その時、ロイドの脳裏に、いつかの光景が浮上してきた。

あれは軍用犬事件を追っていた時のこと。
聖ウルスラ医科大学を訪れた時、ティオは師長に……
「やっぱりそうだ！　あんた、ティオちゃん！」
「大きくなったねえ！　こんなにかわいくなって！」

「ティオ……もしかして以前、この病院に……？」
「……はい。五年ほど前のことです。黙っているつもりはなかったんですけど……」

ティオは五年前、聖ウルスラ医科大学にいたと、自ら言った。
だがロイドたちが知っているのは、その事実だけである。
なぜ、ティオが入院していたかは、聞いていない。
それを詮索することに、なぜか気が咎めたのだ。

そしてロイドは、五年前の記憶をたぐり寄せた。
あの頃、ロイドはまだ十三歳で。
すでに捜査官として活躍していた兄と、不思議な会話を交わしていた……

「兄貴はどこへ行くんだよう」
ロイドは、荷造りをする兄に問いかけた。
「しばらく旅に出るって……一体なにをするつもりなのさ？」
ロイドの問いに、兄は飄々とした顔で答えた。
「行き先は、レミフェリア公国だ。なに、しばらくと言っても、二か月くらいで済むだろう」
「そんなに長く……」
「実はな……とびっきり可愛い女の子をエスコートしながらの旅なんだ」

五年前の会話は、そこで終わっていた。
兄ガイから、まともな答えももらっていない。
だがようやく今、ロイドは、あの時の答えを見つけたのだ。

「あれは……ティオの事だったのか……」
ロイドがそう言っただけで、ティオも悟ったらしい。
そっとみっしぃのストラップに触れて、睫を伏せた。
「多分、そうです。わたしが九歳の時……レミフェリアにある実家まで、ガイさんに送ってもらったことがあるんです」
「レミフェリア……ティオの故郷はそこなのか」

「はい。と言っても、あまり思い入れはないんです。もうほとんど、捨ててしまったような場所ですから……」

ロイドは、ずっとティオの過去には触れずに来た。

だが兄の名を出されては、問いかけずにはいられなくなったのだ。

「……じゃあ、ティオのご両親は？」

「元気だと思いますよ。三年前に家を出てからは、ほとんど連絡を取ってませんけど」

「……どうして……」

ロイドの問いに、ティオは一呼吸置いてから答えた。

「ある事情で、私は五歳くらいの時から、行方不明の身でした。けれどガイさんに保護され……衰弱していた私は聖ウルスラ医科大学に半年ほど入院していました」

「…………」

「そして何とか回復した後、レミフェリアの実家まで送ってもらったんです」

「そう、だったのか……でも、どうしてまた家を出たんだ？」

「ふふっ……」

ティオは、どこか寂しげに微笑んだ。

「……ロイドさん……私が普通の人間と少し違うのは分かりますよね？」

「違うなんて……！」

「いいえ、事実ですから。外界の事象に関して……私は普通の人間の数倍の感応力を持っています」

たしかに、事実ではある。

ティオは、冷静に自らの力を告白した。

「私は……普通の人には聞き取れない微かな音……普通の人には見えない導力波の流れ……普通の人には感じられない属性の気配……そして人の感情や心のゆらぎまで……感じることが
きるんです」

「…………」

「日曜学校に通っていても、私は一人ぼっちでした。周りの子たちとは違ったものを見て
ったものを感じて……そして見えない悪意や好奇心もはっきり感じ取れてしまう……」

ティオは、大きくため息を吐いた。

「両親は私を愛してくれましたが……やはり限界があったんでしょう。あまりに異質な私
次第に家庭の空気が張り詰めていると……私は気づいてしまいました。それで思ったんで
ああ、帰って来なければ良かったって……」

「……！」

「そして気づいたら……私は列車に乗っていました。共和国を経由して、クロスベルに向か
列車に……」

「……兄貴に会うために？」

「……そうかもしれません。そのストラップをプレゼントしてくれた時に、ガイさんが言っ

くれたんです……」

ティオが告げたセリフを、ロイドは兄の声に置き換えた。

『安心しろ。きっとお前は幸せになれる』

『もし、そうならなかったら、いつでも俺を呼んでくれ』

『お前を不幸にする原因を一緒にぶっ飛ばしてやるからよ！』

ロイドは、思わず笑ってしまった。

「……ははっ、いかにも兄貴が言いそうな言葉だけど……だけど、ティオがクロスベルに来た頃、兄貴は……」

「…………（こくん）」

亡くなっていた、とロイドは気づいた。

ティオも、遠くを見るような表情で、三年前を回顧した。

「途方に暮れていた私は、エプスタイン財団の人と知り合って……この感応力を見込まれて、当時発足したばかりの魔導杖の開発チームにスカウトされたんです」

「……そうだったのか」

「そしてレマン自治州に渡り、財団の研究所で三年間過ごして……再びクロスベルに戻ってた

というわけなんです」

ティオの表情は、妙に晴れやかだった。

ずっと胸に秘めていた事実を告げたせいだろうか。

そんなティオの髪に、ロイドはそっと触れていた。

「……ごめんな。突然いなくなっちまうようなバカ兄貴で……」

「……ロイドさん……」

「ティオとの約束を守らないなんて、ほんと、兄貴らしくもないよ……」

唐突に、思いがこみ上げた。

ロイドとて、兄への気持ちをこんなに解放したのは初めてである。

セシルにも見せたことのない感情を、ロイドは表にしかけた。

だが、その時……

『ティオ、聞こえるか！　《仔猫》が現れた！』

エニグマから、ヨナの声が響いた。

『たった今、こっちが用意したエサにくいついたぜ！　追い込むから、サポートを始めてくれ！』

「分かりました」

ティオは、今までの会話を振り払うかのように、冷静な表情を取り戻す。

ロイドも、湧き出した感情を抑えて、任務に立ち戻った。

「ティオ、無茶はするなよ……」
「はい……心配ご無用です」
ティオは、気遣いに微笑すると、傍らの魔導杖にそっと触れた。
「……アクセス。魔導杖補助機関、エイオンシステム起動」
命じると同時に、魔導杖は白光を放つ。
ティオは再び、凄まじい速度でキーボードを操作し、それにつれてディスプレイ画面も目まぐるしく展開する。
「ネットワーク上のリソースの第二境界領域に潜伏開始。《仔猫》を待ちます」
『了解……っておいおい！　《仔猫》の奴、もうプロテクトを解除しやがった！』
ディスプレイ上では、《仔猫》を示すマーカーが、ヨナの領域を食い散らかしている。
スピーカーから聞こえるヨナの声は、明らかに引きつっていた。
『うああ、せっかく用意した美味しい情報が一瞬で！　信じられねえ！　どうやって仕掛けてるんだよ！』
「落ち着いて、ヨナ。恐らく圧倒的な処理能力で力任せに進んでいるだけでしょう。焦らず、二歩先を読んでこちらへ誘導してください」
『くそっ！　無茶言いやがる！』

＊＊＊＊＊

《仔猫》は、導力ネットワークの海を、自在に泳いでいた。
誰よりも速く。誰も知覚できぬほど速く。
時折、尻尾を振って、自分の証を残してみても、それに気づく者は滅多にいなかった。
まして追いつける者は、皆無。
その事実は、《仔猫》の自尊心を満たしたが……
〈つまんないわね、この海も〉
〈いくら餌を食い散らかしても、誰も追って来ないんじゃ……〉
しかし、《仔猫》が退屈に飽きた時。
見知った魚が、勢いよく接近してきた。
〈見つけたぜ！　逃すもんか！〉
ヨナは《仔猫》に向かって、まっしぐらにネットの海を駆けた。

〈ちくしょう、ボク一人でも《仔猫》を捕まえられるってことを証明してやる！〉
けれど《仔猫》は、嘲りに似た笑みを発信した。
〈あら、いつもの彼じゃない〉
〈何度も振り切ったのに、まだ追いかけてくるなんて殊勝なものね〉
〈今日はやけに気合が入ってるけど……まあ、いいわ。ちょっと遊んであげる〉
そして《仔猫》は、彗星の如く光の尾を引いて、海を疾駆した。
導力の海の、追跡行が始まったのだ。

＊＊＊＊

ディスプレイ上の状況は、刹那の単位で変化している。
しかし傍で見ているのに、ロイドには、状況がまるで把握できなかった。
『第四ターミナル、第一七ターミナル、市庁舎のメインターミナルを通過……第二五ターミナルに追い込んだ！』

「い、いったい何が起きてるんだ、ティオ？」
「お静かに……これからが正念場です」
ティオは、カタカタとキーボードを打ちつつ、モニターに集中している。
やがてティオの目が、すうっと細まった。
「……確認しました。これが《仔猫》……確かに速い……速すぎる！」
それは、ティオですら驚嘆するほどの、桁外れの相手であった。
ティオは、珍しく緊張を浮かべて叫んだ。
「エイオンシステム解放！　複数同時並列処理に入ります！」
『いい流れじゃん！　このまま行けば、そっちだけで《仔猫》を捕まえられるんじゃね？』
「いえ……あなたや《仔猫》と違って、私は純粋なハッカーではありません。エイオンシステムがダウンしたら、さすがに追いつけないでしょう」
『だったらどうすんだよ？』
「ダウン覚悟で限界まで処理を高めて、《仔猫》の退路を塞ぎます。タイミングを見計らって、コンマ一秒以内で捕まえましょう」
『ああもう……わかった、やればいいんだろ！』
「では……エイオンシステム、制限解除！」
もはや余人がまったく介入できぬ速さで、ティオとヨナは包囲網を狭めつつあった。

＊＊＊＊

ヨナは、必死に《仔猫》に食らいついていた。
だが何度つかみかかっても、《仔猫》はヨナを振り落とし、また逃げていく。
やがてヨナと《仔猫》の距離は、離れていくばかりだった。

《うーん、努力は認めるけど、まだまだね》
《やっぱりこの海に、あたしと遊べる人はいない……》

そう《仔猫》が思った時。
不意に新たな光が、ネットの海に現れた。
いや、現れたと言うより、《仔猫》の進路を読み、待ち伏せていたのだ。

《誰っ！》
《あたしの先を読むなんて……！》

待っていたのは、ティオ。

[illegible]を[illegible]して、《仔猫》の進路に立ち塞がる。

《そこまでです》
《ここは、侵入していい海ではありません》

《くっ……！》
《先回りしただけで、そんなお説教……》

《仔猫》は、身をひるがえしてティオの腕から逃れようとする。
だが踵を返した《仔猫》の前にも、ティオが立ちはだかっていたのだ。

《そんな……！》

《捕まえました》
《あなたの負けです》

導力の海に、《仔猫》の叫びが響き渡る。
そして……

＊＊＊＊

「よっしゃあああー　捕まえたぜえええええっー」
スピーカーからヨナの歓声が轟く。
ロイドは、恐る恐るティオに問いかけた。
「や、やったのか……？」
「ええ……そうみたいですね……」
言った途端、ティオの身体がぐらりと揺らいだ。
「ティオ、大丈夫か！」
あわててロイドは、目眩をおこしたティオを支える。
ティオは、しばらく深呼吸を繰り返したが、やがていつもの平静さを取り戻した。
「……だ、大丈夫です。ちょっと処理を上げすぎたせいで目が回っただけですから……」
「まったく……無茶するなって言ったのに」
ロイドは、ティオの頭をぽんぽんと軽く撫でてやった。
「あ……」
ティオは、意外そうにロイドを見上げた。
きょとんとした瞳は、十四歳の少女らしい輝きを放っている。

ロイドは、唐突に湧き出した思いを口にした。
「……あのさ、ティオ。兄貴がした約束……俺に引き継がせてくれないか?」
「え……」
ティオは、さらに動揺したが、ロイドはいたって真剣だった。
「……悔しいけど、兄貴は凄かった。俺なんか、まだまだ足元にも及ばないよ。でも俺、約束を守れるくらいの男になってみせるからさ」
「…………」
「だから……」
そこまでロイドが言うと、ティオはくすっと笑った。
「なんだか……不思議ですね」
「え……?」
「ロイドさんとガイさんって、外見はあまり似ていないのに……それでもどこか、似たようなものを感じます。魂の在り様というか……見ている方向が同じというか……」
「俺と、兄貴が……?」
「はい。でも……ロイドさんはロイドさんであって、ガイさんじゃありません。それはロイドさんが一番、分かっているんじゃないですか?」
「それは……」
ロイドも、思わず口ごもってしまった。

兄のような捜査官になりたい。
それがロイドの目標だった。
しかし兄そのものになることはできない。
そんな当たり前のことを、突きつけられたような気がした。
「……ですから、どうせ約束してくれるのなら、別の内容がいいです」
ティオは、ロイドに向かって頬を緩ませた。
「……今すぐじゃなくてもいいです……でもロイドさんの言葉で約束してほしいんです」
「ティオ……」
「それに……私ももう子供じゃありません。一方的に守られるのも、何かをしてもらうのです。私だって……同じ特務支援課のメンバーでしょう?」
「……ははっ、そうだな」
ロイドも、今さら気がついて頭を掻いた。
「じゃあ今すぐに、ってわけにはいかないけど……約束、考えておくよ」
「はい……」
うなずいたティオは、満面に笑みをたたえていた。
その表情にも、ロイドは驚きを隠せなかった。
「……初めてだ」
「なにがですか……?」

「いや、その……ちゃんと笑ってる顔、初めて見たって思ってさ」
言った途端、ティオの顔が朱に染まった。
わたわたと用もないのにキーボードを叩き、焦りまくっている。
「べ、別に……笑ってなんかいません！　これはその……《仔猫》を捕捉して、気が抜けてしまっただけで……」
「いつもそうやって笑っていればいいのに。ティオは、すごく可愛いんだから、普通に笑えばきっとモテるさ」
「わ、私が……す、すごく……可愛い……」
ティオの震える指が、カタカタとキーボードを乱打する。
だがそんな雰囲気に割り込むように、傍らのエニグマから咳払いが聞こえた。
『えー、こほん、こほん』
ロイドとティオは、どきっと身を震わせた。
「うわっ！」
「ヨ、ヨナ！　い、い、いつから聞いていたんですか！」
『そりゃ最初から最後までだよ、お二人さん。だってさっきからずっと通信機能、開きっぱなしじゃんか』
にやにやと笑う顔が想像できそうな声が聞こえてきた。
『いや～っ、なんか珍しいモンを聞かせてもらっちまったな～。まさかあんたたちが、そんな気にならなんてねぇと』
言われた瞬間、ティオの顔が冷静さを取り戻した。
「それよりヨナ！　《仔猫》の足取りは、ちゃんとつかめたんですか！」
『ああ、もちろん……だけどな……』
ヨナの声は、なにか腑に落ちぬように、くぐもっていた……

＊＊＊＊

「ローゼンベルク工房……？」
ロイドは、コーヒーカップを落としそうになった。
すでに、時刻は夜更けに達している。
特務支援課に戻ってきたロイドたちは、広間のソファに座し、それぞれ驚きの表情を浮かべていた。
ただ一人ティオだけが、解析情報を手に、冷静さを保っている。
「そうです。私とヨナが追跡した結果、《仔猫》のアクセスポイントは、ローゼンベルク工房だと判明しました」
「ちょ、ちょっと待って」
エリィも、紅茶をテーブルに置いて聞き返した。

「ローゼンベルク工房って人形を作っている工房でしょう？　たしかクロスベル市から出て、マインツ山道の途中にあるって言う……」

ランディもすぐさま、市外地図を両手で広げた。

「ああ、たしかにあるな……脇道に入った山奥だから、滅多に人は寄りつかないだろうが……マジでここなのか？」

「……はい。非常に不可解な位置だと思います」

ティオの言葉に、ロイドは身を乗り出した。

「どういう意味だ？　そこに《仔猫》がいたら、何かおかしいことでも？」

「現在、導力ネットワーク網がカバーしているのは、クロスベル市全域と聖ウルスラ医科大学、それから湖の対岸にある保養地ミシュラム程度です」

「あ、そうか……」

「大量に情報をやり取りをする導力ネットワークは、基本的に有線です。聖ウルスラ医科大学とミシュラムも、市内と導力ケーブルで結ばれています。ですがどう考えても、山道外れの工房に導力ケーブルが敷かれてるワケがないんです」

ティオが矢継ぎ早に言うと、傍で眠っていた神狼ツァイトが、喉を鳴らす。

その唸りを聞いたティオは、すまなそうに声量を落とした。

「ごめんね、ツァイト、ちょっと興奮しちゃって……でも、事実です。導力ネットワークがあるはずのない場所から、《仔猫》はハッキングしている……」

「ふむ……」

ロイドは、隣に座るエリィに目を向けた。

「俺は、よく知らないけど……そのローゼンベルク工房って、どんな評判なんだ？」

「私も詳しくは……でも精巧なアンティーク・ドールを手がけていることで有名よ。特定の店でしか買えないから、値段も高騰しているの」

「アンティーク・ドールか……」

ロイドの中では、すべての情報が断片のまま、まるで繋がりを感じさせなかった。

《仔猫》というハンドルネーム、ハッカー、人形工房……

ランディも、諦めたように微笑んだ。

「なあロイド、ここで考えていても埒はあかないぜ？」

「ああ……あまりにも情報が少なすぎる。ティオのデータベースには、ローゼンベルク工房の情報はないのか？」

「それが皆目……」

ティオも、困惑した顔つきで神狼の背を撫でた。

「つまりエプスタイン財団も把握していない、導力ネットワークの抜け道があるということです。これは看過できません」

「ヨナも言ってたが……ハッキングを取り締まる法律はまだ無い。たとえ《仔猫》が誰であるか特定しても、逮捕できる理由はない……けど……」

ロイドは、仲間たちを見わたした。
「この一件……妙に引っかかる。行ってみよう、ローゼンベルク工房へ……」

＊＊＊＊

翌日。
クロスベルの街は、創立記念祭三日目の賑わいに満ちていた。
だがロイドたちは、朝早く市内から出ると、北へ向かうマインツ山道を進んだ。
マインツ山道は、その名の通りマインツ鉱山町に続く街道である。
ロイドたちは、その街道の途中にあるローゼンベルク工房へと向かったのだ。
道は、クロスベル市を離れるにつれ、行き交う人も少なくなり、勾配も次第に険しさを増していった……

「こんな所に、本当に工房があるのか？」
ロイドは、先頭に立って周囲を見回した。
マインツ山道から外れた細い道は荒れ果て、誰かが往来した痕跡もない。
時折、見つかるのは魔獣の足跡だけである。

エリィも、用心のため導力銃を構えたまま進んだ。
「そのはずだけど……鉱山町からもだいぶ遠いわね」
だがランディは、いつもの楽天的な顔で後ろを振り返った。
「びびるなって。相手はたかがハッカーだろ？ 俺たち四人がいれば、どうとでもできるさ
なあ、ティオすけ？」
「ですが……」
ティオは、導力杖を支えに山道を登っている。
「昨夜のネット上での動きから見ても、生半可な相手ではないことは確かです。ヨナとは比
ものにならない……」
「そりゃあ、そうだろうが……」
「何より目的が分からないのが不気味です。誰にも知られずに導力ネットワークに巣くって
いったい何をする気なのか……」
ロイドも、困惑気味に嘆息した。
「まったくだ。せめて相手の顔だけでも見られれば……んっ？」
ロイドは、手を伸ばして仲間たちを制した。
山道を登り切ると、突き当たりに大きな屋敷が見えてきた。
広い庭と、古びた塔も備えた屋敷で、外観は精緻で美しい。
「……あれがローゼンベルク工房か」

ロイドは、看板を確かめて、屋敷に近づいた。
工房の名を記したそれには、圧するような筆致でこう書かれていた。

『ローゼンベルク工房　関係者以外の立ち入りを禁ずる』

見る限り、鉄格子の門はぴたりと閉ざされ、屋敷内の様子は分からない。
エリィも、感心した顔で屋敷を見上げている。
「ずいぶん雰囲気のある建物ね。さすがは天才人形師の館ね……」
「天才人形師？」
ロイドが聞きかえすと、エリィは静かにうなずいた。
「ええ、昨夜のうちに調べたのよ。この工房には、導力仕掛けのオートマタから、温もりの
るぬいぐるみまで……あらゆる人形を手がける天才人形師がいるらしいの」
「天才人形師か……看板の警告といい、気難しそうな雰囲気だけど……もしやその人形師が
ッカーの……」
言いかけて、ロイドは背後を振り返った。
すぐ近くに忽然と、何者かの気配を悟ったためだ。
「誰だっ……！」
「……おじいさんなら留守よ」

告げたのは、すみれ色の髪の小柄な少女
フリルの付いたドレスはやや古めかしく、まるで人形のようだった。
どこか生意気そうな瞳に、ロイドたちは思わず身を固くした。
「君は……？」
「お兄さんたちこそ、誰？　この工房に何の用かしら？」
「えっと……」
ロイドは、前に進み出ると、胸の記章を指さした。
「怪しい者じゃないよ。俺たちは、クロスベル市警の者なんだ」
「へえ、警察の人……」
少女は、ロイドたちを吟味するように観察した。
幼い割りには、その視線は骨董品の鑑定士のように鋭いものだった。
「ふぅん……お巡りさんって、街でしか見たことないけど……こんな山の中にも見回り
のね？」
「ああ、その……見回りに来たわけじゃないんだ」
ロイドに続いて、エリィも笑みを向けた。
「おじいさんは留守って言ったけど、君はここに住んでるの？」
「ええ。私、一人でお留守番なの。もう、つまらなくって」
言うと少女は、くるりとロイドたちに背を向けた。

「……ほんと、残念だわ。導力ネットで遊ぼうにも、妙な邪魔が入って、居心地悪くなっちゃったしね……」

「じゃあ君が……！」

ロイドが驚愕すると、ランディも絶句した。

「冗談だろ、こんな子供が……」

「……《仔猫》……」

ティオも、興味深げに少女を見据えている。

その視線を浴びると、少女はあからさまに不機嫌になった。

「ええ。まさかあんな手で捕まるなんて思わなかった。油断さえしなければ……」

「ネットワークには、必ず足跡が残るものです。消せはしない」

「だけど、囮を使ったうえに、エイオンシステムの制限解除するなんて……」

むくれる少女を、ロイドは冷静に観察した。

同じハッカーでも、昨日出会ったヨナとは、だいぶ雰囲気の異なる少女だった。

悪戯っぽい笑みの奥には、秘めた理性がかいま見える。

ロイドは、《仔猫》に問いかけた。

「……本当の名前、教えてくれるかな？」

「いいわ……私の名前はレン」

少女は、ロイドに向き直って答えた。

「あなたたちの名前は、ロイド・バニングス捜査官、市長の秘書エリィ・マクダエル、元警備隊のランディ・オルランド……」

「ちょっと、どうして私たちの名前を！」

エリィが驚くと、レンは事もなげに微笑んだ。

「特務支援課の情報も、ネットから集めたのよ。最近じゃあ一番面白そうな人たちだし……そしてあなたが、ティオ・プラトー……」

あからさまにレンは、瞳に敵愾心を灯す。

だが当のティオは平静を保って、ロイドを見上げた。

「さて、どうしましょう？　《仔猫》は見つかったようですよ」

「そうだな……教えてくれ、レン。君はどうしてハッキングなんかしたんだ？」

「あら、ハッキングって罪になるの？」

「今はまだハッキングだけでは罪には問われない。しかし俺たち市警としては、ハッカーの存在を見過ごせないと思ってね」

するとレンは、あらためてロイドたちを凝視した。

まるで品定めするように視線を動かすと、ため息をついて腕組みする。

「仕方ない……正直に言うわね。捜していたのよ」

「誰を？」

「ハッキングした私を、捕まえてくれる人を」

レンの答えに、ランディは首をひねった。
「どういう意味だ、そりゃあ？」
「……いや、なんとなく分かったよ」
ロイドは、レンを見つめながら、推理を口にした。
「君ほどのハッカーを見つけ、捕まえられるだけの力を持った者……あるいはそういった行
を起こすだけの意志を持った者……それを捜してたんだね？」
「ご名答。さすが捜査官ね」
レンは、真意をくみ取ったロイドに興味を覚えたようだった。
「ハッキングは、ただ単に私の存在表明に過ぎないの。気づいてくれた人は、何人かいたけ
ど、誰も追いつけなかった……」
「ティオのお手柄なんだ」
「でも癪だったわ。誰かに捕まえてほしいと思っていたけれど、本当に捕まるとこんなに悔
いなんて……」
レンに言われると、ティオは首を横に振った。
「ハッキング技術では、あなたの方が遥かに上です。しかしそんなあなたが、自分より上手
人間を捜していた理由とはなんです？」
しばし、レンは沈黙して……
やがて懐から、黒い封筒を取り出してみせた。

「これを譲る価値のある人を、捜していたの」
「……？」
ロイドは、少女の手から封筒を受け取った。
黒い封筒の表面には、金色のバラが描かれている。
裏返しても差出人の名は無く、宛先も見あたらない。
レンは、封筒を指さして言った。
「その封筒はね……この街にそびえる高い壁よ」
「―」
ロイドは、背筋に冷たいものを感じた。
「誰もが諦めている高い壁……それを象徴するモノよ」
エリィも顔をこわばらせ、ランディも眉間に皺を寄せている。
ティオとて、冷静な表情を保っているが、驚いているのは同様だった。
四人とも、瞬時に悟ったのだ。
この黒い封筒が、クロスベルの暗部に繋がる何かだと。
そしてこのレンという少女なら、暗部に繋がる何かを知っていてもおかしくない……そう思わせる雰囲気があった。
レンは、不敵な笑みを浮かべた。
「その封筒……調べてみるといいわ。きっと面白いことが分かる。そしてできることなら……うふふ、そこから先までお願いするのは、やめておく」

「これは……何かの陰謀に関わるモノなのか」
ロイドが問うと、レンは肩をすくめた。
「かもしれないわね。もしかしたら、あなたたちが扱うには、大きすぎるシロモノかもしれ
いし……」
「なぜ、そんなモノを渡してくれるんだ？　君自身は、これに興味がないのか？」
「ない……と言ったら嘘になる。でも私は決めているの」
毅然とした声で、レンは続けた。
「このクロスベルで、私は単なる傍観者に徹すると……だからこれを託せる誰かを捜して
そこにあなたたちが現れたってわけ」
ロイドは、仲間たちと顔を見あわせた。
「俺たちなら解決できると思うかい？」
「さあ……どうかしらね。いずれにしろ、それはあなたたちの手に渡った。ある意味、渡す
き人に手渡せた気もするわ」
そう言って、レンは一歩後ずさった。
「でもね、この街にそびえる壁は、あなたたちが思うよりずっと高い……それだけは言って
くわよ」
「おい、レン、この封筒……」

「さよなら……ここまで来てくれたこと、感謝するわ」
別れの言葉と共に、レンの姿は忽然とかき消えた。
ロイドは、あわてて周囲に目をやったが、もはや少女の気配すら残ってはいなかった。
「レン！」
「いったいどこへ……！」
エリィもランディも、我が目を疑うように瞼をこする。
ティオだけは、常の表情で、ふーっと短く深呼吸した。
「巻き込まれたようですね。あのレンという子のゲームに……」
ロイドは呆然として、黒い封筒に目を落とす。
急にその黒い封筒が、重々しく感じられた……。

＊＊＊＊

「お前ら、エラいもんを渡されたな」
黒い封筒を手にして、セルゲイ・ロウは紫煙をふかした。
すでに夜も遅いが、街からはまだ記念祭のざわめきが聞こえてくる。
だが特務支援課に戻ったロイドの表情は、緊張を孕んでいた。
「俺たちも中身は見ました。いったい何なんですか、黒の競売会って……」

封筒の中身は、黒の競売会という集まりへの招待状だったのだ。
しかし詳しい内容は記載されておらず、ただ時間と場所だけが指定されている。
創立記念祭、最終日、夕刻。
場所は、保養地ミシュラムにある、市議会議長ハルトマンの邸宅。
セルゲイは、いったん煙草を揉み消した。
「七、八年前から噂にはなっていた。毎年、記念祭の最終日に、ルバーチェ商会が秘密裏に
売会を開催しているってな」
「ルバーチェ商会が？」
ロイドは、思わず奥歯を噛みしめた。
何度検挙しても、しぶとく生き続けるクロスベルの怪物。
営業本部長、ガルシア・ロッシのふてぶてしい笑みも瞼にちらつく。
セルゲイも苦い顔で先を続けた。
「出品される品は一流品ばかりだが、盗品や賄賂、脱税、横流しなどに関連する美術品や宝
品ばかりだって話だ。また、クロスベルのみならず、周辺諸国の貴族や資産家が多く招待さ
裏の社交界的な催しとしても機能している」
「その噂なら……聞いたことがあります」
エリィが、後ろめたそうに言った。
「慎重に選ばれた人間だけが招かれ、どういった取引がされているかは決して表に出ることは

ないと聞きました。勿論、私も祖父も招かれたことはありません」

エリィとて、市長の孫娘である。要人という条件なら、十分に当てはまるはずだ。

そのエリィも、市長も呼ばれていないという事実が、黒の競売会の後ろめたさを如実に表していた。

セルゲイは、新たな煙草に火を点けた。

「ルバーチェ商会にとっては重要な収入源であり、ハルトマン議長にとっては各国の有力者と繋がりを持つ絶好の場となっているようだ。会場の警備は、ルバーチェ商会の構成員が厳重に行っており、この招待状がない限り、参加は不可能……」

「でも、ちょっとおかしいです」

ティオが、腑に落ちぬ顔で問うた。

「秘密にしている割には、規模が大きすぎます。それだけの人物が集まって、隠し通せるものでしょうか？」

「いや、警察とマスコミには厳重に規制がかかってんだろ」

ランディは、捨て鉢に言った。

「でなけりゃ、こんなモンが表沙汰にならねぇわけがねえ。それに課長がそこまで知ってるってことは……」

「ああ、市警の上層部は、恐らくすべてを把握している」

セルゲイ・ロウは、ふーっと紫煙を吐き飛ばした。

捜査一課の連中も全員知ってるはずだろう。これだけの動き、見逃すほどあいつらもバカじゃない」

ロイドは、捜査一課の敏腕捜査官、アレックス・ダドリーを思い出した。

冷徹で、明敏な彼のことだ。

こんな招待状が無くても、とっくに競売会の存在を知っていてもおかしくはない。

だがその一課が動いていないということは……

「圧力ですか、課長？」

「らしいな。捜査一課は、ずいぶん前から動いている。だが肝心なところまで進むと、必ず槍が入るそうだ。恐らくハルトマン議長から……」

ハルトマン議長は、クロスベル自治州議会議長にして、帝国派議員の重鎮である。

クロスベル自治州の政治・経済に、あまねくその影響力を及ぼす大物政治家。

エリィも、唇を噛んで納得した。

「ハルトマン議長が関わっているなら、私や祖父が呼ばれないはずです。祖父は、帝国派に共和国派にも与しない、中立派ですから……ハルトマン議長からは、中途半端で煮え切らな人だと思われているでしょうし」

「エリィ、そんな……」

「いいえ、それが事実なのよ、ロイド」

エリィも、世間知らずのお嬢様ではない。

複雑に絡み合った国際政治と、国内事情を彼女なりに理解している。
だからこそ政界より、警察という道を選んだのだが、その横顔は苦渋に満ちていた。
自分が住む世界の、すぐ隣に、高い壁がそびえている。
その壁の高さを、誰よりも知ってるのはエリィなのだ。
ロイドは、憤懣をこらえて、上司を見つめた。
「……これも壁、ってわけですか」
「ああ、とびきりでかい壁だ。基本的に俺は、お前たちの行動に制限を付けるつもりはないんだが……」
セルゲイ・ロウは、諦観を込めて告げた。
「……黒の競売会にだけは、手を出すな。お前たちには荷が重過ぎる」
「……課長……」
室内に、沈痛な空気が満ちていく。
ロイドとて、理解していた。
いつも放任主義のセルゲイ・ロウが『手を出すな』と言った、その重み。
越えてはならない一線だと、エリィもティオも察している。
ただランディだけは、ぎりっと奥歯を軋ませた。
「待ってくれよ、課長。俺たちに荷が重いってより、市警そのものが動けねえんだろ？」
「…………」

[illegible]て呆れるぞ」
しかしロイドは、別の要素にも思いを馳せていた。
「課長、もしや遊撃士協会も……」
「ああ。遊撃士協会だって承知のはずだ。知っていて動けねえ……無論、《風の剣聖》アリ
ス・マクレインも」
「くっ……」
ロイドは、苦渋を押し殺した。
遊撃士協会は、市民にとって英雄的存在である。
特に《風の剣聖》と呼ばれるA級遊撃士アリオスは、絶対的な剣技と、人望と実績から、
ロスベルの守護神とまで崇められている。
そのアリオスですら動けないという事実は、クロスベル市民にとって絶望的である。
しかしティオは、その理由を理解していた。
「遊撃士協会は、民間人に危険が迫らない限り、動けません……市民に関わりのない秘密会
ある以上、アリオスさんも手が出せないのでしょう」
「だからってよ……！」
ランディが再び吼えると、セルゲイも声を強めた。
「悔しい思いをしてんのは、お前たちだけじゃねえ。特に一課の連中は毎年、無力さを味わっ
てるだろうさ。非人道的な催しだったら、それこそ遊撃士に動かれる前に、意地でも突っ込む

だろうが……出品物の出所がヤバいってだけじゃあな……」
それにだ、とセルゲイは続けた。
「下手に手を出しちまったら、特務支援課ごと潰される可能性も高い。だから今回ばかりは、俺も止めざるを得ない。そういうことだ」
「…………」
ロイドとエリィは黙し、ランディは天を仰いだ。
ティオは、何か言おうとして……こわばった唇を少し動かした。
「……やれやれ、ですね」
ロイドも、事の重大さを悟って、あらためて上司に向き直った。
「課長……」
「納得しろ、とは言わん。だが現実を直視し、自分たちに何がどこまで出来るか、見極めるってのも時には必要だ」
「悔しいですよ……一課も、アリオスさんもそうでしょうけど……」
「その悔しさを忘れない限り、いつかきっとチャンスが巡って来るだろう。お前たちが諦めなければ、な」
そう言ってセルゲイは、競売会への招待状をロイドに突っ返す。
ロイドにも返す言葉はなく、ただ拳を握るだけであった……

＊＊＊＊＊

深夜。すでに街のにぎわいも途絶えている。
だがロイドは、特務支援課の屋上に立ち、いつまでも街の明かりを眺めていた。
もはや行き交う人も無く、ただ静かなクロスベルの街を……
「ここにいたのね、心配したわ」
呼ばれて、ロイドはおもむろに振り返った。
そこには、エリィ、ランディ、ティオが静かに立っている。
ロイドは、仲間たちを見つめると、決心を口にした。
「やっぱり、行ってみようと思う。黒の競売会へ……」
「ロイド……！」
エリィは、心配そうに彼の腕をつかんだ。
「課長の話、聞いたでしょう？　私たちだけで、どうにかできる相手じゃ……」
「分かってる。だから、深入りはしないさ」
「？」
小首を傾げたエリィに、ロイドは小さくうなずいた。
「行ってみて、どんなことが行われているか確かめるだけだよ。それなら、深入りすることに

はならないだろ？」

「そ、それはそうだけど……」

エリィが口ごもると、ランディが小気味よく笑った。

「たしかに課長も、見極めろって言ってたな。あれはつまり、偵察ならかまわない……そういう意味かもな」

「ずいぶん都合のいい解釈に聞こえます、それ」

ティオが呆れながら言うと、ロイドは首を横に振った。

「そうとも言い切れないさ。もし課長が、本当に俺たちを行かせたくないなら……この招待状を返しはしなかったはずだ」

「あ……」

ティオは、ロイドがちらつかせた黒い封筒を見つめた。

「たしかにそうですね……それに、せっかくレンが託してくれた招待状です。私も、無為にしたくはありません……」

「うん、俺も同感だよ。だから行くんだ」

ロイドは、屋上の手すりにもたれて言った。

「けど、みんなに迷惑はかけられない。当日は、俺一人で潜入するよ」

だがその言葉に、エリィが頬を膨らませた。

「あいかわらず無茶言うわね、一人で行くだなんて」

「それに迷惑かどうかは、私たちが決めることでしょう？」

エリィは、ぽんとホルスターを叩いてみせた。

「私も行くわ。見てみたいもの。この街で一番高い壁を……」

「エリィ……」

「私はある意味、あなた以上に黒の競売会に興味があるのよ。私の属していた世界に、近

たちが集まるみたいだし」

ロイドは、彼女の瞳を真っ直ぐに見つめた。

すでに腹をくくったらしく、エリィの瞳に迷いはない。

政界という、彼女にとって身近な世界の裏側を覗くことを、恐れている様子もなかった。

ロイドは、静かにエリィに微笑んだ。

「ありがとう、頼りにしてるよ……」

だがすぐに、ランディの咳払いが割って入った。

「あー、ごほん！　お二人さん、勝手にいいムードにならないでくれ。仲よく二人だけで

せるほど、俺は優しくないんでね」

そう言われてエリィが赤面すると、ランディは気楽そうに笑った。

「無論、俺も行くぜ。ま、俺はゴージャスなパーティに興味があるんだけどな。美味いモ

飲み食いして、セレブなお姉さんともお近づきになれるチャンス……見逃す手はねえだろ

が？」

「ははっ……それを楽しみに行くのもいいな」

ロイドは、あえて軽口を叩いたランディに破顔した。

苦しい時こそ、ランディは気分を変えようと努めてくれる。

それが何より、今はありがたかった。

ティオも、冷静さを維持して告げた。

「私も行きます。レンが私たちに何を見せたかったのか、確かめたいんです」

「ありがとう、ティオ……」

ロイドは、クロスベルの夜景を一瞥して、表情を引き締めた。

「そうと決まれば、明日は潜入の準備にかかろう。情報収集も必要だ。招待状だけで、おいそれと入れるとは限らないからな。それに問題がひとつある」

言ってロイドは、黒い招待状を打ち振った。

「この招待状で、競売会に入れるのは二人だけなんだ……」

「あっ……」

「そうか……」

「…………」

エリィが、ランディが、ティオが、顔を見あわせる。

しかしロイドの心にも、まだ答えは出ていない。

[illegible]二日目の夜は、静かに更けていった……

＊＊＊＊

クロスベル市、港湾区。

すでに夜も更け、岸辺で釣りを楽しむ者の姿もない。

エルム湖の対岸では、保養地ミシュラムの明かりが煌々と瞬いていた。

そのイルミネーションを窓から眺めながら、若き切れ者はつぶやいた。

「例の競売会、もう間近に迫りましたね」

黒月貿易公司、クロスベル支社。

その全権を束ねる支社長、ツァオ・リーは、眼鏡の位置を直した。

「予定通り、各国の要人も集まっているようです。当然、かなりの金が動きます。そして金は、あの貪欲な、ルバーチェ商会の懐に入っていく……」

ツァオは、誰もいない部屋で一人、独白する。

「そしてルバーチェ商会に対する、帝国派議員や、招待客からの信頼も厚くなる。マルコ会長の権勢も高まる一方……」

すると、ツァオの他には誰もいないと思われた部屋に……

……どこからともなく、黒い影が現れ出でた。

「気に食わぬようだな、それが？」

部屋の隅から聞こえてきたのは、低い声。

それへ向けて、ツァオは絶対零度の微笑を浮かべた。

「ええ、気に入りません。この街の利権をルバーチェ商会が掌握しているなんて」

「では、予定通り、始めるのか？」

「無論です。例の競売会……《黒月》の名にかけて、揉み潰してみせましょう。当然、それはあなたのご協力も必要ですがね、《銀》殿……」

ツァオが暗がりに呼びかけると、相手も含み笑いを発した。

そしてゆらりと、声の主は姿を現す。

黒いマントとフードをまとった、漆黒の暗殺者。

カルバード共和国の東方人街では、知らぬ者無き伝説の凶手、《銀》は、足音も立てず、ツァオ・リーに近づいた。

「奴らとの戦争、辞さぬとは恐れ入った」

「私にとって、ルバーチェ商会など恐怖する対象ではありません」

「くくっ……本国にいる《黒月》の長老たちの方が怖いのか？」

「またそういう答えにくいことを……」

眉を寄せたツァオを、《銀》は面白そうに眺めた。

[illegible]

「盗んでいただきたいのです。例の競売会に出品される品を……」

ツァオは、深く椅子に背もたれて言った。

「中でも一番人気の品を奪えば、競売会は開催できず、ルバーチェ商会の面目は丸潰れでしょう」

「なるほど……嫌らしい手を考えつくものだな」

「それが責務ですから」

「分かった。で、その一番人気の品とはなんだ？」

《銀》が問うと、ツァオは困惑の色を深めた。

「それがあいにく……まだ噂しかつかめていないのです」

「《黒月》の諜報網もたいしたことはないな」

「これは手厳しい……ですが、物はすでにハルトマン議長のお宅に運び込まれたそうですから……」

「あまり大きすぎては、持ち去るのに支障がある」

その言葉に、ツァオ・リーは細い指を組み換えた。

「心配は、ないでしょう。なにしろ一番人気の品は、ローゼンベルク工房の人形だといいますから……」

第三章　潜入捜査

『……お待たせいたしております』
『ミシュラム行きの水上バス乗り場は、こちらでございます』
『次の便は十分後に出発いたしますので、どなた様もお乗り忘れのなきよう、お気をつけて乗船下さい……』

港湾区に、女声アナウンスが流れる。

創立記念祭四日目。クロスベル市は、祝祭の佳境にあった。

特に、人気が高い保養地ミシュラムへ向かう観光客は多く、水上バス乗り場は大勢の人でごった返している。

ロイドは、その人ごみを路地裏からじっと観察していた。

「さて……あの人波に紛れて、ミシュラムに渡ればいいんだが……」

言いかけて、ロイドは背後の仲間たちを振り返った。

「とりあえず、みんな、観光客らしい格好はしてるよな？」

[illegible]いつものジャケットは着ていない。わざと伊達眼鏡をかけ、目立たない私服に身を包んでいる。上着の内側には、衝撃警棒バトルハンマーを隠し、備えも万全である。

エリィも、女子大生然とした私服で控えていた。

「潜入捜査だもの。さすがにいつもの服はまずいわよね」

彼女も、懐に導力銃ラスティネイルを隠している。

ランディは、釣り竿ケースを肩にかけ、帽子とサングラスで顔を隠していた。

「お前たちは、変装が楽でいいよな。こっちはどうしたって、荷物が多くなる」

「ランディ、例のモノはその中か？」

「ああ。俺の得物は、隠すのが難しいからな」

ロイドが釣り竿ケースを指すと、ランディは小さく微笑んだ。

ケースの中には、斧槍ライアットバスターが仕舞われている。

ティオもうなずいて、黒い楽器ケースを抱きしめた。

彼女の魔導杖デモンズスペルも、折り畳まれ、ケースに収納されている。

「手放すわけにはいきませんからね……」

準備が整ったと見て、ロイドは呼吸を整えた。

「それにしても課長が明日まで会議で良かったよ。留守の間なら自由に動ける」

「バレたら大目玉ね、私たち」

そう言いながら、エリィの瞳は生き生きとしていた。
ランディもティオも、この勝手な潜入捜査を楽しんでいる風すらある。
だが、無理もなかった。
元々、特務支援課は、なんの制限もなく、自由に捜査することをモットーとしている。
『手を出すな』と言われることが一番苦手な面々だけに、課長からの制止に抗うことはもはや必然だったのだ。
「さて、そろそろ出発か……」
ロイドは、水上バスに乗り込むタイミングを見計らった。
乗り場でうろうろしていては、誰かの目にとまる可能性が高い。
競売会を明日に控え、ルバーチェ商会は警戒を強めているだろう。
ロイドたちを知る構成員にでも見つかったら、潜入捜査が台無しである。
「気をつけろ。俺たちの姿を見られないよう、みんな……」
と、ロイドが念を押した時……
「よっ！　ロイドくん、何やってんの？」
「うわああっっ！」
突然、肩をたたかれ、ロイドは仰天した。
叫んだ口をあわてて、エリィが塞ぐ。
「ちょっとロイド！　大きな声出さないで！」

「わ、悪い、だけど……」
ロイドは、そーっと背後を振り返った。
するといつの間にか路地裏には、ゴーグルを頭にかけた、ショートカットの女性が立っていたのだ。
「久しぶりねー、みんな。今日は休日？」
「な、なんだ……グレイスさんか」
ロイドは、ほっと胸を撫で下ろした。
クロスベル通信社の女性新聞記者、グレイス・リンは、いつものように首からカメラを提げている。
スクープ記事のためなら、強引な取材も厭わないグレイスは、ロイドたちの態度に妙な雰囲気を嗅ぎ取っていた。
「それとも、なんか事件？　今日は市警の服を着てないわね？　水上バスの乗り場を見てたけど、張り込みでもしてるの？」
「勝手にこちらの行動を推測しないでくださいっ！」
グレイスの鋭い観察眼は、ロイドにとって煙たいものだった。
ランディも面倒そうに、サングラスを上げてみせる。
「あんたこそ、こんな所で何やってんすか？　創立記念祭なんだから、取材する場所はいくらでもあるでしょうが」

「こんな所とは、ご挨拶ね。ここ、我が社の真横よ」

「ええっ？」

指摘されて、ロイドは間近にそびえるビルを見上げた。

そこに掲げられている看板は、たしかにクロスベル通信社の物。

エリィも気づいて、顔をしかめた。

「やだ、新聞社の横の路地に隠れてたなんて……もう少し、場所を選べばよかったわね」

「あら、やっぱりあなたたち隠れてたの？　事件？　ねえ事件？」

グレイスは嬉々として、すぐ近くの建物を指さした。

「わかった！　黒月貿易公社を見張ってたのね？　創立記念祭の間、彼らが妙な事件を起こさないか、監視してたんだ？」

「いや、あの、グレイスさん……」

「そうよねえ……記念祭の特需に、黒月はあんまり絡んでないって話だから、何か事件起こす可能性、あるわよねえ」

グレイスは、勝手な推論を組み立てて、一人うなずいている。

ロイドは今さら、ぶるっと背筋を震わせた。

「しまった！　ここは、黒月からも近かったのか。まずい、まずい、ツァオ・リーなんかに見つかった日には、何を言われるか……」

「あら、どうしたの、ロイドくん。青い顔して？」

問いかけるグレイスを無視して、ロイドは路地から飛び出した。

「急ごう、もう乗船の時間だ！　これ以上、誰かに見つかったら、元も子もないぞ！」

エリィとランディも、すぐさまロイドの後を追った。

「待って、ロイド！　向こうに着いたら……」

「お嬢、相談は後だ！　それより四人でかたまって行動するのも問題なんじゃ……」

ティオも、楽器ケースを抱えて走り出す。

「とにかく、詳しいことは船内で考えましょう！」

人ごみに紛れていくロイドたちを、グレイスは鋭い視線で追った。

「ちょっとみんな！　その様子は何かあるわね！　教えてよ！　教えてくれなくても、追いかけるわよ！」

だがロイドたちは、振り向きもせず。

やがてミシュラム行きの船が、ゆっくりと湖面に滑り出していった。

＊＊＊＊＊

保養地ミシュラム。

高級リゾートホテルやテーマパークを核としたその場所は、近年、大陸有数の観光地とし

名を馳せている。

周辺には、貴族や実業家の邸宅が建ち並ぶ高級住宅街もあり、クロスベル市内とはま
た、瀟洒な景観が広がっていた。
その高級住宅街に、一際大きな邸宅が建っている。
絢爛豪華な屋敷は、広々とした庭に囲まれ、さながら城館のようだ。
その屋敷こそ、ハルトマン議長の私邸。
クロスベル市政に君臨する大政治家にふさわしい邸宅である。

しかしその屋敷の警備を固めているのは、黒ずくめのスーツに身を包んだ男たちで
無論、ルバーチェ商会の構成員。
彼らは邸宅内だけでなく、辺り一帯に布陣し、検問まで敷いている。
その様子を巨漢、ガルシア・ロッシは、屋敷の中から双眼鏡で監視していた。
「異常はないようです、会長……この街区に入ってくる人間も、すべてう
が調べております。蟻一匹入れやしません」
「蟻なら入ってもかまわん。すぐに踏み潰せる」
マルコーニ会長は、ソファにどっかと座って、葉巻をふかしていた。
「問題は《黒月》の奴らだ。ツァオ・リーの奴、ここのところ、やけにおとなしい。
に……何か仕掛けてくるぞ」
「ちっ……あの、優男」
ガルシアは、吐き捨てるように言った。
「もっともツァオ本人は、高みの見物でしょうな。あの男自身が動くことは、滅多
めてくるとすれば例の……」
「……《銀》か」
マルコーニも、嫌悪を交えて、その名を口にした。
「伝説の凶手に対抗できるのは、ガルシア、お前だけだ。今度こそ仕留めろ。ツ
を倒せば、《黒月》の動きも鈍る」
「分かっています、今度こそ……」
つぶやいたガルシアの手の中で、ぐしゃりと双眼鏡が潰れる。
すでにルバーチェ商会も臨戦態勢にあった。
そして彼らの眼中には、特務支援課の存在など影ほども存在していなかったの

＊＊＊＊

ホテル・デルフィニア。
ミシュラムにそびえる高級リゾートホテルである。
瀟洒で、落ち着きのあるたたずまいは人気が高く、創立記念祭の期間中は満室だ

勤続三十年のベテラン支配人、ハガーは、フロントにかかってくる電話を取っては、予約を断ってばかりいた。

「……はい、申し訳ございません。当ホテルは、明日まで満室でして……はい、またのお越しをお待ち申し上げております」

受話器を置くと、ハガーは、やれやれと額の汗を拭った。

「さすが創立記念祭だな。飛び込みのお客様もずいぶん多い……お断りするだけで一日が終わりそうだ」

そこへ入口から、若い女性客が入ってきた。

すらりとした脚でフロントに歩み寄り、サングラスをしたままハガーに問いかける。

「こんにちは、こちらのホテルに宿泊したいのですが……」

「申し訳ございません、お客様。当ホテルは明日まで満室でして……」

ハガーは、今日だけで何十回も繰り返したセリフを口にした。

だが女性客は、辺りをちらちら見渡すと、そっとハガーにささやいた。

「支配人さん、私よ。わ、た、し……」

「はて？　私と申されましても……」

ハガーが顔を覗き込むと、女性はわずかにサングラスを外した。

「私よ、エリィ・マクダエルです」

「おお、エリィお嬢様！」

叫んだハガーの口を、エリィは掌で塞いだ。

「しーっ！　静かにして！　誰かに見られたくないのっ！」

「これは失礼……もしかしてお忍びですか？」

「ええ、まあ、そんなところかな」

ハガーにとって、マクダエル家の人々は昔からの常連客である。

エリィ自身、祖父に連れられて、何度か泊まりに来たことがあった。

「お願い、ハガーさん。今日明日、泊まれる部屋を用意して欲しいの」

「しかし急に申されましても……」

「一生のお願いっ！　助けると思ってどうか！」

「いったいどうされたのです？　エリィお嬢様お一人ですか？」

問うた時、入口に眼鏡をかけた青年が現れた。

エリィの姿を見つけるや、早足で近づき、声を潜める。

「なあ、エリィ、なにもこんな高級ホテルに泊まらなくても……」

「だってロイド、ここなら私のつてで、部屋を融通してもらえるかもしれないのよ。他のホテルは全部満室で無理だもの」

「だからって……もっと安いホテルでいいんじゃないのか？」

「だけど、ここなら秘密も守ってくれるし……」

と、そこまでの会話を聞いたハガーが。

「……ううっ、申し訳ございません。エリィお嬢様にとって大切な思い出作りの日にお部屋がご用意できないとは……」
「えっ？　どういうこと？」
「あの小さかったエリィお嬢様が、遂にボーイフレンド様と当ホテルをご利用になられるというのに、なんのお力にもなれないとは……！」
エリィとロイドは、顔を見あわせ、フロントに身を乗り出した。
「ちょっ、ちょっと誤解しないでよ！」
「違います、俺はエリィの同僚で……」
だがハガーは、鼻水をすすって、涙をこらえた。
「いえいえ、このままではマクダエル市長に会わせる顔がございません。今から市長にお電話をして、深くお詫びを……」
「待って、ハガーさん、待って！」
「市長に電話とか要りませんから！」
ロイドは、内ポケットから身分証を取りだした。
「クロスベル市警、特務支援課、ロイド・バニングス捜査官と申します。極秘捜査のため、宿泊できる部屋を探しているだけです」
「極秘……捜査？」
きょとんとするハガーにかまわず、エリィは力無くうなだれた。

「仕方ないわね、宿はどこか他で探しましょう」
「ああ……監視は、しばらくランディたちに任せるしかないな」
ロイドは、エニグマの通信機能をオンにした。

＊＊＊＊

「ロイドか？　こちらランディだ、もう所定の位置に付いてる」
ランディは、慣れた手つきで釣り糸を湖面に投じた。
保養地ミシュラムの湖岸は、有名な釣りスポットであり、大勢の人が釣りに興じている。
ランディもその中に混じって、釣り竿を垂れていた。
だが彼の襟には、エニグマから伸ばした会話用マイクが仕込まれており、ロイドからの通信も明瞭に聞こえた。
「ここは監視するには絶好のポイントだぜ。なにしろ議長の屋敷が丸見えだからな」
ランディは、釣りに興じる振りをしながら、すぐ近くの大邸宅に視線を据えていた。
無論、黒の競売会が開かれるハルトマン議長の私邸である。
その正門前で、来客を誰何する黒ずくめの男たちに、ランディは見覚えがあった。
「議長の屋敷は、ルバーチェの構成員が固めてるぜ。競売会は明日だってのに、ずいぶん気合が入ってるな……」

『マルコーニ会長や、ガルシア・ロッシの姿は見えるか？』
ロイドの声に、ランディは一拍置いて答える。
「……いや、ここからは分からねえな。まあ、夜まで監視してれば、警備の具合も把握でき
だろう。そうすりゃ潜り込む算段も立てられる」
『よろしく頼むよ。こっちは、まだ宿を探してる。さすがに創立記念祭だから、どこのホテ
も満杯だよ』
「野宿だけは勘弁だぜ」
　言ってランディは、ふと顔をしかめた。
「待てよ、俺が監視してる間に、お前ら、デート気分でいちゃつくなよ？　変な気分が出
う前に、そっちはそっちの行動を……」
『心配ないよ、気分なんて出ないって』
『ちょっとロイド！　出ないってどういうこと？』
『え？　いや、あの、なんでエリィ、怒ってるんだ？』
　イヤホンに届いた会話に、ランディは笑いを噛み殺した。
「くくっ……まあ、ほどほどにしとけよ、お嬢。あんまり騒ぐと、誰かに見つかっ
ぜ？」
『ラ、ランディこそ、気をつけてよ』
「心配するな。俺はどっからどう見ても、ただの釣り人……」

　そうランディが言いかけた時、急に彼の釣り糸が、ぐんっ！　と反応した。
「おっ、来た来たっ！」
　強い手応えを感じ、ランディは急いで釣り針を巻き上げる。
　水しぶきと共に、湖面から上がって来たのは、鋼色に輝く魚だった。
　ぴちぴちと動くそれを、ランディは物珍しそうに眺めた。
「おーっ、なかなかの大物！　しかしなんて魚だ、こりゃ？」
　するとそこへ、近くにいた若い釣り人が歩み寄ってきた。
「うわあ、ずいぶん立派なトラードですねえ？」
「トラード？　へえ、そんな名前なんだ、これ」
「お腹に、珍しい七耀石の欠片を溜め込んでいますから、それだけでも高い値段で
よ」
　眼鏡をかけた青年に、ランディも、サングラス越しに会釈してみせた。
「こりゃ、ご親切にどうも。こちらにはよく？」
「ええ、まあ。忙しい職場ですが、休みが取れれば、必ず釣りに来ますね」
　屈託のない笑顔だった。
　青年は、ぼさぼさの髪を生やし、眼鏡の奥に優しげな光をたたえている。
　ランディは、あまりにも穏やかな彼の笑顔が妙に気になった。

「失礼ですが、このあたりにお勤めで？」
「いえ……市外の、聖ウルスラ医科大学ですよ」
青年は、ランディの横に座ると、自分も釣り糸を垂れ始めた。
「これでも一応、神経科の医者なんですが……患者さんには、医者らしく見えないなんていつも言われてまして……」
情けない笑みを浮かべて、青年は湖面に向き直る。
だがランディは、動揺を隠そうと必死だった。
（聖ウルスラ医科大学？）
（じゃあセシルさんの勤め先じゃねーかよ！）
（まさか知り合いなんてことは……）
探るように、ランディは世間話を続けた。
「……わ、私も先日、腰痛が酷くて、そちらの病院で見ていただいたばかりですよ。たしかセシルさんという看護師さんに親切にしてもらって……」
「チーフのセシル・ノイエスですか？　あの人は、うちでも指折りの看護師ですよ。私もよく仕事を手伝ってもらっています」
（やべえ、知り合いかよ！）
（こりゃ正体がバレないうちに退散した方がよさそうだな）
ランディは、あわてて釣り道具を片づけ始めた。

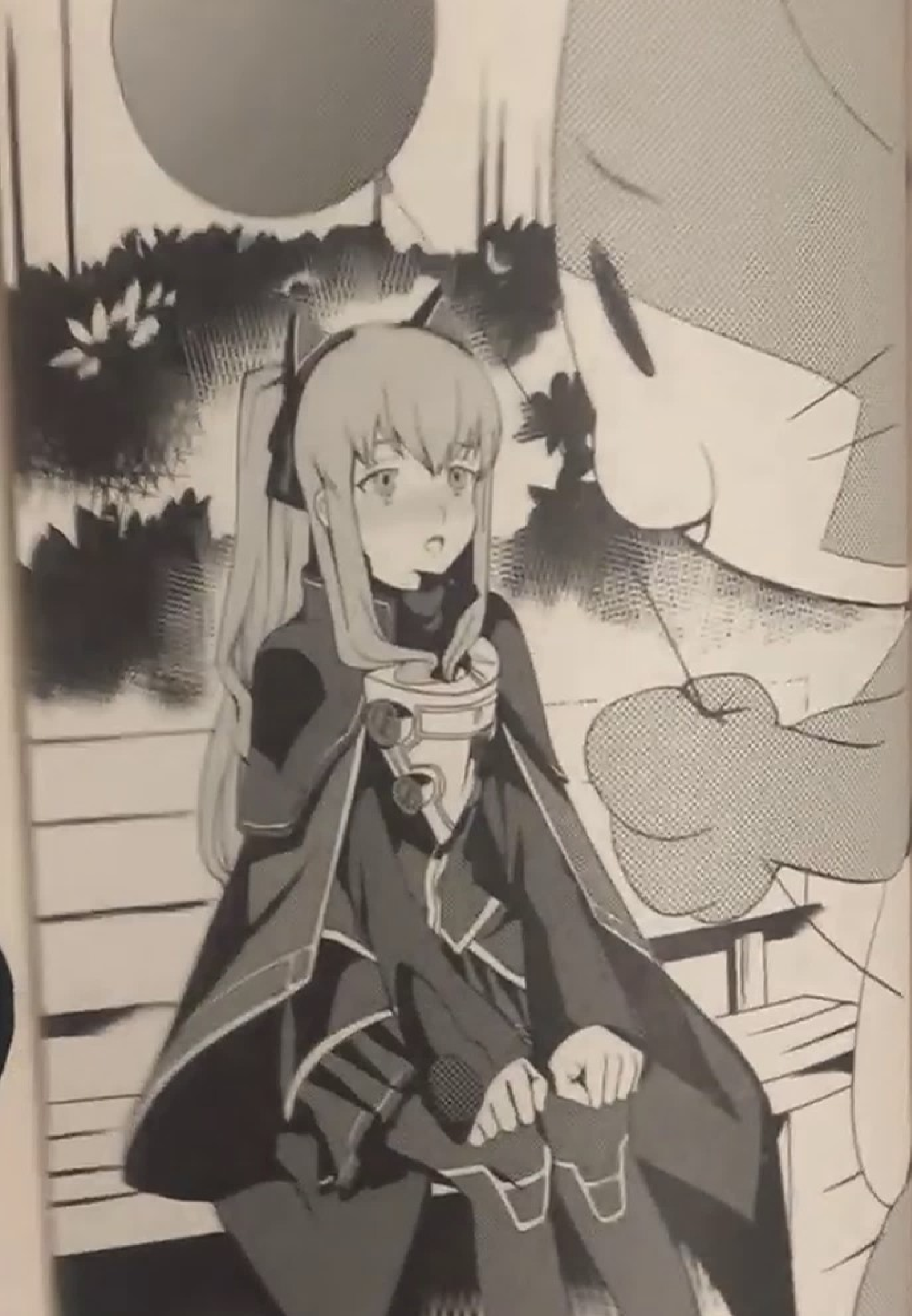
「へえ、そうだったんですか……また具合が悪くなったら、お世話になりますよ」
「おや、もうお帰りで？」
「ええ、ちょっとヤボ用が……」
そそくさと逃げるランディに、青年医師は優しげに微笑んだ。
「腰が痛くなったら、すぐに来てくださいね。私は専門外ですが、よい医者を紹介しますよ
「あ、ありがとうございます。では……」
「私は、ヨアヒム！　ヨアヒム・ギュンターと申します、いずれまた！」
青年は、にこやかに笑って手を振ってくれた。
ランディは一応、その名前を脳裏に記憶したが……すぐに思考を切り替えて、エニグマの
信機能を入れた。
「聞こえるか、ティオ？　そっちの様子はどうだ？」

＊＊＊＊

「はい、聞こえます、ランディさん。とってもおいしいです」
『な、なにいっ？』
「いえ、なんでもありません、こっちの話です」
ティオは、もぐもぐと口を動かしながら、返答した。

ミシュラム・ワンダーランド。
広大な敷地を有するテーマパークは、ミシュラム観光の目玉である。
創立記念祭とあって、場内は大勢の親子連れでにぎわっていた。
中でも最も人気の高い『みっしぃにキック！』というアトラクションには、『三時間待ちです』と書かれた看板が掲げられている。
ベンチに座ったティオは、その行列を眺めつつ、人気キャラクター、みっしぃの顔の形をした、みっしぃバーガーを食べていた。
無論、実際の視線は、場内から見えるハルトマン邸に注がれている。
ミシュラム・ワンダーランドの中からは、ランディが陣取った監視ポイントとはまた異なる視点で、邸内が観察できた。
だがティオは、周囲から聞こえてくる子供たちの声に、しばしば集中力を乱されていた。
「ねえ、むこうにみっしぃがいるよ！」
「わあっ！　一緒に写真、撮ってもらおうよ！」
ティオの視線が一瞬そちらへ動く。
「え……みっしぃ……」
少し離れたところでは、みっしぃが色取り取りの風船を配っている。

駆け寄った子供たちは、みっしぃに抱きついたり、一緒に写真を撮ったり……。
だがティオは、ぶんぶんと首を振り、視線をハルトマン邸へ戻した。
「いけません、いけません……私としたことが……今は任務中なのですから」
そこへまた、別の子供の泣き声が聞こえてきた。
「パパあ、みっしぃストラップ買ってぇ！」
「だめだめ、もう持ってるじゃないか」
「だって創立記念祭、記念限定版なんだよ！　明日までしか売ってないんだよ！」
再び、ティオの視線が動く。
「……限定版……明日まで……」
それでもティオは、しばし目を閉じて煩悩を払おうとした。
「いや、だめです、だめです……でもこんなことなら、私が釣りポイントに行って、ランデ
さんにここで見張ってもらえばよかったです。しかしこれも私に与えられた試練……みっし
のことは忘れて、任務に集中しなければ……」
だがティオが再び、まぶたを開いた時。
目の前に、みっしぃが、はにゃーんとした顔で立っていた。
「み……みっしぃ……」
みっしぃは、一人ベンチに座るティオに、『はいどうぞ』とばかりに、赤い風船をひとつ
しだした。



ティオが、それを受けとった瞬間……
こらえていた何かが弾け、理性も吹っ飛んでいた。
「みっしぃ……！」
ティオは、感極まって、ぎゅむうっ、とみっしぃに抱きつく。
みっしぃも、子供をあやすように『よしよし』と頭を撫でてくれた。
周囲の子供たちは、その様子にただ呆然……
しかし、ティオを見ていたのは、子供たちだけではなかった。
「あら……ティオさん？」
「え？」
呼ばれて、振り向いたティオの前に。
勝ち気そうな笑顔の、金髪の女性が立っていた。
ティオはあわてて、みっしぃから離れると身だしなみを調えた。
「マリアベルさん、どうしてここに？」
「ティオさんこそ、今日はお休み？　一人なの？」
近づいてきたマリアベル・クロイスは、辺りを見渡した。
ティオは、みっしぃや子供たちが立ち去るのを待って、おもむろにベンチに座り直した
「いえ……休みというわけではありません」
「じゃあ仕事なのね？」

「ま、まあ……」
「言いにくそうね？　もしかして張り込みとか？」
「そ、それは申し上げられません。それよりマリアベルさんは……？」
ティオが話題を逸らそうとすると、マリアベルもベンチに座って、窮屈そうに伸びをした。
「私は、仕事のような、遊びのような……実は明日、このミシュラムで、ちょっとしたパーティがあってね」
「パーティですか……」
「ええ、大陸各地から名士が集まるから、クロスベル国際銀行の代表として、ご挨拶に回らなくちゃいけないのよ」
「それは……」
「私は気乗りしないから、毎年断っていたんだけど、今年は仕方なく……どうしたの、ティオさん？」
マリアベルの言を聞いて、ティオは顔を強ばらせていた。
「もしかしてそのパーティ……ハルトマン議長のお宅ではありませんか？」
「まあ、どうして知ってるの？　あれは秘密裏に……」
マリアベルも言いかけて、急に視線を鋭くした。
「まさかティオさん……あなたたちも、あれに目をつけてるんじゃ……」
「…………」

「ねえ、教えて？　エリィも一緒なの？　あれは警察といえど、おいそれと手出しできる集ま
じゃないわよ？」
それでもティオは、瞑目してうなずいた。
「……分かっています。私たちもそれを潰せるとは思っていません。ただ……一度確かめた
んです、黒の競売会というものを……」
「……確かめるのも、一苦労よ。議長のお屋敷は、ルバーチェ商会が警備しているもの。
に招待状が無くては……」
ティオが遂にその名を出すと、マリアベルも口元を引き締めた。
「手に入れたんです、それを」
「いったいどうやって！」
「話すと……長くなります。でもきっかけは、先日のハッカー騒動でした」
ティオの告白に、マリアベルはふっと表情を緩めた。
「なるほどね……それで納得できましたわ。エリィやロイドさんのような人が、あの招待
手に入れてしまったら、行きたくなるのは当然……」
「私たちも、上司に止められたし、ずいぶん話し合ったのですが……」
そこまでティオが言うと、不意にマリアベルはベンチから立ち上がった。
「分かりました。親友エリィがそこまで覚悟しているなら、私も放ってはおけませんわ」
「？」

「あなたたちのこと、私がバックアップしてさしあげます。さ、参りましょう！」
言うなり、マリアベルはティオの腕をひっぱる。
ティオは、みっしぃバーガーを片手に、珍しくおろおろと狼狽した。
「え、あの……マリアベルさん……！」
「善は急げですわ、さあ早く！」
二人がミシュラム・ワンダーランドを去る頃、次第に夕暮れも迫っていた。
黒の競売会まで、あと二十数時間……

＊＊＊＊

夕陽が、エルム湖をオレンジに染めていく。
ミシュラムの高級住宅街にも、明かりが灯り始めた時、ハルトマン邸の裏庭では妙な唸
が響きはじめていた。
「ずいぶん揃えたものだな、ええ？」
マルコーニ会長の問いに、ガルシア・ロッシはうやうやしく一礼する。
「念には念です。もし《黒月》が攻めて来た場合、うちの連中だけじゃあ、頭数が足りま
からな。それでこいつらを……」
血に飢えた唸り声は、飼い主であるガルシアたちにも向けられていた。

[illegible]伝わってくる。
マルコーニもそれを見て、不遜な笑みを漏らした。
「わざわざ市場に出さず、今日のために温存した商品だ。《黒月》への対抗策とは言え
り傷物にするなよ」
「分かっています。しかしちょうどいい機会かもしれません。来客たちの前で、こい
披露すれば、買いたがる者もいるかと……」
「くくっ……さすが営業本部長だな。抜け目がねえ」
マルコーニは、腹心に葉巻を一本勧めた。
ガルシアは、それを懐に収めると、おもむろに腕時計を見やる。
「あと一日です、会長。今夜、ブツを守りきれば、競売会は滞りなく行えるでしょう
「しかしお前、来て欲しそうな顔をしているぜ、《黒月》に」
「……見抜かれましたか」
ガルシアは、野獣じみた歯を口の端から覗かせた。
「実は、うずうずしてるんですよ。俺は戦争が死ぬほど好きなんです」
檻の中の怪物より、獰猛な悪相である。
だがマルコーニもガルシアも、今この時、数十メートル先から監視されていることに
るで気づいていなかった。
なにしろ監視者が潜んでいるのは……

＊＊＊＊

「あれはガルシア・ロッシだな……隣の太った男は誰だ？」
ロイドがつぶやくと、ランディが横から双眼鏡を受けとった。
「……たぶん会長のマルコーニだ。以前、事務所の前で見かけたことがある」
「なるほど、ルバーチェ商会のナンバーワン、ナンバーツーが揃い踏みか」
ロイドは、再び双眼鏡を受けとって、ハルトマン邸の様子を眺めた。
「しかしあの二人、何をしている？　コンテナのような物の前で談笑してるけど……」
「あの中に競売品が隠してあるんじゃねえか？」
「いや、大事な品物を中庭には置かないだろう。とすると……」
つぶやいたロイドの肩が、ぽんぽんと叩かれた。
振り向けば、エリィがにこっと笑っている。
「夕食の準備、できたわよ。みんなで食べましょう」
「ああ、もうそんな時間か」
「監視も長丁場だ。腹ごしらえも大事だな」
ロイドとランディは、ベランダの陰から室内に戻った。
部屋は広く、白を基調とした趣味の良さそうな家具が並ぶ。

広いテーブルの上には手の込んだ料理が、やけに豪華な食器に盛られていた。
すでに食卓についていたエリィとティオは、この部屋の主に礼を言った。
「ありがとう、ベル。食事の用意までしてもらって……」
「助かります」
するとマリアベル・クロイスは、掌を振って微笑んだ。
「気にしないで。ここはうちの別荘だし……好きに使ってくれていいのよ」
そう言われてランディは、遠慮無く料理にぱくついた。
「いや～、アポ無しでミシュラムに来て、こんないい部屋に泊まれるなんて、ありがたい
よー　いただきます！」
「むむっ……本当はエリィの同僚でなければ、あなたのような男性を泊めはしないのですけ
ど……」
眉をひそめるマリアベルに、ロイドも少し萎縮した。
「すみません。ご迷惑をおかけして……」
「ふふっ……でも見直しましたわ、あなたたちの行動。エリィの同僚なら、そのくらいの思
切りがないと相応しくありませんものね」
悠然と言い放つマリアベルに、エリィは困惑した。
「も、もう、何を言ってるのよ。でも本当に助かるわ。ここからなら、ハルトマン邸の動き
丸見えだもの」

しかに、監視所としては絶好の位置であった。

ロスベル国際銀行総裁、ディーター・クロイスの別荘は、ハルトマン邸から目と鼻

ていた。

ルトマンの邸宅ほど豪勢ではないが、それ故にあまり目立ちもしない。

なにより三階のベランダからは、ハルトマン邸の中庭まで見え、出入りする人間の

認できるほどだった。

ロイドも、夕食を口にしながら、マリアベルに問いかけた。

ところで黒の競売会についてですが……」

「あら、私を尋問なさる気？」

「そんなつもりはありませんが、何しろ俺たちも情報不足で……」

エリィも助け船を出すように、口を開いた。

「ディーター総裁のところにも毎年、招待状は届いてたのね？」

「ええ、そうですわ。ただ父は、主催者がルバーチェ商会だと知って、参加を見あ

たの」

それで代わりにベルが出ることになったのね？」

マリアベルが白ワインを口にすると、ロイドも身を乗り出した。

「今回、出席することになった、何か事情でもあるんですか？」

「そうですわね。ひとつには私が、このミシュラムの開発計画を担当しているから

「知りませんでした……」

ランディとティオが、思わず食事の手を止めると、マリアベルはさして大事で

に振る舞った。

と言っても、ホテルとテーマパークの運営に関わっているだけですわ。その関

ここに住んでいるハルトマン議長のお誘いは無下にできなくって……今年は

ることにしたわけですわ」

なるほど……」

言われてロイドは納得したが、エリィは疑うような視線を向けている。

マリアベルも察して、わざとらしい笑顔を向けた。

あら、エリィ？　何か言いたいことがありそうですわね？」

……まあ、ね。だってベル、自分が気に入らない事は、絶対にやらないタイプ

さあ、どうかしら？」

そんな事情だけじゃあ、あなたは動かない人よ。何か他に狙いがあるんじゃな

親友のエリィならではの推理であった。

ロイドの見たところ、この二人、単に仲が良いだけではない。

さすが市長の孫娘と、銀行総裁の娘である。

親友でありながら、その会話は腹を探り合う政財界の趣があった。

「ふふっ……さすがはエリィ。実はそうですの」
「やっぱりね」
「実は今年の競売会……出品物に面白い品があるそうなんですの。それに興味があったので出席することにしたのですわ」
ロイドも、その言に食いついた。
「事前に、競売品のリストも公表されるんですね？」
「勿論ですわ。参加者は皆さん、それを知った上で資金を用意しますから」
「どういう品がお気に召したか、教えていただけますか？」
ロイドは、あくまで丁寧に問いかけた。
するとマリアベルも、また白ワインを一口含み、勿体ぶって答えを告げた。
「ローゼンベルク工房製のアンティーク・ドール……好事家の間で破格の値段が付いた幻の作品という触れ込みですわ」
「ローゼンベルク工房……！」
期せずして、ロイドたち四人は声を揃えた。
無論、《仔猫》ことハッカー少女レンが住んでいた場所だ。
その工房で作られた品と聞いて、ロイドはさらに興味をそそられた。
「……もしやその人形も、盗品でしょうか？」
「そこまでは私も存じませんわ。ただ事前の噂では、素晴らしい逸品らしくて……コレクター

[illegible]」
言うとマリアベルは、部屋の隅を指さした。
飾り棚の上には、ちょこんと少女のアンティーク・ドールが座っている。
だが残念ながらロイドに、その人形の価値を見抜く見識はなかった。
「では、あれもローゼンベルク工房製の？」
「はい、幼い頃、父に買ってもらったものですわ」
「……ちなみに、そういった人形、いくらくらいの値が付くんですか？」
「そうですわね……以前、帝都で開かれた競売会では、五〇〇万ミラで落札された作品もあったそうですけど」
「五〇〇万！」
またも、ロイドたち四人は合唱する。
ランディは、料理を噴き出しかけ、あわてて口元を押さえた。
「に、人形一体にそんな値が？　旧式の戦車なら買えちまいそうな値段だな」
「メインクラスの導力演算器が買えそうな値段ですね……」
ティオも、わざわざ席を立って、人形の前に立つと、じっくりその造りを吟味し始めた。
「熱心なファンがいるということでは、絵画や芸術品と同じですね。それにこうして間近で見ると、不思議な魅力を感じます。生きているような……でもこんなに美しい物が生きているはずがない……という気もしますし」

「ええ、ローゼンベルク工房の人形は、精緻なだけでなく、持ち主を虜にする何かを秘めていますわ。私も魅入られた一人……」

マリアベルが微笑むと、エリィはまた射貫くような視線を送った。

「でもその様子だと……ベル、あなた、手に入れる気満々みたいね？」

「ふふっ……由来がどうあれ、人形に罪はありませんから。もちろん、盗品であった場合には、しかるべき対応をいたしますわ。その上で、前の所有者と交渉して、正式に手に入れるつもりですけど」

ロイドは、その熱意に思わず頭を下げた。

「……参りました。とても俺の住む世界じゃないですね」

「でもロイドさん、あなたはその世界に踏み込もうとしている……しかも私の大事なエリィも巻き込むつもりなら、覚悟はなさった方がいいですわ」

「ちょっとベル……」

またエリィが困った顔をすると、ランディが食後のコーヒーをすすった。

「ははっ、マリアベルさんは、よっぽどお嬢のことが大事みたいっすね」

ランディとしては、あくまで軽い相づちのつもりだったらしい。

だがマリアベルは、真剣な眼差しでエリィを見つめた。

「……ええ、愛しているといっても過言ではありませんわ」

「ええっ!?」

しかしマリアベルは、臆しもせず、エリィの髪をそっと撫でた。

「だってエリィったら、こんなに可愛いんですのよ？　まっすぐで、意志が強くて、とても凛としているけれど、落ち着いた気品と優しさがあって……」

「ベル、本当にみんな誤解しちゃうから……」

「あら、誤解じゃありませんわ。あなたは私の自慢の友人です」

マリアベルの真っ直ぐな視線に、思わずエリィも沈黙した。

あまりにひたむきで、純粋な愛情に、ランディも言葉が出ない。

ようやくロイドが、せきばらいをして、場の空気を変えた。

「……えー、ごほん。じゃあそろそろ明日の競売会について相談しよう」

「あら、私とエリィの時間を邪魔するなんて命知らずな」

マリアベルがむくれる間に、ティオもテーブルに戻ってくる。

ロイドは、あらためて内ポケットから黒い招待状を取りだした。

「まず、この一枚で潜入する二人を決めよう」

＊＊＊＊

ロイドたちの会話が、窓から流れてくる。

それを《銀》は、屋根の上に潜んでじっと聞き入っていた。
「ふふふっ……特務支援課も出てくるとはな。力不足も甚だしいが……ロイド・バニングス、その蛮勇だけは褒めてやろう」
すでに日は暮れかけ、辺りにはミシュラムの夜景が広がっている。
そのきら星のような風景の中にあってさえ、ハルトマン議長邸の灯はひときわ雄々しく輝いていた。
《銀》は、それを一瞥すると、また含み笑いを漏らした。
「ガルシア・ロッシめ……備えは十分だな。だが所詮、野獣程度の知略だ。特務支援課の介入までは予測できていまい。とすると案外、ロイドたちは……」
《銀》はもう一度、耳をそばだてた。
足下の総裁の別荘からは、まだロイドたちの会話が聞こえている。
それを確認すると、《銀》は狡猾な声で唸った。
「……明日の競売会、面白くなるやもしれぬ。私や、ツァオ・リーが思った以上にな」
言うと《銀》は、屋根から屋根へ飛び移った。
やがてその影が、水上バスの機関室に潜り込み、クロスベル市内へ帰っていったことを知る者は誰もいない。
そして影が、何食わぬ顔で、その夜の《アルカンシェル》の舞台に立ったことも。

＊＊＊＊

「どうだい、これ？」
ロイドは、仲間たちにくるりと向き直った。
身につけたのは、マリアベルの別荘にあった瀟洒な男性用スーツ。
伊達眼鏡もかけた姿は、それなりの身分に見えないこともないが……
「うん……まあまあだが所詮、引き立て役だな」
ランディは、身も蓋もない言い方で告げた。
「貴族の坊ちゃんには見えないし、せいぜい若い執事ってところか。けどそれだけ変装してりゃあ、ガルシア・ロッシにも気づかれないだろう」
「……じゃあ、俺はこれで行くか」
ロイドも、あまり似合わぬと分かっているスーツ姿を見下ろす。
マリアベルの別荘には、夜会服がずらりと揃えられていた。
ディーター総裁の服は勿論、マリアベルや随行員たちが社交の場に着ていく物まであり、ロイドもその一着を着てみたのだ。
ロイドは、胸元に入れた招待状を確かめた。
「だけど、本当に俺が行っていいのか、この一枚で……」

「今さら言うなよ、お前が一番行きたがってたくせに」
ランディは、半ば呆れて腕を組んだ。
「お前は、特務支援課のリーダーだろ？　だったら今後のためにも、黒の競売会でどんなことが行われているか、確かめるのが務めだろ」
「……ああ、そのつもりで行くよ。けど……」
招待状で入れるのは、二名である。
ロイドの他に誰が行くのか。
その候補者二人が、別室で着替えを終え、部屋に入ってきた。
「準備、できたわ……」
「お待たせしました……」
エリィとティオの姿を見ると、ランディの顔がぱっと明るくなった。
「おおっー　二人ともよく似合ってるぜ！　なあロイド？」
「あ……う、うん……」
ロイドは、咄嗟にうなずくことしかできなかった。
エリィは、大きく肩を出した紫色のドレスをまとっている。
胸元も露わだが、エリィは恥ずかしいのか、そっと手を添えて、目を伏せたままだ。
一方、ティオは、落ち着いた緑色の夜会服に身を包んでいる。
年齢に合わせ、幼過ぎず、大人過ぎない選択だった。

ロイドは、しばらくまばたきして、ようやく声を搾り出した。

「な、なんか新鮮だな、そんな格好見るの、初めてだから……」

すると、後から付いて来たマリアベルが即座に叫んだ。

「まあ、私のエリィの胸元をじろじろ見るなんて！　そのいやらしい視線、許せませんわ！」

「い、いや、俺は別に……」

「いいえ！　あなたのような方に、エリィは任せられませんわ！　エリィは、私のもの！　ああ、エリィ〜、なんて素敵なの〜」

マリアベルは、後ろからエリィをきつく抱きしめている。

それを放置して、ランディはうなじを掻いた。

「さてロイドの同行者だが……ロイド、お前、競売会とか夜会とかお上品な場に出たことはあるか？」

「あるわけないよ。テーブルマナーだって怪しいくらいだ」

「だろうな……とすると、お前をリードしてくれる誰かが必要だ。社交界に経験があって、あいう場でも動じない人間が……」

するとティオが、少し残念そうに嘆息した。

「なら、一緒に行くのは私ではありませんね。私も社交の場は経験が無いし、二人ともボロ出してはすぐ正体がバレるでしょう」

「つまりだ……」

ランディは、すっとエリィを指さした。

「頼むぜ、お嬢。ロイドをリードして競売会に潜り込んでくれ」

「……私、でいいの？」

エリィに問いかけられ、ロイドも静かに瞑目した。

「うん。俺もエリィにお願いしようと思ってたんだ。俺とエリィなら武器も隠し持てるし、かあっても切り抜けられるだろう」

「わかったわ。一緒に行きましょう、ロイド」

二人は、視線を交わしてうなずきあう。

その会話に、ティオが冷静な声で割り込んだ。

「ロイドさんとエリィさんなら、普通にカップルに見えますからね。ちょうどよいのではなでしょうか」

「お、おいティオ！」

「カ、カップルだなんて、そんな……！」

しかし今度はマリアベルが、疑心暗鬼な視線をエリィに向けた。

「エリィ、まさかあなた……本当にその方と……」

「な、なに言ってるのよベル！　私たちは同僚なんだから！」

「でもあなたたち、普段は同じ屋根の下で暮らしているのでしょう？　そう言えば夜の屋上でどーのこーのという話も、まだ詳しく聞いていな……」

「そ、それより、ほら、あなたにはもうひとつお願いがあるのよ！」
エリィは、ぐいとティオを引き寄せた。
「ベル、あなたも招待状を持っているのよね？　二人分の……」
「ええ、そうですわ」
「だったらあなたの招待状で、ティオを連れていってくれないかしら？」
マリアベルは、しばし考え、すぐににたりと微笑んだ。
「……いいわ、他ならぬエリィの頼みだもの。それにティオさんの力を、間近で拝見するのも楽しみだし」
「……宜しくお願いします」
ティオは、ぺこりと頭を下げると、すぐロイドに向き直った。
「魔導杖は、楽器ケースに仕込んで持ち込みます。邸内では、エニグマを介して連絡を取り合いましょう」
「よし。後は……」
ロイドは、最後に残ったランディに目を向けた。
すでに競売会に行ける枠は残っていない。
だがランディは、飄々とした顔つきで笑って見せた。
「俺のことは気にするな。屋敷の外で待機してるさ。何かあった時に、全員、邸内にいちゃあ

「わかった、何も無い事を祈っててくれよ」
ロイドは言って、自分の言葉に違和感を覚えた。
ただの勘でしかないが、何事もなく終わるとは、到底思えなかったのだ……。

＊＊＊＊

動こうとしても、微動だにできぬ空間であった。
小さな膝を抱きかかえ、ようやく彼女は、そこに存在していた。
暗く、狭く、密閉された牢獄に。
ただ彼女の無意識だけが、救いを求めて呼びかけていた。
自分を救ってくれる、誰かに向かって。
そして彼女は、ようやく知覚したのだ。
自分を救ってくれる、誰かを……

＊＊＊＊

ミシュラムの夜空に、大輪の花が咲いた。
テーマパークから打ち上げられた花火が、競うように花開き、極彩色の光を放っては消えていく。
ロイドたちは、それをベランダから見上げていた。
「……きれいですね……」
ティオは、まるで花火を初めて見たかのようにつぶやく。
エリィもうなずき、夜風になびく髪を手で押さえた。
「……本当ね。とてもこの景色の下で、陰謀や思惑が渦巻いてるとは思えない」
「エリィらしいな。花火を見ていても、任務を忘れないなんて」
ロイドは、苦笑して言った。
「でも……俺もそうかもしれない。どうしたってハルトマン邸のことが気になるよ。もう素直に花火を喜べる子供じゃないらしい」
「仕方ねえさ、ハルトマン邸は目の前だ」
ランディも、視線をそちらに向けて呻いた。
「ましてあの屋敷には、大陸中から闇を引きずった連中が集まってくるんだ。心がざわつくの

「うん……そうだな」
ロイドは、胸元にしまった招待状にそっと触れた。
ひょんなことから手に入れたチケットである。
レンは、それを使うか、使わないか、ロイドたちの自由意志に委ねた。
セルゲイ・ロウは、行くなと止めた。
それでもロイドの直感が、行くべきだと告げている。
理屈や、正当性は抜きにして、魂がロイドを衝き動かしていたのだ。
そしてその魂に、賛同してくれる仲間がいる。
ロイドは、その事実にあらためて感謝した。
「みんな、ありがとう……俺のわがままにつき合ってくれて」
「どうしたの、ロイド、今さら……」
「お前だけのわがままじゃねえだろ、みんなの総意だぜ」
「私たちの気持ちは、ひとつです」
エリィが、ランディが、ティオが、てらいもなく答えてくれる。
それもロイドには嬉しいことだった。
「明日、よろしく頼むよ……もし何かあったら、その時は……」
と、ロイドが言葉を連ねた時だった。

不意に、彼の耳に……

……見ツケテ……

「えっ？」

ロイドは、声のした方を振り返った。
しかし聞こえてきたのは、ハルトマン邸の方角である。
まして耳に届いたのは……ささやくような女声だった。

エリィが不思議がって、首をひねった。
「どうしたの、ロイド？」
「いや、今、たしかに……」
ロイドは、今一度、耳を澄ませた。
だがしばらく待っても、ささやきは聞こえて来ない。
ロイドは、うなじを掻いて、苦笑した。
「なんでもないよ。俺、疲れてるみたいだ……」
「ロイドさん……？」
不審そうに見上げるティオに、ロイドはわざと笑ってみせた。

「大丈夫、大丈夫。花火のせいかな。耳鳴りがしただけだよ。それより明日の相談をしよう。競売会が始まるまでは……」
ロイドは言いながら、ベランダから室内に戻った。
花火はなおも上がり、人々の歓声も夜遅くまで続いていた。
ただ、その喧噪にかき消されながらも……

……私ヲ……見ツケテ……

……私ヲ……見ツケテ……

……私ヲ……

第四章　黒の競売会

創立記念祭、最終日。
五日目を迎えても、市内の賑わいは冷める様子もない。
保養地ミシュラムにくり出す観光客もなお多く、テーマパークは歓声に満ちていた。
だが歓声のすぐ間近では、ルバーチェ商会の首魁がとびきりの正装に身を包み、しきりと
時計を眺めていた。
「《黒月》の奴ら、来なかったな……」
「はい、ですが油断は禁物です」
ガルシア・ロッシは、マルコーニ会長に正対した。
「まさか奴らも日中は襲って来ないでしょうが……日没後、競売会が始まってから攻めてく
可能性は高いです」
「直前、あるいは真っ最中を狙うとすれば、たいしたものだ。競売会は七時からだったな？」
「はい。気の早い客人は、四時過ぎには、いらっしゃるかと」
マルコーニは、窓の向こうに見えるテーマパークを眺めて、葉巻を噛んだ。

「ハルトマン閣下は、事前に歓迎パーティを催されるそうだ。客人が邸内に入り……」
「……パーティが開かれている間が一番危険ですな」
ガルシアは、厳のような拳を握りしめた。
華やかな祭りの陰で。
ルバーチェ商会の男たちは、息を殺して、突発事態に備えていた。
だが彼らを嘲笑うかのように、何事もなく時は過ぎ、陽は次第に傾いていく。
そして保養地から、家族連れが笑顔で去っていくのと同時に。
彼らにとっての、宴が始まろうとしていた。

＊＊＊＊

ハルトマン邸に、次々と立派な導力リムジン車が入っていく。
車内から降り立つのは、いずれも貴族、豪商、名士といった類の人々。
彼らはみな、豪華な夜会服をまとい、談笑しながらハルトマン邸へ入っていった。
もしその光景を一般市民が見れば、政治的なパーティだと思うだろう。
しかし玄関から入った彼らを出迎えるのは、黒ずくめのスーツに身を包んだルバーチェ商

の構成員たちである。
賓客たちが差し出すのは、無論、黒い招待状。
構成員たちは、それをひとつひとつ、厳しい目で吟味していた。
「次の方、お待たせしました」
構成員は、待っていた若い男女に一礼した。
「ようこそ、黒の競売会へ。招待状をお見せいただけますか？」
「ああ、これでいいかな」
眼鏡をかけた若い男は、実直そうな人物だった。
駆け出しの青年実業家、といったところだろうか。
連れの女性と腕を組んだまま、内ポケットから封筒を取りだし、構成員にそれを手渡す。
構成員は、招待状を一瞥し、慇懃に微笑んだ。
「……確かに。念のため、お名前を伺ってもよろしいでしょうか？」
「ガイ・バニングスだ」
若い男は、事前の打ち合わせ通り、兄の名……いや、偽名を名乗った。
しかし構成員は身分証の提示などは、求めない。
その代わり、連れの女性にも視線を送ってきた。
「バニングス様ですね、承知しました。ところでそちらの方は？」

「あら、名乗る必要があるの？」
理知的な瞳の女性は、からかうように笑った。
「私の方は事情があって、身分を明かせないのだけど……こういう催しでもあるし、別に構
ないのよね？」
「ええ、まあ……ですが一応、バニングス様とのご関係を伺ってもよろしいでしょうか？」
「やだ、ご関係だなんて……」
女性は、しなやかな腕を、バニングス氏のそれに巻き付かせた。
「ふふっ……私たち、恋人以外の何に見えると思う？」
「こ、これは失礼しました」
「いいのよ。まだお父様とお母様には、内緒にしている関係だから……ねえ、ガイ？」
「あ……ああ、そうだね」
バニングス氏は、ごほんと喉のつかえを払った。
「ごめんよ……僕が君の身分に釣り合わないばっかりに妙な心配をさせて……でも、きっと
業を成功させて、ご両親にお嬢さんをくださいって頼めるよう、頑張るから！」
「期待してるわ、ガイ」
女性は、バニングス氏の肩に、甘えるようにしなだれかかる。
構成員も半ば呆れて、サングラスの位置を直した。
「……結構です。それではバニングス様、お連れ様。どうか存分に、今宵の競売会をお楽し

ください。中庭にお酒と料理をご用意してございます。どうぞご自由に」
「ありがとう、君」
「楽しませてもらうわね」
二人の男女は、連れだってハルトマン邸のエントランスに向かった。
だが構成員から離れると、すぐに……
「うまくいったな、エリィ？」
「そうね。でもこの恋人台本、ちょっとわざとらしくない？」
「う、うん……はりきってランディが書いてたけど」
「とにかく、しばらく恋人の振りを続けましょ、ロイド」
「しーっ……ここではガイって呼んでくれよ」
ロイドは、唇に人差し指を当てた。
議長邸は、エントランスからして壮麗なたたずまいであった。
宮殿じみた内装には、滝や泉を配して、人工のせせらぎが流れている。
賓客たちの間を、グラスを持った給仕たちが行き交い、ロイドとエリィもノンアルコール・ドリンクを受けとった。
ロイドは、それを一口舐め、顔をしかめた。

「う〜ん……緊張して、味がよくわからないな」
「でもみんなが飲んでるお酒、すっごくいいモノよ。あれをふんだんに出せるなんて……このお屋敷も噂には聞いてたけど、ここまでとは……」
「ああ……想像以上だったな。ハルトマン議長も、ルバーチェ商会も、これほどの財力があったとは……」
ロイドは、ドリンクを飲む振りをしながら周囲を見渡した。
ハルトマン邸の偉容が、まるで彼らの前に立ちはだかる壁そのものに見える。
財力ほど、分かり易い力はない。
それをまざまざと眼前に突きつけられた感がした。
そしてエントランスには、ひっきりなしに賓客が現れている。
ロイドは、その中にもう一組の潜入チームを探したが、『彼女たち』は、まだ姿を見せてはいなかった。
「計画通り、時間差出勤だな」
「ええ。いずれベルとティオも来るでしょう。それまで中庭で……」
言いながら歩くうち、目の前の景色が変わった。
一面、ガラス張りの壁面をぬけると、その先には中庭が広がっている。
中庭には、水を噴き上げる石像に囲まれたプールが据えられ、周囲にはカクテルコーナーが設けられていた。

すでに多くの客たちが、ラフな水着に着替え、プールサイドで乾杯している。

ロイドは唖然として、自分のスーツを見下ろした。

「せっかく着たけど……こっちの服の方が目立ちそうだな」

「水着も貸してくれるらしいわ。あっちよ」

「え、おい、エリィ、本当に？」

戸惑うロイドを、エリィはぐいと引き寄せた。

「悪目立ちするよりマシでしょ。この場にとけ込まないと……さ、早く」

「いやだけど……」

「おろおろしないで……あ、ちょっとそこの執事さん？」

二人は腕を組んだまま、着替え場所まで執事に案内されていく。

その数秒後、二人の背後、数メートルの距離を、巨漢が通過した。

＊＊＊＊＊

「……気のせいか？」

ガルシア・ロッシは、しきりと周囲を見回した。

傍にいた構成員が、すぐさま近くに駆け寄ってくる。

「若頭、何か？」

「いや、なんでもねえ。聞き覚えのある声を耳にしたような……それより、異常はねえだろうな？」

「はい。今のところは何も……」

「競売会まであと二時間半だ。油断するんじゃねえぞ」

言ってガルシアは、もう一度、賓客を眺めた。

だが彼が知る、特務支援課の捜査官は、すでにその場から消えていたのだ。

＊＊＊＊＊

夕暮れの風が、プールサイドに吹いていた。

うっすらと夜が色づいた空は、薄紫に煙っている。

水着に着替えたロイドは、プールに足を浸して驚いた。

「あったかい……温水プールとは、さすがだな」

辺りは、賓客たちのざわめきで満ち、ロイドたちのような若者は、プールで戯れ、嬌声を上げていた。

その歓声に紛れるように、ロイドはプールの中に身を沈めていった。

「こんなプールを用意できるなんて凄いな。そう思わないか、エリィ？」

問いかけて、ロイドは背後を振り返る。

瞬間、夕陽を浴びたエリィの姿が目に入った。
エリィは、南国の花をあしらったビキニを身につけ、プールサイドに歩み寄ってくる。
風になびく髪が、陽光を反射し、宝石をちりばめたように輝いていた。
そんな姿を見たのは、ロイドも初めてである。
すらりと伸びた脚で一歩踏み出すたび、周囲の男たちもざわつき、いくつもの視線がエリィに注がれた。
エリィ自身もそれに気づいて、大きくくびれた腰にパレオを巻き付けた。
「本当ね……これだけの歓待を受ければ、誰だって虜にされちゃうわ」
エリィは、プールサイドに腰を下ろし、足だけをぱしゃぱしゃと水に浸けた。
ロイドも水から上がると、彼女の横に並んで、周囲を窺った。
「ああ、もし俺が本当に青年実業家で、こういう場を見てしまったら……自分もこんな生活がしてみたいって思うだろうし」
「そうなの？　ロイドは違うと思うわ」
エリィは、笑って告げた。
「ロイドは、実業家や政治家になっても、今と同じだと思う。真面目にぶつかって、ぐんぐん前に進んでいくわよ、きっと」
「そうかな……」
言われてロイドも、あらためて賓客たちを観察した。

実業家らしい男たちは、酒を飲み、派手な女の腰を抱き寄せ、笑っている。
それにしなだれかかる女たちの視線も、男たちではなく、彼らが身につける宝飾品に吸い寄せられていた。
「……なんだろうな。こういう贅沢なんてしたくない、と言えば嘘になるけど……やっぱり違和感があるよ。俺自身とは」
「私も、ずっと昔から感じてたわ。同じことを……」
エリィは言って、給仕からドリンクを受けとった。
ロイドも同じものを手にして、エリィと杯を軽くぶつける。
「同じことって？」
「子供の頃から、祖父や父に連れられて、こういったパーティに来ていたのよ。ここまで派手ではなかったけれど……でも自分がいる場所には思えなかった」
エリィは、グラスの縁に口づけた。
「政治家として、社交の場が必要なのは分かってるの。でも……自分の居場所じゃない。早く帰りたいって思ってた」
「今は……どう思ってるんだ？」
「え？」
「特務支援課さ。俺たちと一緒にいても……」
ロイドが言いかけると、エリィは明るく微笑んでくれた。

「心配しないで。もう帰りたいなんて思ってないから」
「そうか……」
「今は、特務支援課が自分の家だと思ってるの。だってロイドたちと一緒だと、すごく居心地がいいから……」
「よかった……俺もエリィといると落ち着くんだ。ずっと一緒にいたいって思ってる」
「え、ずっと……」
不意に、エリィの頬が赤く染まる。
ロイドは、その変化に気づかぬまま、微笑み返した。
「ああ、そうだよ。この前も言ったじゃないか。傍にいてほしいって……」
「……うん」
「今、俺たちの前にある力と戦うのは大変だけど……俺たちならやっていけるよ」
ロイドが言うと、エリィも黙ってうなずいた。
そしてエリィは、急に目線を上げて……
「ねえロイド……もしかして、私たち……」
エリィが何かを告げようとした時、突然プールの水面が泡だった。
水底から、ごぼごぼとあぶくを立て、何かが浮上してくる。
それは、じとーっとした目で二人を睨む、ティオの顔であった。
「……この前、っていつの話ですか？」

「うわっ！　びっくりした！　ティオか、おどかすなよ！」
「しーっ、お静かに」
ティオは、ワンピースタイプの水着を着ているようだが、水面に出しているのは顔だけだ。
「あまり親しく話しかけないでください。ここでは私たちは、赤の他人という設定です」
「そ、そうだったな、すまん」
「ねえ、ベルはどこにいるの？」
エリィが問うと、ティオのすぐ脇に、もうひとつ頭が浮上してきた。
「ここですわ、エリィ……」
「やだ、そんなところにいたの？　でも無事に潜入できたみたいね？」
しかしマリアベルは、嫉妬に燃えた視線をロイドに突き刺していた。
「それはともかく……さっきから見ていれば、なんですの、あなた。私のエリィといちゃいちゃするなんて」
「誤解だよ、俺たちはここで……」
「問答無用ですわ。さっきから、ちらちらエリィの胸元を見ていたくせに」
「み、見てないってば！　なあ、エリィ……」
と言ってエリィに向き直ると、たしかにすぐ傍に彼女の胸がある。
今さら気づいて、ロイドは赤らんだ顔を背けた。
「……ご、ごめん、ちょっと近すぎるかもしれない」

「や、やだ、変なこと言わないでよ」
エリィも今ごろになって、胸元を隠し始める。
その二人の様子に、ティオがまた冷めた視線を送った。
「ロイドさんもエリィさんも、目的を忘れないでください。私たちは、競売会の実態を探りに来たのではありませんか。その借り物の水着も、今飲んでいるドリンクも、みんなルバーチェ商会が密貿易で稼いだお金で出来ているんですよ」
「げ、現実的なことを言うんだな……」
「急に飲み物がまずく感じてきたわ」
ロイドとエリィがげんなりすると、マリアベルが水の中から告げた。
「それにしてもハルトマン議長は、なかなか抜け目ない人物のようですわね。この競売会……よく出来たシステムですわ」
「よく出来ている……どういう意味です？」
ロイドが問うと、マリアベルは声を潜めた。
「決して摘発されることのない、上流階級専用の競売会……ここは各国の有力者にとって実に都合のいい場ですわ。単なる盗品以外にも、賄賂の品や、資金調達のための横流し品……それらを自国で処分しようとすれば、法律による摘発は免れない」
「なるほどな……」
ロイドも、素早く思考を巡らせた。

「しかし、この国クロスベルでは、そういった非合法行為も『見なかったこと』で済まされるってことですね」
「正解ですわ。だからこそ帝国も、共和国も、この競売会を黙認しているのです。恐らく、今
回の出品物の中にも、あるはずですわ。両国政府から出品された、曰くつきの品々が……」
エリィも、視線を鋭くして呻いた。
「つまり国際的にも黙認されたブラックマーケットって事ね。そう考えると、たしかにうま
出来ているし、とんでもない事が行われている……」
ティオも、ぶくぶくとあぶくを出しながら言った。
「クロスベルらしい仕組みですね。歪だけれど、その歪さが罷り通ってしまうところが……」
「歪な仕組みか……」
ロイドは、この豪勢なパーティに寒気を覚えた。
同時に、心の奥に熱い闘争心がたぎり始めている。
「歪なものなら、決して長続きはしない……どんなに華美なものでも、地に足がついていなけ
れば、何かのきっかけで崩れ去るはずだ」
「あら、ロイドさん……あなた、そのきっかけになるおつもり？」
マリアベルに問われ、ロイドは小さくうなずいた。
「ええ、もし俺にそれができるなら……初めはこの豪華さに圧倒されたけど、足下がぐらついていると分かれば、崩しようはあるはずです」

「意外に頼もしいことをおっしゃるのね、それでこそエリィの同僚ですわ」

「あのねえ、ベル……」

エリィが呆れた声をあげようとすると、賓客たちがざわついた。

マイクを手にした執事が現れ、うやうやしく一礼する。

「ご来賓の皆様……当競売会の主催者が参りましたので、皆様にご挨拶させていただきます。ルバーチェ商会、マルコーニ会長にございます」

同時に、万雷の拍手。

歓呼に迎えられ、まずダークスーツに身を包んだハルトマン議長が現れた。

その後ろに、マルコーニ会長が付き従っている。

「来たな……」

「ええ、いよいよお出ましね」

ロイドとエリィは、苦々しげにつぶやく。

マルコーニは、執事からマイクを受けとると、にこやかに挨拶した。

「皆様、ご機嫌よう！　本日の競売会を主催するルバーチェ商会のマルコーニです。早いもので、この競売会も今年で八回目を迎えました……」

再び、拍手。

マルコーニは、それへわざとらしい笑みで応じた。

「年々、来場される方々も増え、それに比例して出品物もますます充実した物になっておりま

す。これもひとえに、皆様方のご愛顧の賜物であると言えましょう！」

ロイドは、でっぷりと肥えたマルコーニ会長を観察した。

「こんなに近くで見るのは初めてだけど……したたかそうな顔だな。さすがルバーチェを取り仕切っているだけある」

「前会長を追い落として今の会長職に就いたって話よ。望みのためなら手段は選ばないタイプとも聞いたわ」

エリィがつぶやく間も、マルコーニの挨拶は続いていた。

「そしてもう一方……毎年、私どもの催しに素晴らしい邸宅をご提供下さっている方をご紹介しましょう。クロスベル自治州代表にして、自治州議会議長、ハルトマン閣下です！」

拍手が一段と大きくなった。

マイクを預かった議長も、普段険しい表情を、ほんの少し緩めている。

「ご紹介にあずかったハルトマンです。今宵、この素晴らしい催しを開催できるのは、誠に光栄の極み。単なる競売会だけでなく、各界の名士の方々が集い、交歓する出会いの場でもあります。どうか当館をご自分の家と思い、心よりお寛ぎください」

ロイドは、議長の落ち着き払った声に嘆息した。

「さすが大政治家だな。見るからに隙が無い……エリィは面識あるんだろ？」

「ええ、お祖父さまのお伴で何度か。今この場で会うのはまずいわね」

エリィは、さりげなくサングラスをかけて顔を隠す。

挨拶を終えたマルコーニとハルトマンの元には、賓客たちがこぞって詰めかけていた。
みな、この場で親交を深め、より大きな恩恵をもぎ取ろうと必死なのだ。
ロイドは、そっとエリィの腕を取った。
「みんな主催者に注目している。邸内を探索するなら今のうちだ」
「そうみたいね……競売会が始まるまでまだ二時間近くあるし……」
「よし、そうと決まったら……」
言いかけてロイドは、プールサイドから立ち上がった。
すると突然……

《……見ツケテ……》
《……見ツケテ……》

「えっ！」
思わず、ロイドは声を上げかけた。
どこからか聞こえてきたのは、女声の呼びかけ。
昨夜、耳にしたのと同じ言葉である。
しかももっと明瞭に、意志すらも感じるほど強く聞こえた。
そして呼びかけたのは、明らかに少女の声だったのだ。

だが辺りの招待客を見渡しても、声の主らしい少女は見あたらない。
ロイドは不思議に思って、ティオに目をやった。
「ティオ、今、何か言ったかい？」
「いいえ、何も」
「そうか……誰かに呼ばれた気がしたんだけど……」
もし本当に誰かの声がしたなら、感応力に優れたティオにも聞こえたはずだ。
だが声は、ロイドにしか聞こえなかったらしい。
エリィも一瞬、辺りを眺め、すぐに肩をすくめた。
「気のせいじゃない？　それよりほら、調べるなら早い方がいいわ」
「わ、分かってるよ」
ロイドがうなずくと、ティオとマリアベルもぶくぶくと潜水した。
「ではロイドさん、後ほど……」
「四人一緒だと目立つでしょうから、別々に行動しましょう」
「ああ、何かあったらエニグマで連絡するよ」
言ってロイドは、プールサイドから立ち去った。
しかし彼の鼓膜には、いまだその響きがこびりついていたのだ。

＊＊＊＊＊

眼下に、ハルトマン邸の中庭が広がっている。
マルコーニ会長も、ハルトマン議長も、プールサイドに集まった賓客たちとの歓談に応じ、にこやかな笑顔を見せていた。
それを見下ろし、伝説の凶手は、にたりと微笑む。
「もう来ないと思っているな。よかろう」
ハルトマン邸の屋根に潜む《銀》は、唇を舐めた。
「貴様らの栄華も今宵限りだ。せいぜい今のうちに楽しむがいい」
そして《銀》は、飛翔した。
彼だけが突き止めた、獲物の在処へ。

＊＊＊＊＊

ハルトマン議長の邸宅は、ロイドたちの想像を越える広さだった。
中央には、高級ホテルを思わせるエントランスと会議場があり、そこから左に議長の私邸、右には来賓客の宿泊棟が連なっている。

会議場に[illegible]えたロイドとエリィは、廊下と階段をいくつも通り、ハルトマン邸の奥へ奥へと進んでいた。
無論、ロイドは衝撃警棒を、エリィは導力銃を隠し持っている。
賓客のほとんどは、プールサイドにいるようで、邸内に人気は少なかった。
「競売品はどこだ？」
ロイドは、警戒しつつ、通路を曲がった。
「各国が公に出来ないような品物があるはずだ。それがどんな物か、この目で確かめたい」
「あるとしたら、私邸の方かしら……」
エリィが警戒した時、どんっ！　と大きな音が響いた。
ロイドたちは、思わず身を縮めたが、すぐに安堵する。
窓の向こうでは、創立記念祭最後の夜を惜しむように、ミシュラム・ワンダーランドから花火が上がっていたのだ。
その音に紛れつつ、ロイドたちは最上階へと階段を上がった。
「奥へ行こう。競売品は、来客の目につかない所にあるはずだ」
「その先はもうハルトマン議長の私邸よ。このあたりなら、たしかに……」
「しっ！　誰かいるっ」
ロイドたちは、通路の陰に息を潜めた。
曲がり角の向こうからは、聞き覚えのあるどら声が響いてきた。

「おい、ちゃんとリスト通りに揃っているんだろうな？　前半の出品物は、そろそろ会場に運び出すぞ！」
「ガルシア・ロッシ……」
悟ったロイドは、声のする方へ、わずかに顔を出した。
通路の先には、たしかに巨漢、ガルシア・ロッシが見える。
彼は、ルバーチェ商会の構成員たちと、何やら話し込んでいた。
「……妙だな。てっきり何か仕掛けてくると思ったんだが……」
「《黒月》ですか？　今のところ、現れる様子はありませんね」
その会話を、エリィも聞きつけた。
「《黒月》ですって？　どうして彼らを警戒しているのかしら」
「さあ……」
ロイドが、さらに耳を澄ませると、ガルシアの声量がいっそう大きくなった。
「馬鹿野郎、連中を甘く見るな。《銀》はもちろん、あのツァオも、有能すぎて他の幹部連中から疎まれてるって噂の切れ者だ。気ぃ抜いていると、喉笛かっ斬られるぞ」
「は、はい……」
ロイドは、すぐに推測を組み立てた。
「なるほど……《黒月》は、ルバーチェ商会の敵対組織だ。この競売会を潰そうとしても、おかしくはない」
「《黒月》は、共和国の東方人たちのものね。帝国派のハルトマン議長の面子を潰すことにも利があるのよ」
エリィも、即座に政治的利害を把握した。
するとガルシアが、ちらっとロイドたちのいる方へ視線を向けた。
「しかし今年の競売会……妙な感じがしやがるな。《黒月》以外にも、何か紛れ込んでいる
うな気がするぜ」
あわててロイドとエリィは、首をすくめる。
構成員たちも、動揺して辺りを警戒した。
「そ、それも戦場で培った猟兵としての勘ですか？」
「まあな。しかし……俺もヤキが回っちまったか。このまま無事終わるに越した事はねえん
が……どうにも血が騒ぎやがる」
「あ、あの……」
「久々に、狩りがしたい気分だぜ。できれば《銀》と、一戦交えてえもんだ。くくっ……く
くくっ……」
笑いを噛み殺して、ガルシアはどこかへ去っていく。
ロイドとエリィは、ほっと胸を撫で下ろした。
「まずい、まずい……しかしさすがはガルシアだな。凶暴なだけに見えて、俺たちの存在を直
感で悟ってるらしい」

「ほんと……でもどうやらこの先の部屋が……」
「ああ。競売品の倉庫だ」
ロイドは今一度、ガルシアが出てきた部屋を確認した。
長い廊下の突き当たりに、両開きの扉。
左右には、黒ずくめの男たちが短機関銃を構えて立っている。
「ものものしいな……見張りが減った時を狙おう」
「でも、そろそろ競売品を運び出すらしいわよ。早くしないと……」
ロイドは、腕時計をちらりと見た。
競売会まであと一時間弱。
忍び込めるチャンスは少なく、ロイドも焦りを感じた。
せっかくここまで来たのだ。せめてわずかな時間だけでも……

異変は、その刹那に起こった。
唐突に、奥の部屋から、何かが砕ける音がする。
同時に、くぐもった悲鳴。
しかしそれらはみな、花火の音にかき消され、遠くまでは聞こえていない。
扉の前に立っていた構成員だけが、あわててドアを開けた。
「おい、どうした！」

「なんだ、今の音は！」
構成員たちが部屋に駆け込むと、再び室内から争う気配がする。
エリィが、ロイドの腕をぐっとつかんだ。
「何かしら、今の音？」
「確かめるしかないようだな！」
ロイドは、ジャケットの内側に隠していた衝撃警棒を取り出し、奥の部屋へ疾走した。
背後には、ぴたりとエリィが付き添い、導力銃を構えている。
二人は、開け放たれたままの扉から室内へ踏み込むと……
「お前は……！」
その時、また花火が上がった。
部屋は、一面がガラス窓になっており、夜空の花火が透けて見える。
しかしガラス窓の一部は、外側から無惨に打ち破られていた。
窓辺に立つのは、黒い影。
漆黒のマントを翼のように広げ、すでに構成員を二人ぶちのめしている。
猛禽を思わせる嘴めいた仮面。歪な形の刀剣。
無論、ロイドとエリィにとっては、既知の人物である。
しかし居並ぶルバーチェの構成員たちは、まだそれが誰だか理解していなかった。
「て、てめえ！」

「何者だ！　《黒月》の手下か！」
その叫びを、漆黒の人物は嘲った。
「手下とは心外だな。だが《黒月》とは無縁ではない」
「な、なにぃっ！」
「我が名は《銀》。故あって、ここにある競売品を頂戴しに来た」
名乗った瞬間、ルバーチェ商会の男たちは、硬直した。
「《銀》だと！」
「じゃあ伝説の凶手……」
その一瞬の動揺に、《銀》はすかさずつけ込んだ。
「ぬるい……！」
電光の如く、《銀》は左右に飛翔した。
振り抜いた剣の軌跡は見えぬほど速く、斬撃を浴びた構成員たちは、一刀のもとに倒れ伏していく。
構成員たちは、手にした短機関銃を撃つ間もなく、一人残らず崩れ落ちた。
「がはっ……」
「ち……くしょう……」
《銀》は、ふわり、マントをひるがえして着地する。
そしてようやく、入口に立つロイドとエリィに視線を向けた。

「まんまと[illegible]」
「あんた……」
「しかし、この屋敷に忍び込むほどの勇気があるとは恐れ入ったぞ」
ロイドは、《銀》に向かって一歩、間合いを詰めた。
「誰を殺しに来た？　マルコーニ会長か？　まさかハルトマン議長……」
「ふっ……凶手は獲物の名を教えぬものだ。それに今、言った通り、私の獲物はここにある競売品だ」
「……なるほど、《黒月》に頼まれたな？」
ロイドは、じりじりと間合いを詰めた。
室内には、無数の荷物や木箱が、所狭しと積まれている。
やはりこの部屋が、競売品の倉庫らしい。
「品物を奪えば、競売会は成立しない……ルバーチェ商会の面子も潰れる。それを一番喜ぶのは、ツァオ・リーたち《黒月》だからな」
「くくくっ……思った以上にモノがよく見えているようだな」
「ではやはり……」
「だが……私もツァオ・リーの飼い犬ではない。奴に依頼されたまま、モノを奪うだけでは面白くない」
「どういう意味だ、それは……」

ロイドが問うと、《銀》はマントをひるがえした。
「後は、お前たちに任せよう。得体の知れぬ凶手が暴れるより、クロスベル警察に乗り出してもらった方が好都合だ。無論、逃げられればの話だが」
「なんだと……」
「わかったわ、私たちがこれを押収しても……」
エリィがつぶやき、ロイドも得心した。
《黒月》の狙いは、ルバーチェ商会の弱体化である。
単に競売会を潰すだけでなく、ロイドたち市警を介入させれば、より事態は大事になると見たのだ。
ロイドは、衝撃警棒を握る手に力を込めた。
「俺たちまで利用するつもりか、ルバーチェを潰すために……」
「しかしお前たちも、ルバーチェを潰したいのだろう？　その点において、《黒月》とお前たちの目的は合致している」
「ふざけるな。俺たちは《黒月》の伸張までは望んじゃいない」
「なら、この競売品の山、見て見ぬ振りをして帰るか？　ふふふっ……」
《銀》は哄笑を響かせると、窓辺に立った。
「後は、お前たちに任せた。この競売品を……そしてルバーチェ商会をどうするかも、お前たちの意志に委ねてやろう」

「待て、《銀》——」
「楽しみだな、お前たちがどうするかが……」
微笑んで、《銀》はコウモリのように滑空した。
夜空には、テーマパークの花火が輝いている。
《銀》は、その光の中に飛び、やがてかき消えていく。
後に残されたロイドは、エリィに振り返った。
「なんてことだ……こうなるとは予想してなかったな」
「え、ええ……でも品物を調べるなら、今がチャンスよ」
ロイドは、床に昏倒する男たちを一瞥した。
意識が戻るには、まだ時間がかかるだろう。
先ほどの銃声も、花火の音にかき消されている。
競売品を誰かが取りに来るまで、気づかれる気配はなかった。
「よし、今のうちだ。もし何か重要な盗品を見つけたら……」
と、決心したロイドの耳に……
《……見ツケテ……》
《……見ツケテ……》

また、あの声が響いた。
しかも先ほどより、声が明瞭になっている。
まるですぐ近くから呼ばれている気がした。
ロイドは、周囲の箱の山を見渡した。

〈……見ツケテ……〉
〈……私ヲ……見ツケテ……〉
〈……私ヲ……………〉

ロイドは、エリィの方を振り返った。
しかしエリィは、黙々と競売品を調べている。
やはり声が聞こえているのは、ロイドだけなのだ。
ロイドは、声に向かって歩き出し、荷物の山を掻き分けた。
「なんなんだ……まさか……」
すると大きなトランクが、ロイドの視界に入った。
その表面には、競売品を表すタグが付いている。
『ローゼンベルク工房製　人形』
その文字を見た瞬間、ロイドの脳裏にレンの顔が浮かんだ。

[illegible]を魅了してくれた謎の少女。
そしてマリアベルの言葉も脳裏をよぎる。
『ローゼンベルク工房製のアンティーク・ドール……好事家の間で破格の値段が付いた幻の
品という触れ込みですわ』

この箱に、マリアベルも欲しがっていた一番人気の商品が入っているのだろうか。
ロイドは、腰からピッキングツールを取りだすと、錠前に差し込んだ。
警察学校で習った技術は、すぐに錠を外し、ゆっくりトランクが開く。
だが中身が露わになった時、ロイドは思わず絶句した。
「これは……！」
「どうしたの、ロイド？」
異変を察して、エリィも近づいてくる。
途端に彼女の表情も、驚愕に呑まれた。
「そんな……嘘でしょ……」
ロイドは、声も出せぬまま、箱の中身に見入っていた。
そしてまたあの声が、もう一度、ロイドを呼んだ。

〈……私ヲ……見ツケテ……〉
〈……私ヲ………〉

＊＊＊＊

「エリィたち、どうしてるかしら……」
マリアベルは、そわそわと周囲を窺った。
競売会の時間が間近に迫り、エントランスには、再び正装した人々があふれている。
しかしその中にロイドとエリィの姿は見あたらない。
それでもティオは、冷静な顔つきで髪飾りに触れた。
「たしかに遅いですね。センサーの感度を上げて、二人の様子を……」
「待って。厄介な人が来たわ」
言ったマリアベルに、野太い声がかけられた。
「失礼……ディーター総裁のお嬢様とお見受けしましたが……」
「ええ、そうですわ」
振り向いたマリアベルの前には、分厚い肉の壁が突っ立っていた。
ガルシア・ロッシは、あまり似合わない笑顔で深々と一礼する。
「ルバーチェ商会営業本部長、ガルシアと申します。今年は遂に、我々の招待に応じてくださ

ったわけですな」
「マリアベル・クロイスと申します、以後お見知りおきを」
ティオを背に隠すように、マリアベルは位置を移動した。
「ふふ……何度も断るのもさすがに失礼かと思いまして……」
「あらためまして、マリアベル様、ようこそ黒の競売会へ。まずはハルトマン議長にご紹介
たしましょうか？」
ティオは、マリアベルの背中から視線を動かした。
ハルトマン議長は、確かに至近距離にいるが、マリアベルは慇懃に微笑んだ。
「議長閣下には、後ほど改めてご挨拶しますわ。それより今年の目玉は、ローゼンベルク工
の人形だとか……」
「ほお……あれをご所望ですか。さすがにお目が高い」
「けれど狙っている方は、大勢いるのでしょう？　どんな逸品だか、競売会の前に少しお教
いただけるかしら？」
するとガルシアは、わずかに表情を曇らせた。
「それは……私のような男が先に説明するより、いきなり実物をご覧になった方が感動なさ
ると思いますな」
「まあ、お上手ね。では競売会を楽しみにしていますわ」
「はい、では会場にて……」

そう言って去るガルシアの背に、ティオは不審な視線を向けた。
「……人形の件、あまり言いたくなさそうでしたね」
「ええ。きっと後ろ暗いことがあるんだわ。でもあの反応は、まるで人形について何も知らないような……」
ティオが言うと、マリアベルが眉根を寄せた。
「営業本部長が目玉商品を知らない？　そんなことってあるかしら」
「理屈ではありえません。でもマリアベルさんのような上客に訊ねられたら、買ってもらえるように売り込むのが商才ではないでしょうか？」
「なるほど……ティオさんも、さすがは特務支援課ね」
「おだてないでください。それにしてもローゼンベルク工房の人形とはいったい……」
ティオがつぶやいていたのと同じ頃。
ロイドたちは、その『人形』と対面していた。

＊＊＊＊

「これが……人形……？」
ロイドは、エリィと共にトランクの中を覗き込んだ。
中には、一人の女の子が寝そべっている。

だが、人形ではない。
寝息を立てて眠る、歴とした人間の少女なのだ。
緑色の髪をゆるく巻き、肌の色は透けるように白い。
寝顔は健やかだが、どこか儚げな印象がある。
そしてロイドは、彼女の手首、足首に付けられたモノに気づいた。
「なんてことを……」
少女の右手首、左足首には枷のような金属具が嵌められていたのだ。
エリィも、表情を強ばらせた。
「まさか……人形と称して、この子を売るつもりなの？」
「ルバーチェ商会め、人身売買にまで手を染めていたなんて……」
ロイドは、そっと手を伸ばして、女の子の髪を撫でてやった。
するとその瞬間、女の子はぴくっと反応し……やがて目を醒ました。
「う、うーん……」
「君、大丈夫かい？」
ロイドが問いかけると、女の子はきょとんと首を傾げた。
「あれえ……ここ、どこ？　お兄ちゃんたち、誰え？」
「い、いや君こそ……」
「どうしてこんな所にいるの？」

エリィも声をかけると、女の子は首を傾げた。
「どーしたの？　目をまんまるくして……あははっ！　お兄ちゃんたち、面白い～！」
「お、面白いって……」
ロイドが面食らうと、エリィは心配そうに女の子を眺めた。
「ねえ、あなたはいつからこのトランクに入っていたの？　お父さんとお母さんは、どこにいるか分かる？」
すると女の子は、さらに首をひねった。
「お父さん？　お母さん？　キーア、そんなの知らないよ？」
「キーア……君の名前はキーアっていうのか」
ロイドとエリィは、ひざまずいて女の子と目線を合わせた。
「俺の名前は、ロイド」
「私の名前は、エリィよ」
「へー、二人ともいい名前だね！」
「ど、どうも……って、そうじゃなくて！」
ロイドは混乱しつつも、キーアと名乗った少女に問いかけた。
「キーア、他に覚えてることはないかい？　住んでいた場所とか？」
「……えーと……えーと……」
キーアは、唇に指を当てて一生懸命、考えている。

だがしばらくすると、不意に笑って……
「えへへ……なんにも思い出せないや！」
ロイドは、エリィと顔を見あわせた。
「もしかして……レンが招待状を渡してくれた理由は、この子かもしれないな」
「ええ。でも名前以外、なにも覚えていないなんて……」
正直、ロイドもこんな展開は予想していなかった。
しかしキーアは、不安な表情も見せず、にこにことロイドたちを見上げている。
とにかくこの子を保護して、両親の元へ送り届ける……そうロイドが腹を据えた時、通路の方から騒がしい声が聞こえてきた。
「おい、様子が変だぞ……！」
「警備の連中はどうした！」
「ロイド、どうやら来たようね！」
エリィが、両手で導力銃を握りしめた。
「よし……キーア、僕たちと一緒に来てくれるかい？」
「うん、いいよ！　お兄ちゃんたちと一緒に行くっ！」
キーアは、驚くほど素直にうなずく。
その小さな身体を、ロイドは優しく抱き上げた。
「しっかりつかまってくれ。これから危ないことが起きるから」

「お兄ちゃんたちと一緒なら平気だよ！」
すると入口から、ルバーチェの構成員たちが飛び込んできた。
「てめえらっ！　これはどういうことだ！」
「こっちが聞きたいわよ、それは！」
エリィは、導力銃を連射し、男たちの手から短機関銃を撃ち落とす。
その隙に、ロイドはキーアを抱えて走り出した。
「キーアのことは、俺たちが守る！　絶対に！」
そして脱出行が始まった。

＊＊＊＊＊

広間には、耳心地のよい音楽と、人々のざわめきが満ちている。
それを一瞥して、マルコーニ会長は葉巻をくわえた。
「そろそろ幕開けだな？」
「はい、皆さん、お待ちかねのようで……」
ガルシア・ロッシが言うと、マルコーニは手元の紙片を見つめた。
「一番人気は、あいかわらず例の人形か？」
「ええ、ローゼンベルク工房の人形ですな。あれは高騰するでしょう」

「くくくっ……よしよし。現物は見たか？」

「いえ……見ても、自分には善し悪しが判りませんから」

「仕方のねえ奴だ。まあいい。どれだけつり上がるか、楽しみにしていよう」

マルコーニは笑って、紫煙を吐く。

するとそこへ、黒ずくめの男が駆け込んできた。

「若頭！　大変です！　競売品が……」

「なにっ⁉」

振り返ったガルシアの耳に、銃声が聞こえてきた。

しかも着弾の衝撃まで広間に届き、招待客たちは不安そうにざわめき始めた。

「今の銃声は、なんだね！」

「まさか邸内で……」

「お静かに！　お静かに、皆さん！　何かの間違いです！　恐らくあれは……」

マルコーニが言いかけた時、サロンの上階でガラス窓が砕け散る。

その破片がばらばらと中庭に降り注ぐと、客人たちの顔色も変わった。

「どうなっているんだ！」

「説明したまえ！　いったい何が起こっているんだ！」

「そ、それは……」

マルコーニは、脂汗を流して後ずさる。

だが彼の背後から、謹厳な声音が低く響いてきた。

「皆さん、お騒がせして申し訳ありません」

「か、閣下……！」

マルコーニがそう呼んだ人物は、ハルトマン議長その人である。

帝国派議員の重鎮は、微笑すら浮かべて、招待客に告げた。

「どうやら不埒なこそ泥が侵入した模様です。いや、ご心配なく。マルコーニ氏の警備員が、すぐに事を収めてくれるでしょう。競売会までそのままお待ちください」

ハルトマンは、一同を落ち着かせると、マルコーニらと共にサロンから出て行った。

しかし議長が、マルコーニに振り返った時、そのこめかみには太い血管がぴくぴくと浮き上がっていた。

「どういうことだマルコーニ、侵入者とは……！」

「わ、私もたった今、報告を受けたところでして……」

「私の屋敷で発砲するなど、言語道断だ。いったい何があった？」

すると、駆け込んできた黒ずくめの男があらためて報告した。

「クロスベル警察です！　競売品を押収されました！　それも例の、一番人気の……！」

「なにっ！　ではあのローゼンベルク製の人形を……！」

マルコーニが呻くと、ハルトマンの怒気も強まった。

「あれが奪われては、競売会が成立しないではないか！」

「た、たしかに……」
「分かっているなら、どうにかしろ！　私に恥をかかせるつもりか！　もし競売会が中止となったら、貴様との取引はすべて停止させてもらうぞ」
「そ、そんな、ハルトマン閣下！」
「当然だ！　ましてこの事が明るみに出てみろ！　私の政治生命にも関わってくる！」
ハルトマンは、ぐいとマルコーニの胸ぐらをつかんだ。
「手段を選ぶな。その人形を取り戻せ、今すぐに！」
ハルトマンの怒声は、闇稼業のボスをも平伏させるほど、威圧感に満ちている。
マルコーニもごくりと唾を飲み、腹心を呼んだ。
「ガ、ガルシア！　何をしてやがる！　さっさと行け！　早く！　早く！」
だが叱責より速く、ガルシアは走り出していた。
人食い熊の如き、眼光を閃かせて。

＊＊＊＊

ロイドとエリィは、キーアを抱えたまま、必死に走った。
三人はすでに邸内を脱し、広い庭を横切っている。
繁みから繁みへ身を隠しながら、屋敷の正門までたどり着いたが、無論、そこにも黒ずくめ男たちが詰めていた。

「四人か……」
ロイドは、ルバーチェの構成員たちを観察した。
男たちは誰何の任務を終え、手持ちぶさたに談笑している。
どうやらまだ、邸内での騒ぎには気づいていないらしい。
ロイドは、キーアを繁みの陰に下ろすと、その頭を撫でてやった。
「ここでちょっと待っててくれ。お兄ちゃんが呼んだら、すぐに来るんだよ」
「ロイド、どこに行くの？」
キーアは、もうすっかり二人に懐いている。
ロイドは、彼女の無垢な瞳に笑い返した。
「ちょっとそこまでさ。これが終わったらひと安心だ」
「うん。じゃあキーア、ここで待ってる」
「よし、いい子だ」
「エリィ、援護頼む！」
「いつでもいいわ」
そしてロイドは踵を返し、手元の衝撃警棒を握りしめた。
ロイドは、繁みから飛び出すと、黒ずくめの男たちに躍りかかった。
左右のバトルハンマーを素早く振り抜き、男たちの鳩尾に叩き込む。

「ぐがっ！」「げえっ！」
瞬く間に二人制圧。だが残る男たちは、あわてて銃を構えた。
「てめえ、特務支援課の！」
「いったい、どこから……」
だが問いかける途中で、エリィが導力銃を連射した。
構成員たちは、腕を射貫かれると、悲鳴を上げてのたうち回る。
その間にロイドは、繁みに向かって手を伸ばした。
「キーア、早くおいで！　ほら、早く！」
「うん！」
ロイドは、駆け寄ったキーアを軽々と左手で抱き上げる。
しかしエリィは、気配を感じて屋敷を振り返った。
「ロイド、新手よっ！」
中庭から、真っ直ぐ駆けてくる影は、四つ。
いずれも四つん這いで走り、真っ赤な瞳を爛々と輝かせた獣だ。
「あれは……！」
ロイドも、すぐに気づいた。
ルバーチェ商会が、各国の軍隊に売り込んでいる軍用犬である。
しかも以前、ロイドたちが摘発したものより、体格が一回り大きい。

だが巨体には似合わぬ速さで、漆黒の軍用犬たちはロイドを追ってきた。
「まずいっ！」
ロイドは、腕にキーアを抱いている。
彼女をかばいながら軍用犬と戦うのは、至難の業であった。
「走るぞ、エリィ！」
「だめよ、間に合わないっ……！」
全速力で疾走する軍用犬から、逃れられるはずもない。
エリィは、導力銃を両手に据えて引き金を絞った。
だが軍用犬は、銃声にも怯えず、弾丸すら回避して肉薄する。
戦場で戦うことを条件付けられた犬である。
導力銃で撃たれても、なお突っ込み、思わずエリィも怯んだ。
「きゃああああっ！」
「エリィ！」
軍用犬は、肩を撃ち抜かれながらも、エリィに飛びかかった。
だが寸前、横合いから鋭い声が響く。
「させません！　ビームザンバー！」
割って入ったのは、ティオだった。
果敢に繁みを飛び越え、素早く魔導杖を振るう。

その先端から放たれた電光が、軍用犬たちを吹き飛ばした。
さしもの軍用犬も、導力魔法の電撃にわななき、その隙にティオが駆け寄ってきた。
「よかった、間に合いました」
「来てくれたのか、ティオー！」
「はい、邸内は大騒ぎです。センサーでお二人の声を捉えたものですから」
ティオは、ロイドが抱きかかえる少女に気づいた。
「ロイドさん、その子は？」
「えっ？」
「競売会の一番人気、ローゼンベルク工房のアンティーク人形……」
「……だと思ったら、トランクの中にはこの子が入っていたのさ」
「仰っている意味がさっぱり分からないんですけど……」
ティオが困惑を浮かべると、キーアはにこっと笑ってみせた。
「ねえねえ、この人もロイドのお友だち？」
「ああ、そうさ。ティオって言うんだ。よろしくな」
「うんっ！　じゃあキーアともお友だちになってね」
言われたティオは、さらに困惑を強めたが、すぐに笑顔を取り戻した。
「……よろしく、キーア。詳しい話は後で」
ロイドたちは、中庭の繁みから繁みへ走った。

エリィは、後方を警戒しつつ、ティオに問う。
「ねえティオ、マリアベルはどこに？」
「まだ邸内です。私たち特務支援課と繋がっているとは気づかれてませんから、お一人でも大丈夫でしょう」
「よし、とにかく俺たちは屋敷を出よう」
ロイドは、身を低くして正門へ向かった。
「市街地まで行けば、ルバーチェの連中も、軍用犬を使うような真似はしないだろう。ランディにも連絡をつけないと……」
ロイドは走りながら、エニグマの通信機能を立ち上げる。
呼び出し音が数回鳴ると、すぐに聞き慣れた声が聞こえてきた。
『おー、ロイドか、待ちくたびれたぜ』
「ランディ、いろいろ大変なことになったよ」
『ああ、屋敷の外にいても分かるぜ。なんだ、さっきの銃声は？　まさかお前たちが引き起こしたんじゃねえだろうな？』
「そのまさかだよ」
ロイドが自嘲気味に告げると、ランディの含み笑いが聞こえた。
『くくっ……こうなると思ってたぜ。おとなしく偵察だけで済むはずがないってな。で、何がどうなった？』

「全部説明してるヒマはない。とにかく正門から逃げる！　援護に来てくれ！」
『りょーかいっ！』
連絡を終えると、腕の中のキーアがきょとんとした。
「今、誰とお話ししてたの、ロイド？」
「ランディっていう、もう一人の友だちさ。頼りになる奴なんだ」
「へえー、ロイドってお友だち、いっぱいいるんだね？」
「きっとランディは、キーアとも仲よくしてくれるさ」
「じゃあキーアも、お友だちいっぱい？　やったあ！」
はしゃぐキーアの声を、構成員たちが聞きつけた。
闇を走るロイドたちめがけ、当てずっぽうで短機関銃を乱射する。
「いたぞ、あそこだー！」
「逃がすんじゃねえぞー！」
ロイドたちの周囲に、銃弾が跳ねまくる。
庭に据えられた導力灯が撃ち砕かれ、ガラス片が飛び散った。
エリィとティオは、頭を守りながら前へ走った。
「容赦ないわね、もうっ！」
「銃弾にも気をつけてください！」
しかし走るうち、ロイドたちは遂に正門へたどり着いた。

開け放たれたままの門を出れば、もう市街地である。
「一気に駆けるぞっ！」
「ええ！」
「ついて行きます！」
ロイドを先頭に、エリィとティオが後に続く。
飛び交う弾雨をかいくぐり、ロイドはキーアを抱えて正門から脱した。
門を一歩出れば、そこは夜の高級住宅街だ。
港まで走り、クロスベル市へ戻る船に乗れば、逃げ切れるだろう。
「ここまで来れば……」
ロイドは安堵して、背後を振り返った。
ところが軍用犬の群れも正門を飛び出し、ロイドたちに追いすがってくるではないか。
一斉に門を飛び出し、吼え立てながら急迫する。
「しつこいわね！」
エリィが銃撃を浴びせると、構成員たちも街に出て、躊躇なく短機関銃を乱射した。
乱射された銃弾が、家々の壁にめりこみ、街路樹に突き刺さる。
ロイドは、キーアと共に姿勢を低めた。
「バカな！　街中で発砲するなんて！」
「それだけキーアが大切だということです！」

ティオも、焦りながら魔導杖をかざそうとする。
しかし邸内からは、導力車も猛スピードで追いかけてきた。
黒塗りの車は、一気にロイドたちを追い抜くと、進路を塞ぐように横付けした。
「くそっ！」
ロイドは、あわてて脇道へ逃げ込もうとした。
しかし導力車の後席からは、見上げるほどの巨漢がぬっと姿を現したのだ。
「てめえらだったのか、特務支援課！」
「ガルシア！」
若頭は、こめかみに血管を浮き上がらせ、ロイドに視線を突き刺した。
「まさかクロスベル警察に、一番人気の品を押収されるとはな……おい、手段は選ぶな！　何としてでも人形を取り戻せ！」
号令と共に、短機関銃が火を噴いた。
ロイドたちは、路地へ逃げ込もうとしたが、先回りした軍用犬の群れが牙を剥く。
「しまった！」
軍用犬が、ロイドめがけて跳躍する。
ロイドは、右腕のバトルハンマーでそれをはね飛ばしたが、すぐに次の軍用犬が背後から襲いかかる。
それを気配だけで察し、ロイドは衝撃警棒を振り抜く。

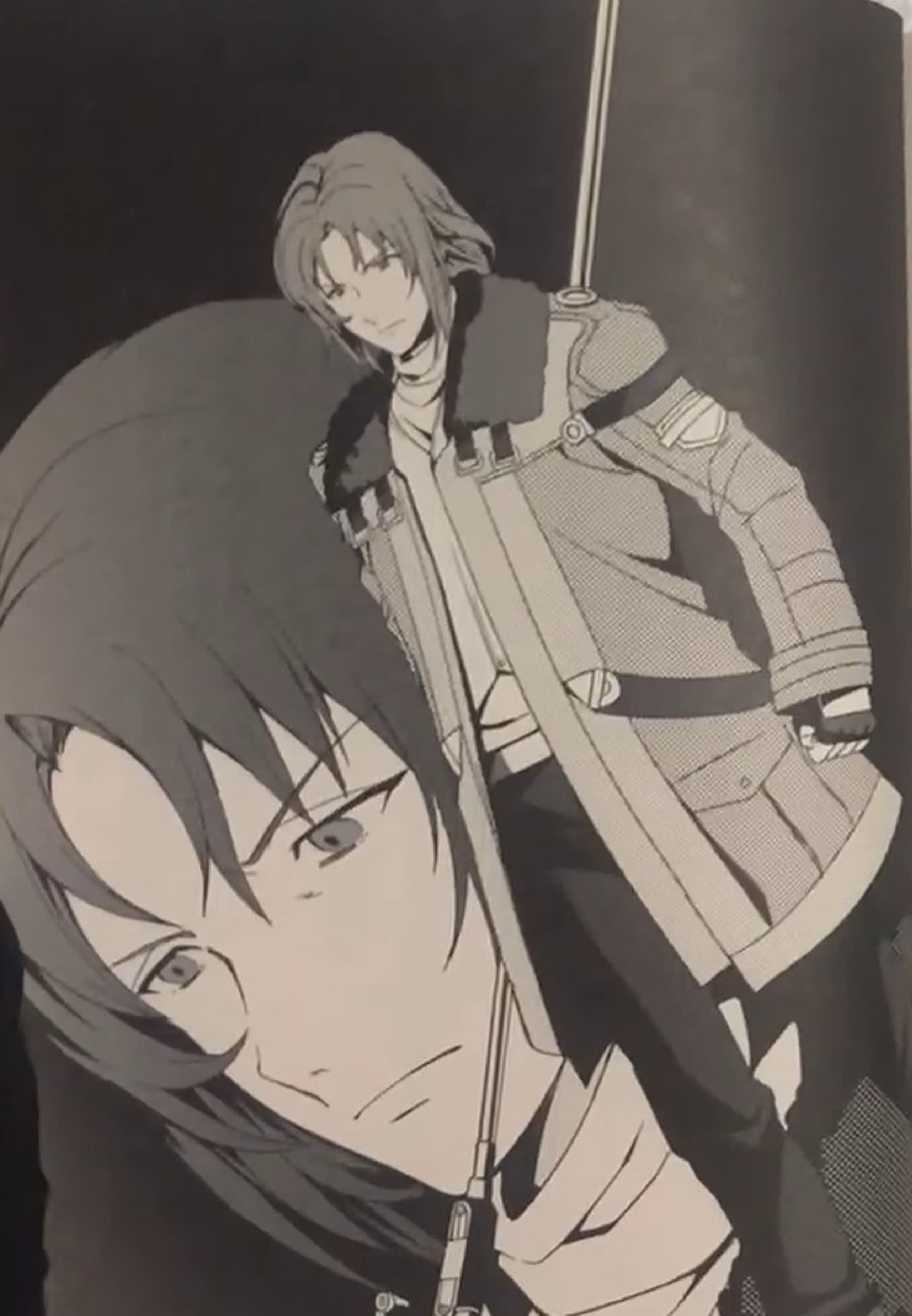
一瞬、真後ろの軍用犬も住宅街の壁に叩きつけられた。
「行くぞ！　船着き場まで早く！」
ロイドたちは、路地へ入り、真っ直ぐ埠頭へと走った。
夜の河川港には、何艘もの船が停泊している。
中には、クロスベル市内へ戻る定期便もあった。
それに乗船して市内へ戻れば、市警の応援も得られるはずだ。
しかしなおも、新手の軍用犬たちが涎を垂らして躍りかかってきた。
「くそっ、キリがないっ！」
ロイドに向かってきたのは、同時に四頭。
キーアを抱えている以上、バトルハンマー一本で応戦するのが限界だ。
ロイドは、必殺技を発動して切り抜けるしかないと覚悟した。
しかし、軍用犬たちの目前で……
どこからか投げ込まれた金属管が、盛大に爆発した。
軍用犬は、黒煙に目を潰され、悲鳴を上げる。
その一撃だけで、ロイドは誰が来てくれたかを悟った。
「ランディ！」
ロイドの予測通り、赤毛の青年が戦場に飛び込んでくる。
ランディは、炎を宿した斧槍ライアットバスターで、軍用犬を薙ぎ払った。

「派手にやったもんだな、ロイド！　ところで誰だ、その子？」
「説明すると長くなる！」
「ははっ！　そりゃあ聞くのが楽しみだな！」
ランディは、にやりと笑い、ロイドとキーアを守るように身構える。
その姿にガルシアは、ぎりぎりと奥歯を軋ませた。
「調子に乗るな！　早く奪い返せ！」
だが身構える構成員たちに向かって、エリィとティオが狙いを定めた。
「ティオちゃん、まとめてお願い！」
「任せてください……！」
ティオは、ずっと蓄積していた力を、魔導杖から顕現させた。
彼女が振るった杖の先端から、緑がかった閃光が上空に伸びると、雷鳴が轟く。
そして次の瞬間、無数の雷が構成員たちに落下したのだ。
「サンダーシクリオン！」
風の攻撃導力魔法は、ばりばりと唸りを上げ、構成員たちに突き刺さった。
電撃を浴びた男たちは、ほとんどが倒れ、あるいは膝を屈した。
「がっ！」
「ぐおっ！」
なおも余力のある者に対しては、エリィが容赦なく銃撃を撃ち込む。

瞬く間にルバーチェの男たちは、無力化されていた。
ただ一人、ガルシア・ロッシを除いては……。
「ちっ、役立たずどもが……ガキ相手になんてザマだ」
ガルシアは、じりっと間合いを詰めてきた。
巨漢は、武器も持たず、ただ両手を胸の前で組み、指をぱきぱきと鳴らしている。
「どうやら、俺が相手をしなきゃならねえようだな！」
「ガルシア、お前たちが競売会に出す人形は……」
「問答無用だ！」
ロイドを無視して、ガルシアが宙に飛んだ。
巨漢とも思えぬ速さと、跳躍力。
素早く高度を稼ぎ、上空から凄まじい膂力で殴りかかるつもりだ。
「避けろっ！」
ロイドの叫びで、特務支援課の四人は四方に散った。
ガルシアは一瞬遅れて、ロイドたちがいた場所へ拳を叩き込む。
すると轟音と共に衝撃波が走り、埠頭の石畳が音を立てて砕け散った。
「なんて奴だ……！」
ロイドも、ガルシアの戦いぶりを見たのは初めてである。
身を起こした巨漢は、ロイドをもう一度睨みつけた。

「逃がしゃしねえぜ、小僧……!」
再び跳躍。今度は、ロイドの至近距離から襲いかかる。
瞬時にして接近したガルシアに、ロイドは立ちすくむしかできなかったが……
「させねえぜ、キリングベア!」
ガルシアの拳が、何かにくい止められた。
見ればランディが、斧槍でガルシアを阻んでいる。
その表情に、いつものゆるさは無く、峻烈な眼光を巨漢に突き刺していた。
「お前の相手なら俺がしてやる。ロイドには触れさせねえ」
「てめえ……!」
巨漢も斧槍をつかみ、ぎりぎりと怪力で押し込んでいる。
「なかなかやるじゃねえか……だがこれならどうだ!」
言った途端、ガルシアの身体から真っ赤な闘気があふれ出した。
突風じみたそれは、黒煙を吹き飛ばし、砕けた石畳を舞い散らす。
ランディも、じりじり後ろへ退き始めた。
「ちっ、厄介な力を……」
「お前らガキどもとは違うんだよ、死線をくぐり抜けた数がな!」
だがガルシアの言葉に、ランディも牙を剝いた。
「あんな世界、誇る価値はねえだろ……」

「毎日が血みどろの、薄汚れた戦場なんてよ!」
言うなり、ランディの身体からも、炎の如き闘気があふれた。
その波動に押され、ガルシアは大きく仰け反った。
「てめえも俺と同じか!」
叫んで、ガルシアは飛び退いた。
両者の間には、まだ闘気が渦巻き、ぶつかり合っている。
ガルシアは、炎熱を膨らませながら、顔を歪めた。
「そうか、貴様……《闘神の息子》ランディ・オルランドだな!」
「……!」
ランディの表情に、初めて見る動揺が浮かんだ。
ロイドには、それが何の事だか、まったく分からない。
「なんだ、ランディ、《闘神の息子》って……」
ロイドも、今になってランディの素性に思いを馳せた。
いくら元警備隊とは言え、あまりに実戦慣れした戦い振り。
目の前で、このような力を目撃したのも初めてだ。
もしや……と思った時、ガルシアがほくそ笑んだ。
「くくっ……仲間にも隠していたようだな、猟兵の過去を」



「……てめえのように、ひけらかす過去でもないからな」

ランディは、苦渋を浮かべて言う。

エリィとティオも、ランディの忌まわしき過去を確信した。

「ランディ、あなた……」

「猟兵だったのですね……」

猟兵とは、大陸全土に存在する傭兵集団である。

戦争を糧とし、苛烈な戦い振りから恐れられる戦闘のプロである。

戦闘技術こそ高いが、戦で金を稼ぐその生き方は、非道と呼ばれることもある。

猟兵団「西風の旅団」で指揮官を務めていたガルシア・ロッシは、ランディと対峙しつつ、つぶやいた。

「……懐かしいぜ。バルデル・オルランド……大陸西部最強の猟兵団《赤い星座》を率いる団長にして《闘神》と謳われた伝説の猟兵……」

「…………」

「たしか、そのバルデルには、赤き死神と謳われた息子がいたよな。ガキの頃から大部隊を率いて敵を殺しまくった戦場の申し子……それがお前、《闘神の息子》ランドルフ・オルランドってわけだ！」

ランディは、しばし黙していた。
だがしばらくすると、不意に……いつもの不敵な笑みを取り戻した。
「……ははっ、バレちまったら仕方ねえな。たしかに俺はバルデルの息子だ。《闘神の息子》って呼び名は、ヘドが出るほど気に喰わねえがな」
それを聞いて、ガルシアも拳をきつく握った。
「ほお……認めたか。なんでまたクロスベルに流れてきた？」
「あんたに言う必要はない」
「水くさいぜ。俺の古巣、《西風の旅団》とお前の《赤い星座》は昔からの宿敵じゃねえか……因縁を教えてくれてもいいものを……」
「ぬかせ！」
ランディは、くるりと斧槍を構え直した。
「友達でもあるまいに、教える義理はねえな」
両者の距離は、じりじりと狭まっていく。
あわててロイドが、ランディの背に歩み寄った。
「ランディ、ここはひとまず逃げた方が……」
「無理だな、このオッサンがいる以上」
ランディは、振り返りもせずに告げた。
「今も言った通りだ。俺もこのオッサンも、元は仇敵の猟兵。素性がバレた以上、ここで決着

つけなきゃいかんらしい」
「そんなの、もう関係ないだろ！」
ロイドは、震える声で叫んだ。
「ランディが猟兵だったのは、昔のことだろ！　捨て去った関係に縛られる必要なんてないじゃないか！」
「ロイド……」
たった今、ロイドも少しずつ理解し始めた。
ランディは、いつも軟派な態度で、特務支援課のムードを和らげることに徹してくれた。
だがその陰には、猟兵として過ごした戦場経験があったのだ。
その過去を、ランディが今、どう感じているかは分からない。
ただランディは、凄惨な過去をロイドたちに感じさせたことは一度もなかった。
ロイドは、ランディの気遣いに胸が締め付けられる思いがした。
エリィとティオも、武器を構えたままうなずく。
「そうよ、一緒に帰りましょう、ランディ」
「ランディさんの過去がどうあろうと、私たちは一緒です。これから先ずっと……」
「お嬢……ティオすけ……」
それでもランディは、背を向けたまま、ガルシアに相対した。
「……泣かせることを言うじゃねえか。けどよ、ここは任せろ」

「ランディー」

「このオッさんさえ倒せば、もう追っ手は来ねえだろ。俺のことはいい……さっさと定期便へ乗り込め！」

ガルシアも、再び一撃を加えようと身構えた。

「上等だ……勝負のうえ、その人形を返してもらおうか」

しかしロイドは、キーアを抱きかかえたまま、叫んだ。

「人形だと？　ふざけるな！　この子は、本物の人間じゃないか！」

「な、なんだと？」

「お前たち、競売会と偽って、人身売買を行っていたのだろう！」

「でたらめを言うんじゃねえ！　そんなはずは……」

驚愕したガルシアは、両目を剝いた。

しかしそんな巨漢をも、キーアは物珍しそうに見つめ、にこっと笑いかけたのだ。

「あの人、だあれ？　あの人もロイドのお友だち？」

ようやくガルシアも気づいて絶句した。

「バカな……あの箱はローゼンベルク製の人形のはず……」

「とぼけるな！　この子が何よりの証拠じゃないか！　お前たちは、人身売買まで……」

するとロイドの耳に、エリィが小さくささやいた。

「待って、ガルシアの様子が変よ？」

「もしかして彼らも知らなかったんじゃないかしら……競売品に本物の人間が紛れ込んでいたなんて……」

その時だった。

不意に川面から、軽快な導力エンジンの音が鳴り響いた。

振り返れば、クロスベル市の方から小さな導力ボートが接近してくる。

そのハンドルを握るのは、誰あろう、セルゲイ・ロウであった。

「課長！」

「乗れ、お前ら！　早く！」

急くように怒鳴られ、ロイドたちは岸壁へ走った。

ボートの後席には、神狼の姿もある。

ウオオオオォォォォ……ンンンン！

ツァイトが吼えた途端、ガルシアは耳を塞いだ。

その隙にエリィが、ティオが、ランディがボートへと飛び移る。

ロイドも、腕の中のキーアを見つめて言った。

「しっかりつかまってるんだよ、キーア！」
「うん、わかったあ！」
少女をしっかりと抱きかかえ、ロイドも岸壁から飛んだ。
その背後から、我に返ったガルシアの怒号が聞こえた。
「逃がすものかよ！」
ガルシアは、胸元から導力銃を引き抜き、ロイドめがけ連射する。
しかし一瞬速く、ロイドはボートに乗り移り、セルゲイは最大船速で突っ走った。
「とばすぞ！」
ボートは、波を蹴立ててミシュラムから離れていく。
後方からは、まだ銃撃が襲ってきたが、もはや届く距離ではない。
ロイドは、ほおーっと大きく息を吐いて、キーアを席に座らせた。
「よかった……ほんとうに無事で……」
だが運転席のセルゲイは、煙草をくわえたまま表情を歪めた。
「なにがよかっただ、馬鹿野郎。俺があれほど、手を出すなと言ったのに」
「すいません、課長……」
「お前、だんだん兄貴に似てきたぞ……」
「えっ？」
「まあいい。ところでいったい、その子は誰なんだ？」

問われてロイドは、うなじを掻いた。
「俺たちにも、わからないんです、全然……」
エリィもティオも、ランディも黙してうなずく。
そしてこんな状況だというのに、キーアは、神狼ツァイトの毛並みを撫で、にこにこと笑っていた。
それが彼らと、キーアとの出会いであった。

第五章　キーア

「覚悟しよう」
ミシュラムから戻った直後、ロイドは仲間たちに言った。
「俺たちは、ハルトマン議長と、マルコーニの面目を潰した。ルバーチェ商会は、特務支援課に対して必ず報復に出るだろう。そしてキーアを取り戻しに来るはずだ」
エリィもランディも、ティオもその言葉に同意した。
すでに、マリアベル・クロイスからも連絡が来ている。
彼女の話によると……
「競売会は、中止になりましたわ。当然ですわね、あれだけ派手な銃撃戦が起きたんですもの。招待客は、みんな騒ぎ出して……ハルトマン議長は、苦虫を噛みつぶしたような顔で、謝っていらしたけれど……」
それで、事が済むはずもない。
なにしろ議長とルバーチェ商会には、人身売買の嫌疑がかけられている。

ロイドたちが、キーアの存在を公にすれば、ハルトマン議長は間違いなく失脚する。
それを防ぐには、事件が公表される前に奪い返すしかない。
ロイドたちは、特務支援課に立て籠もり、キーアを守る……つもりだった。

しかし一週間経っても、予想された襲撃は起こらなかった。
ロイドたちが、不審に思い始めた頃、ようやく……

「カタがついたぞ」
セルゲイ・ロウが、ふーっと紫煙を吐いた。
「ハルトマン議長とルバーチェ商会は、この件から手を引く。キーアを取り返しに来ることもない……そうだぜ」
上司は言って、来客を指さした。
ロイドたちの前には、理知的な顔立ちの男が立っている。
眼鏡の奥からは、ロイドたちを見下すような視線。
クロスベル警察捜査一課の若きエース、アレックス・ダドリー捜査官は、眼鏡の位置を指先でぐいと直した。
「そういうことだ。しかしまさかお前たちの尻ぬぐいを、私がするとはな……」
ダドリー捜査官は、苦々しげに言う。

だが無理もない。捜査一課ですら手を出せなかった黒の競売会を、創設わずか数か月の特務支援課があっけなく潰してしまったのだ。

正直、ダドリーとしては面白くない展開だろう。

ロイドは、それを察しつつも、推理を巡らせた。

「つまり……取引が成立したんですね？」

「その通りだ。向こうが手を出さない代わりに、こちらも事件は公にしない。それで手打ちだ。否は認めん」

ダドリーは、彼がまとめたであろう交渉結果を突きつける。

しかしエリィは、顔を強ばらせて言った。

「待ってください！　彼らは、キーアを人身売買するつもりだったんですよ！」

「向こうにも、言い分がある。出品物にあの子が紛れ込んでいたのは、完全な手違い……とい

うか、全く身に覚えがないということだ」

「そんな見え透いた嘘……！」

だが激するエリィの肩を、ランディがぽんと叩いた。

「熱くなるなよ、お嬢。ガルシアの驚いた顔は、芝居には見えなかったぜ？」

「た、たしかにそうだけど……」

ロイドは、セルゲイ・ロウに視線を向けた。

「だったらあのトランクが屋敷に運びこまれた時には、既に入れ替わっていたって事ですか

「そもそも、出品される筈だった人形の出所は？」

「はっきりした事は判らんが、レミフェリア方面の裏ルートから手に入れたらしい。ハル

ン議長の屋敷に運び込んだ運送会社も架空のものだったと主張している」

「つまりルバーチェの連中は、あくまで自分たちも、騙された側だと主張してるんですね

「まあな。真偽のほどは分からんが……連中が必死に弁解するのも理解できる。下手をし

人身売買の容疑が掛けられちまう訳だからな」

上司の説明に、ランディも顎を撫でて納得した。

「ルバーチェが必死ねえ……武器密売やマネーロンダリング、盗品すら扱う闇の競売会……

んな犯罪を平気でやってのける連中も、人身売買の疑いだけは避けたいってことか」

「当然といえば当然だな」

ロイドも、冷静に推論を組み立てた。

「犯罪としてはおよそ最悪の部類……絶対に許されない重罪だ。警察もさすがに黙っちゃい

いし、何より遊撃士協会が聞きつけたら、総力を挙げて叩き潰しに来るだろう。そこまでの

スクを、議長はもちろん、ルバーチェも負うハズがないか……」

「ああ、だからこその手打ちだ」

セルゲイは、ふうーっと天井に紫煙を吐いた。

「お前たちの潜入捜査……まあ、向こうは不法侵入と言ってるが……についても一切不問にす

る。偶然、保護した少女の扱いもこちらに全てを任せるそうだ」

ランディは、先を読んで破顔した。
「その代わり、この件については、ルバーチェ側の主張を認めて欲しい……間違っても遊撃士協会にはチクるなよ……ってか？」
「なんだか、向こう側に都合よく聞こえるわね……」
エリィもまだ不満を浮かべているが、ロイドは気持ちを切り替えていた。
「キーアが安全になるなら、この程度の譲歩も仕方ありませんね。これ以上、睨み合っていても無益ですし」
ロイドは、この奇妙な決着が、事実上の勝利だと確信していた。
彼は、エリィたちを宥めるように、言葉を連ねた。
「それに譲歩したところで、二度と競売会は開かれないだろう。マルコーニは、ハルトマン議長の信頼を失っただろうし、十分すぎる成果だよ」
「くっ、生意気な口を……」
ダドリーが、短く舌打ちした。
「だが、たしかにお前の言う通りだ。ルバーチェ商会は、大きな後ろ盾と資金源を失うだろう。そうなれば、組織は一気に弱体化する。しかしな……」
「分かっています。ルバーチェ商会の捜査は、一課にお任せします」
ロイドは、先んじてダドリーを制した。
「それに俺たちには、調べたいことがあるんです。無論、キーアのことですが……」

ロイドたちは、一斉に広間の方を見つめる。
開け放された扉の先では、キーアが神狼ツァイトと戯れていた。
「ねー、ツァイト、お外に遊びに行ってもいい？」
「ウォン」
「だめなの？　つまんなーい。じゃあ私と遊んでくれる？」
「ウォン、ウォン」
「やったあ。じゃあ何して遊ぼっかあ」
屈託なく笑い、ツァイトの毛並みを撫でる姿は、このうえなく愛らしい。
その姿を、ランディは目を細めて眺めた。
「名前以外は、マジで何も覚えてねえからなあ。しかしまあ、とんでもなく明るいというか、人懐っこいガキだよな。あっという間に、俺たち全員に懐いちまったし」
「はは……確かに」
ロイドも、思わず表情を緩めている。
「ツァイトはもちろん、課長も懐かれましたよね」
「それも不思議だぜ。俺は煙草を吸うから、あんまり子供は近寄ってこねえんだが……全然気にしてないしな」
さっきまで激していたエリィも、穏やかな笑みを取りもどしていた。
「ああもうっ！　なんであんなにカワイイの！　あたしもいっしょに遊びたいっ！」

普段はあまり表情の変わらないティオですら、にこやかに笑っていた。
「反則ですね、あの笑顔は」
ロイドも、黙ってうなずいている。
特務支援課全員が、キーアの虜になったと言ってもいい。
しかしロイドは、彼女の境遇にも思いを馳せた。
できれば、親元に帰してあげたい。
だが家族に繋がる情報はまったくなく、それを手に入れるためには、キーアの記憶を取り戻すしかないのだ……
ロイドは、上司に視線を向けた。
「課長、もうキーアを外出させてもいいですよね？」
「身の安全は確保できたんだ。かまわんだろう。しかしどこへ連れていくつもりだ？」
「確信はできませんが、試してみる価値はあると思います」
ロイドは、その可能性に賭けてみることにした。

＊＊＊＊

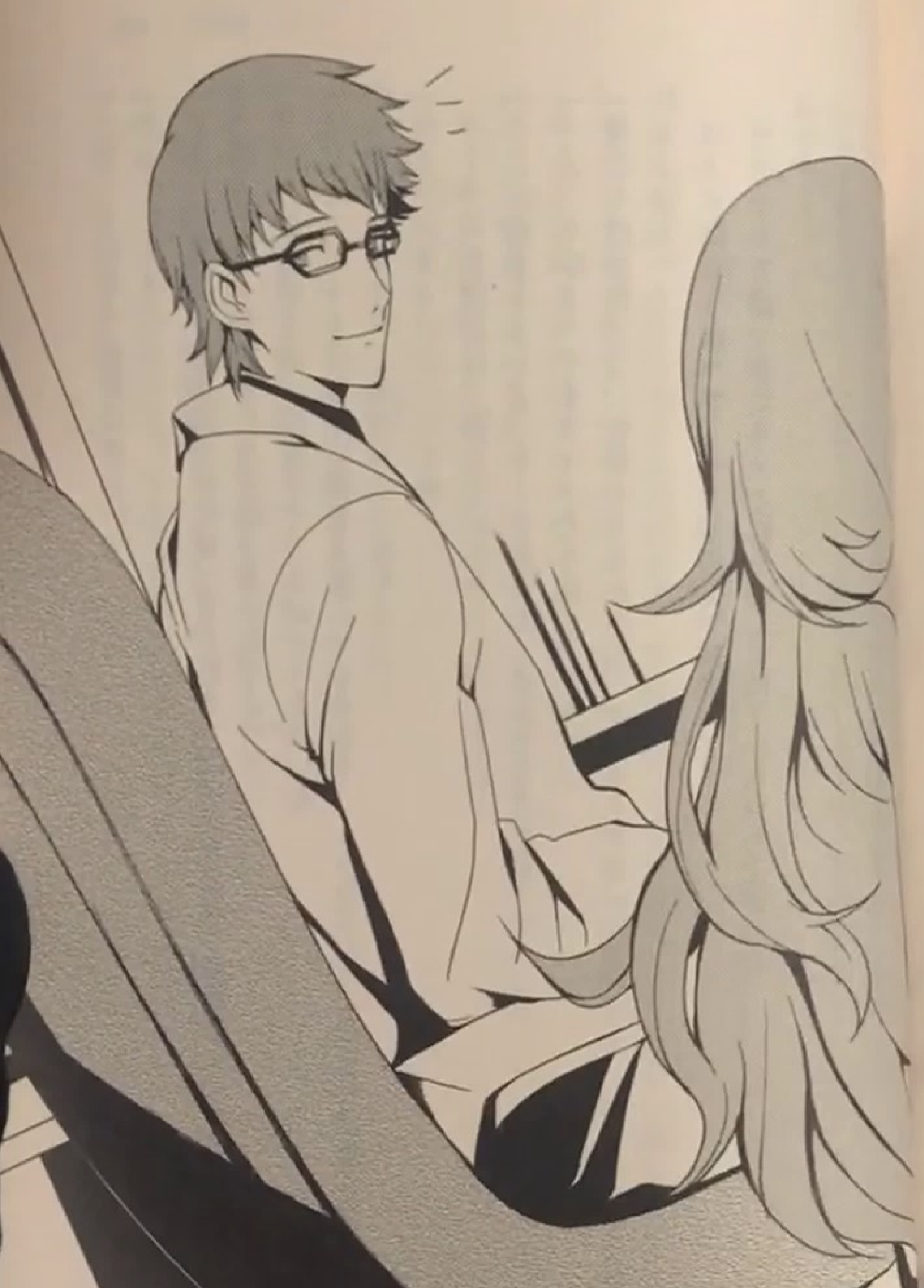
聖ウルスラ医科大学病院。
自治州最大の病院であり、その医療技術は大陸屈指を誇っている。

ルバーチェ商会との手打ちが決まってから数日後。
ロイドたちは、キーアを連れてその建物に入った。
「ねえ、ロイド、ここどこお？」
「病院だよ。キーア、病院って分かるかい？」
「ううん、ぜんぜん」
広い待合室には、大勢の患者や医師たちが行き来している。
その様子を眺めるキーアに、ロイドは微笑んでみせた。
「ここに来れば、もしかしたらキーアの記憶が戻るかもしれないんだ。どこで生まれて、さんやお母さんがどこに住んでいるのかも……」
「お父さん？　お母さん？」
キーアは、両親の概念すら理解していないらしく、ロイドの手を引っ張った。
「ねえ、記憶ってもどった方がいいの？」
「そりゃあそうだよ。キーアだって、その方がいいだろ？」
「うーん……キーアは、ロイドたちといっしょに遊べたらそれでいいの」
そう言って少女は、屈託なく笑う。
だが会話を聞いていたエリィは、少し表情を曇らせた。
「ロイド……本当にキーアに精密検査を受けさせるつもり？」

「どういう意味だい？」
「記憶が戻った方がいいのか、ってことよ。何らかの外的なショック……つまり辛い出来事があって、キーアは記憶をなくしたかもしれない」
「うん……」
「それを取りもどすのが、本当にいいことなのかしら」
エリィの瞳は、いつもより優しげに揺れていた。
するとティオも、目を伏せつつ言った。
「そうですね、キーアに悲しい思いはさせたくありません。ですが、まずは原因だけでも調べてみましょう。記憶を復元するかどうかは、後で考えればいいかと……」
「うん、そうだな……」
ロイドがそう言った時だった。

「……よく来てくれたわね、ロイド」
出迎えてくれたのは、セシル・ノイエスだった。
ピンク色の看護服に身を包んだ彼女に、ランディが思わず色めき立つ。
「おおっ！　セシルさん、お久しぶりっす！」
「ふふっ……みんな、元気そうね。創立記念祭の間は、ずいぶん忙しかったんでしょ？」
セシルが笑うと、エリィとティオは疲れた顔でうなずいた。

「ええ、そりゃもう中身の濃い五日間でした……」
「しかも、その後に、また一悶着ありまして……」
ロイドは、そっとキーアの背中を押した。
「セシル姉、この子が……」
「ああ、導力メールで連絡してくれた子ね。たしかお名前は、キーアちゃんだったわね。こんにちは、キーアちゃん？」
「こんにちはー！」
児童病棟も受け持つセシルは、子供の扱いにも慣れている。
キーアの頭を優しく撫で、ロイドに視線を向けた。
「神経科の先生にも連絡はつけてあるわ。さあ、どうぞ」
「ありがとう。ところで神経科の先生って？」
「うちの准教授で、ヨアヒム・ギュンター先生って言うの。まだ若いけど、薬学科と神経科を取り仕切ってる先生だから、頼りになるわよ」
そう言ってセシルは、キーアの手を引いていった。
だが彼女が告げた名前に、唯一ランディだけが首を傾げている。
「……ヨアヒム・ギュンター？　はて、どっかで聞いたような……」



＊＊＊＊＊

「……ふむ」

若い医師は、キーアの瞳を覗き込んだ。

「瞳孔にも、異常は見られない。脳神経へのダメージもなさそうだ。悪いが、ロイド君、彼の検査には時間がかかりそうだよ」

そう言ったのは、ヨアヒム・ギュンター医師である。

角縁眼鏡が似合う、優しげな細面の青年は、ふと背後に控えるランディに視線をやった。

「それはそうと……どこかでお会いしませんでしたっけ？」

「お、俺ですか？　いやいや勿論、初対面っすよ」

ランディは惚けつつも、冷や汗を拭っていた。

まさか彼も、保養地ミシュラムで遭遇した『釣り好きの青年』に再会するとは思ってい
ったようだ。

それでもヨアヒムは、じーっとランディを見つめている。

「しかしその声……たしかどこかの釣り場で……」

「それより先生、治療にはどれくらいかかりますか？」

ロイドが割って入ると、若い医師も我に返った。

「三日……いや一週間は欲しい」
「そんなに？」
「正直、脳神経や脳細胞の研究は、まだ始まったばかりでね。記憶喪失になる原因は、無数にあり得るから、対処療法が存在しないんだよ」
ヨアヒム医師も困った様子で、こめかみを掻いた。
「とにかく、うちの病院に検査入院してもらおう。こちらとしても慎重に治療する。そのための一週間なんだ」
「けんさにゅーいん、って何？」
キーアの質問には、控えていたセシルが答えた。
「ここに泊まることよ。キーアちゃん、お泊まりできる？」
「うん、へいき。でもロイドたちは？」
「俺たちは無理だよ、仕事があるからね。でもキーアはいい子だから、おとなしく入院してくれるよな？」
ロイドはそう言って、キーアの髪を撫でた。
だがキーアは、急にきっと唇を結んで椅子から立ち上がった。
「やだ！」
「キーア……」
「ロイドたちといっしょじゃなきゃやだ！　お泊まりなんてしない！」

いつもは素直なキーアが、急に頑なな表情になった。
「ロイドたち、キーアのこと、よその子にしちゃうつもりなんだ！　キーア、いらない子なんだー！」
「そ、そんな訳ないだろー！」
ロイドが驚くと、エリィも優しい声で宥めた。
「少しの間、ここで泊まるだけよ？　その後は、今まで通り、みんなで一緒に暮らせるわ」
「やだったら、やだ！」
キーアは叫んで、椅子からぴょんと飛び降りた。
「そんなの知らないもん！　キーア、ここには泊まりたくないもん！」
「キ、キーア？」
「ロイドのばか！」
叫んで、キーアは診察室から飛び出していく。
あわててエリィとティオが後を追いかけた。
「待って、キーア！　待ってってば！」
出て行く二人に、ロイドも肩を落としてうなずいた。
「まいったな……すみません、先生。いつもは素直な子なんですが」
「ははっ、かまわないよ。しかしそれもひとつのヒントかもしれない」
「と言いますと？」

「キーア君は、孤独を恐れている。もしかしたら過去にそのような経験をして、一人になるのが怖いのかもしれない。いや、あくまで推測だけどね」
ヨアヒムは笑ったが、すぐに表情を引き締めた。
「しかしそれは心理学的側面からの診断だ。僕の専門の薬学から診ると……」
「先生、まさか」
「いや、あるよ。キーア君が、何らかの薬物を投与されて記憶を失った可能性がね」
それを聞いて、ランディが顔を歪めた。
「あんな子供にですか？　それに記憶を失う薬なんて聞いたことがありませんよ」
「いや、そういう症例も、数少ないが過去に存在するんだ。薬の成分が、神経系の伝達を副次的に阻害してしまうんだが……ただ多くの場合、心神喪失を伴うことが殆どでね。キーア君には、当てはまらないかもしれないな」
ロイドとランディは、思わず顔を見あわせた。
「確かに……心神喪失には程遠いですからね」
「ああ、あの通り、明るく元気一杯だぜ？」
するとヨアヒムは、やや表情を曇らせた。
「しかし今の話は、すべて正式に販売されている薬物についてだ。非合法のモノに関しては、なんとも言えない」
「そんな、非合法の薬物だなんて……」

「だが世の中には、闇取引される違法薬物もあるそうだ。体内から排出される成分を化学的に調べれば、確認できるんだが……」
ロイドは、しばし熟考の後、微笑んだ。
「仕方ありませんね。いずれ検査は必要でしょうが……焦って、あの子の心を壊したくないです」
「うん。現時点では、それも最善のひとつだろう。まあ、記憶が戻るのを気長に待つのもいだろう。何かあったら相談に乗るから、いつでも連絡してくれたまえ。こちらも記憶障害の例を調べておくよ」
「ありがとうございます。今は、キーアの気持ちを優先したいと思っています」
「……そうか。ロイド君は優しいんだね？」
ヨアヒムが問うと、セシルはにっこり笑った。
「ええ、ずっと昔からです」
だがロイドは、自分の迂闊さに今さら気づいていた。
いつも笑顔のキーアに、恐怖心が眠っているとは少しも思わなかったのだ。
もっとキーアのことをよく考えてあげるべきだった。
そうしたら逃げ出すようなことは……
その時、不意にランディが窓の外を指さした。
「おい、あれ見てみろよ」

「えっ？」
促されて、ロイドも窓辺に立った。すると……
キーアは、研究棟を飛び出して、病院の中庭へ出ていた。
木々が植えられた中庭には、大きな池もあり、ちょっとした公園のようである。
その池のほとりまで来て、キーアは手すりを握りしめた。
「まったくもう……ロイドってば、全然わかってないんだから。キオクなんか、別に無くっても平気なのに……どうしてそんなに気にするのかな？」
すると、そのつぶやきに、誰かが反応した。
「……そこにいるのはだれ？」
キーアは、ふと声のする方を見やった。
池のほとりには、自分より少し年長らしい女の子が立っている。
黒髪をきれいに整え、穏やかな表情を水面に向けていた。
だがその瞳は、なぜか閉ざされたままである。
水色のパジャマを着ているところからして、入院患者らしい。
キーアは、とことこと、その少女へ歩み寄った。
「ここにいるのは、キーアだよ。あなたは？」
「キーアちゃんて言うのね。私はシズク……シズク・マクレイン」

黒髪の少女は、目を閉じたまま微笑んでいる。
キーアは、その少女にもう一歩、近づいてみた。
「ねえ、どうしてさっきから目をつむってるの？」
「私ね……目が見えない病気なの。だからずっとここに入院してるのよ」
「ふーん……キーアも、記憶がないんだって。だからおあいこだね」
「えっ、記憶が……」
シズクは、瞑目したまま、キーアへ顔を向けた。
「じゃあお父さんとか、お母さんのことは……？」
「全然おぼえてない。でもロイドたちがいるから、へーきだよ」
「ロイドさんって……？」
「キーアのお友だち！　えーと、なんだっけ、とくむしえんか、っていうの」
「会ったことあるわ……警察の人たちね」
そう言うとシズクは、小さくうなずいた。
「そうだよ！　それからね、エリィとランディとティオと、それから、かちょーと、ツァイトもいるんだ！　あのね、ツァイトってね……」
キーアは、シズクに楽しそうに話しかけている。
それを遠くから、エリィとティオは静かに見守っていた。

「……検査入院は、しばらくおあずけね」
「はい。無理はしない方がいいと思います」
後から駆けつけたロイドとランディも、キーアの様子に顔をほころばせた。
「やれやれ、怒って駆けだしたかと思えば、もう笑ってるのか」
「それが女ってもんだぜ。しかしあんなに入院を嫌がるなんてなあ……」
ロイドも、キーアの不思議な力には感づいていた。
今もああして、初めて会った子と、すぐに打ち解けている。
誰もがキーアに接すると、心を開いてしまう……そんな力があるような気がしていた。
だがそれを感じていたのは、ロイドだけではなかったのだ。

「なじむのが早いものだな、子供は……」
「あなたは……！」
ロイドたちは、突然の声に振り返った。
そこには、長身、長髪の男が立っている。
まだ若いが、達観し、老成したような表情。
この街に暮らす者なら誰もが知る、クロスベルの英雄にして守護神。
遊撃士協会、クロスベル支部のA級遊撃士、アリオス・マクレイン。
だが今、目の前にいる《風の剣聖》は、穏やかにシズクを眺める一人の父親に見えた。

「へえ……そのツァイトって、そんなに大きいんだ」
「そうだよ！　それでね、毛がもふもふしてて、とっても気もちいいの！　シズクちゃんにも今度、さわらせてあげるね！」
「ありがとう……じゃあ今度、街に行った時にでも……」
「シズクちゃん、街に来てくれるの？」
「うん、時々……お父さんに買い物に連れてってもらうの」
「じゃあ、キーアといっしょに遊ぼうね！　ぜったい！　約束だよ！」

そう言ってキーアは、シズクに笑いかけた。
シズクも、キーアの肩に触れ、そのぬくもりを確かめている。
アリオスは、二人を眺めながら、珍しく微笑を浮かべた。
「本当に珍しいことだ。うちの娘は、行儀こそいいが、遠慮がすぎるところがあってな。あんな風に他の子に心を許すとは……」
ロイドは、アリオスの横顔を眺めた。
このクロスベルにおいて、警察と遊撃士協会の評価には落差がある。
警察は信頼がなく、市民を助けてくれる遊撃士協会こそ、街の守護者だと。
だからこそ、特務支援課が立ち上げられたのだが、ロイドは、この剣聖を疎ましいと思った

ことはなく、むしろ畏敬の念で接していた。

アリオスも、最初はロイドたちをヒヨッ子だと思っていたらしいが……

「聞いたぞ、黒の競売会の一件……」

「あ……」

「まさかクロスベル警察が……いや、お前たちが、あそこまで踏み込むとはな。正直、クロスベル市の暗部については、私も苦々しく思っていた。だが……」

アリオスの表情に、苦渋が浮かんでいる。

元々、遊撃士協会は、市民の要請に応えることを目的としている。

魔獣の退治はもちろん、護衛、探索……

「……だが我々遊撃士協会は、政財界がらみの悪事には、なかなか手が出せずにいたのだ。そこは市民の目から厚いベールで覆われ、悪事を指摘されることもなかった」

「でしょうね。それにクロスベル市では、その暗部から恩恵を得ている市民も多い。あなた方、遊撃士協会が、撲滅を依頼されることもなかったでしょう」

ロイドが言うと、アリオスは深くうなずいた。

「うむ……だがそのはがゆさを、お前たちが少しは解決してくれたようだ」

「そう、少しですけど……俺たちにもできることがあるって分かりました。特に、あなた方、遊撃士協会が踏み込めない領域で」

「言うものだな。だがその領域は、暗く、深いぞ」

「覚悟のうえです。もう、俺たちは踏み出してしまった」

「らしいな。その第一歩の結果が……あの子か」

アリオスがキーアを指すと、ロイドは大きく嘆息した。

「そうです。あの子には、記憶がありません。自分がどこから来たのか、どうして競売会に出品されていたのかも分からない……」

「うむ……」

「俺たちも、キーアの身元を割り出そうとしましたが、今のところ皆目不明です。そこで……遊撃士協会のデータベースを当たってもらえないでしょうか？」

ロイドの言葉に、アリオスも、エリィたちも驚きを露わにした。

警察が、遊撃士協会に協力を依頼する。

前例が、ないわけではない。

プライドの高い警察が、遊撃士協会へ劣等感を覚えて、それをしてこなかっただけなのだ。

しかしロイドの素直さを見抜いて、アリオスも破顔した。

「かまわんさ。しかし、よく思いきって言いだしたものだな」

「キーアの身元を割り出すためです」

「たしかに大陸各地に支部を持つ我々の方が、抱えている情報量は多いだろうな。早速、行方不明者の情報、あたってみよう」

「よろしくお願いします」

「だがな……あの子の記憶、戻すつもりなのか？」
「戻せるものなら……でもキーアの過去に何があったのか、それを考えると俺も……」
ロイドは、いつまでも笑い合うキーアとシズクを見やった。
あの笑顔を曇らせたくない。けれど……

＊＊＊＊

「なんたるザマだっ！」
マルコーニ会長は、拳を机に叩きつけた。
「競売会を潰されたうえに、警察に手打ちを申し入れるとはな！」
「申し訳ありません、会長……」
巨漢、ガルシア・ロッシが深々と頭を下げる。
ルバーチェ商会の会長室には、重苦しい空気が立ちこめていた。
無理もない。競売会によって利益を上げ、各国要人に緊密なパイプを作る……その目的がすべてご破算になったのだから。
そして彼らは、有力な後ろ盾も失いつつあった。
「ハルトマン閣下からも、依然連絡がない……当然だろう。閣下の私邸で銃撃戦に及び、それが招待客たちに露見してしまったのだ。うちへの資金援助も止まりかねん」

マルコーニは言って、葉巻を灰皿に押しつけた。
「それだけならまだしも、この機に乗じて《黒月》も勢力を伸ばしてくるだろう。おい、お前たちを襲った《銀》とかいう殺し屋の足取りはつかめたのか？」
「い、いえ、まったく……」
部屋に控える黒ずくめの男たちは、みな頭や腕に包帯を巻いていた。
「あの妙な殺し屋が、《黒月》の手先ってことは分かりました。ですがそれ以上は……」
「ちっ、使えねえ野郎どもだ！」
マルコーニは、苛立たしげに新しい葉巻をくわえる。
それでもガルシアは、冷静な声を維持していた。
「《銀》の首は、必ず我々が上げてみせます。会長もしばらくご辛抱を……」
「辛抱している場合か！　耐えているだけではジリ貧になるだけだぞ！」
「しかし……」
「ええい、こうなったら……」
言いかけて、マルコーニはおもむろに決断した。
「……奴に、連絡しよう」
「会長、まさか……」
「手段を選んでいる場合ではない。切り札を……例のブツを使うぞ」
だがガルシアは、ぐいと机をつかんで会長に迫った。

「あれはだめです！　リスクが高すぎます！」
「多少のリスクも承知の上だ」
「ですがあれを使えば、遊撃士協会も乗り出してくるはず……」
「ふんっ、叩き潰せばよいではないか、遊撃士など」
言ってマルコーニは、葉巻の先端に火を灯した。
「だが真っ先に潰すべきは、《黒月》の連中だ。さて、戦争となれば資金も要る。おい、例の流通ルートにもブツを流せ。喜んで金を出す奴もごまんといるだろう」
そしてマルコーニは、構成員たちも見渡した。
「お前らの中でも、ブツを使いたい奴がいるならくれてやるぞ。《銀》の首を上げれば、すぐに昇進させてやる。どうだ、んん？」
すると男たちの中から、一人、また一人と進み出る者が現れた。
「例のブツ、俺にください」
「俺もやります……《銀》だけじゃなく、《黒月》も皆殺しにしてやりますよ」
だがガルシアは、びぃんと響くどら声を張り上げた。
「馬鹿野郎！　お前ら、あれが何だか分かってるのか！」
「分かってますよ、若頭！　けど今は、能書き言ってる場合じゃねえ！」
「なんだと！」
「使えるもんは、全部使う！　でなきゃ《黒月》との戦争には勝てねえんだ！」

部下たちからも同意の声が上がると、マルコーニは狡猾にほくそ笑んだ。
「くっくっくっ……物わかりのいい奴ばかりで助かるぜ。ガルシア、どうやら反対してるのは、お前だけらしいな？」
「くっ……」
「ここからが勝負だ。《黒月》に教えてやれ。クロスベルの支配者が誰かってことをな」
そう言ってマルコーニは、紫煙をくゆらせる。
もはやガルシアの言を聞き入れる者は、一人もいなかったのだ……

＊＊＊＊

「わあああああっ！　ねえねえ、すっごくキレイな夕焼け～！」
キーアは、導力バスの窓に顔をつけて歓声を上げた。
聖ウルスラ医科大学からの帰路。
キーアは、さっきまでむくれていたこともすっかり忘れ、オレンジ色に染まった空に夢中である。
ロイドは、がたごとと揺れる車内で、キーアを宥めた。
「キ、キーア、声が大きいって……！」
「だってロイド、あんなに……」

「しーっ、他にもお客さんがいるんだから」
すぐ傍に座るエリィも、近くの老夫婦に頭を下げた。
「すみません……うるさくしてしまって」
「いいのよ、子供は元気なのが一番だわ」
老婆が笑うと、夫の老人も孫を見るように目を細めた。
「しかし病院帰りということは、その子、どこか具合でも悪いのかね？」
「いえ、ちょっと病院の先生に相談することがありまして……」
エリィが説明すると、老婆が労るようにうなずいた。
「まあ……あなたたちもまだ若いのに、娘さんのこと、大変ね？」
「え……娘？」
ロイドとエリィは、一瞬顔を見あわせ、ぶるぶると首を横に振った。
「いえっ、違うんです、俺たちは……」
「そうです、夫婦じゃありません！」
「おや、だったらこの子とはどういう関係なの？」
「えーと……一口に説明するのは難しいんですが……」
ロイドが口ごもると、前の席に座していたランディが振り返った。
「いいじゃねえか、若夫婦ってことにしておけよ。その方が、簡単に説明できるだろ」
「適当なこと言うなよ、ランディ！」

「そうよ！　私、まだ一八歳なんだから！　キーアみたいな子がいたら、おかしいでしょ！」
エリィが声を上げると、ティオも前の席から振り向いた。
「……辻褄はともかく、なかなかお似合いかと」
「もうっ、ティオちゃんまで！」
そんなロイドたちのやり取りを無視して、キーアはバスの反対側の窓に駆け寄った。
「ねえねえ、あっちに石でできた建物が見えるよ～！　すごくノッポだね～！」
「ほら、キーア、じっとしてなさい」
ロイドは、キーアを隣に座らせると、額の汗を拭った。
「やれやれ……それにしても、バス旅がそんなに楽しいかい？」
「うん！　歩くのも楽しいけど、バスもすっごく面白いね！」
キーアは、足をぱたぱた動かして笑っている。
その様子を見て、エリィがふとつぶやいた。
「まるで……バスに乗ったことがないみたいね」
「ああ。それもキーアの過去を探るヒントかもしれないな。クロスベルで生まれたなら、導力車なんて見慣れてるだろうけど」
ロイドの言に、ランディも顎を撫でた。
「とすると、導力車の少ない土地で生まれたってことか？」
「しかし、そのヒントだけでは出身地が特定できません」

ティオは、じっとキーアを見つめて言う。
「大陸には、導力車が少ない地域の方が多いんですから……やはり、キーアに記憶を取り戻してもらう以外、ないようですね」
それを聞くとキーアは、ちょっと唇をすぼめてみせた。
「んー……別にキーア、思い出さなくってもいいけど。ロイドたちは、キーアが思い出した方が嬉しいの？」
「あ、ああ……そりゃもちろんさ」
ロイドが躊躇いがちに答えると、エリィもキーアの髪を撫でた。
「きっと大切な思い出も一杯あるはずよ。だから頑張って思い出してみましょう？」
「うーん、そうなのかなあ……」
キーアは、また夕陽に視線を戻した。
その姿を見て、ロイドも思う。
こんなに小さくて、可愛らしい子なのだ。
きっと両親は、心配しているに違いない。
なんとか記憶を回復して、元の暮らしに戻してあげたかった。
だがそんなロイドの気持ちを察して、ランディが小さくささやいた。
「大切な思い出より、辛い思い出が多かったらどうする、ロイド？」
「ランディ……」

「俺は、そうだ。忘れちまってもいい記憶の方が多いぜ」
その言葉に、エリィとティオも表情を硬くした。
黒の競売会の夜以来、ランディの過去については、誰も触れていない。
ロイドは、あらためてランディを見据えた。
「ランディは、どう思ってるんだ。猟兵の過去を……」
「……猟兵の息子として生まれちまったんだ。それを今さらどうこう言っても仕方ねえさ」
ランディも、夕陽に目を伏せる。
「けど、俺がそう思えるようになったのは、自分の境遇を受け止められる年齢になってからの話だ。キーアは……まだ子供だろ」
「耐えられないかもしれない……って言うのか」
「そんな過去がないことを祈ってるけどな」
エリィも、ふと遠くを見つめた。
「私も……幼い頃、両親が離婚した時は辛かったわ。それにキーアの両親がどういう状態にあるのかも分からないし」
「そんな……キーアを待っていないなんて……」
だがロイドは言いかけて、口をつぐんだ。
目の前では、ティオが唇を結んでいる。
ティオが、両親の元に帰りながらも、受け容れられなかったのは事実だ。

ロイドはそれを思って、キーアに聞こえぬよう小さな声で言った。
「たしかに、もしかしたらキーアは帰れない状況にあるのかもしれない。まさかとは思うけどキーアの両親は……」
そこまで言って、ロイドは考えを胸にしまった。
キーアは、密売品の中に紛れ込んでいたのだ。
もしかしたら両親に売り飛ばされた……という可能性もある。
だったらそんな両親の元に帰す必要は……

導力バスが急停車したのは、その時だった。
がくん！ と、つんのめるように車体が軋み、ロイドたちも座席にしがみつく。
「な、なんだ！」
ロイドは、あわてて運転席を見た。
前方の窓ガラスが、何か巨大なモノに塞がれ、真っ暗になっている。
おののく運転手は、ハンドルを握ったまま、悲鳴を上げた。
「ま、魔獣だっ！」
同時に、破砕音。
鋼材のような腕が、運転席に振り下ろされ、バスの前部がひしゃげる。
その衝撃が車体すべてに伝わり、窓ガラスが一斉に砕け散った。

「キーア、伏せろ！」
ロイドは、キーアに覆い被さって、ガラスの破片を背に浴びる。
ランディは、素早く車体後部のドアを蹴り破った。
「みんな、ここから逃げろ！　さあ早く！」
街道を行くバスが、魔獣に襲われることは、ままある。
ロイドたちも、これまで何度も各地へ魔獣退治へ出向いてきた。
だが車内から確認できぬほど巨大な魔獣は、稀である。
ロイドは、キーアを抱えて車外へ飛び出すと、先ほどの老夫婦に彼女を預けた。
「すみません、この子を頼みます！」
「あ、あんたは……」
「俺は、市警の者です！　魔獣を退治しないと……」
言いながら、振り返ったロイドが見たものは……
「なんだ、これは……！」
バスの前に立ち塞がっていたのは、真紅の巨人であった。
筋肉と甲殻に覆われた身体から、アンバランスなほど太い二本の腕が伸びている。
その先には、牛の角ほどもある爪が飛び出ていた。
背中からは、左右に三枚ずつ翼が広がり、それが動くたび、土埃が舞い上がり、巨体が地表から浮き上がる。

そして醜く歪んだ顔には、ぎらりとロイドたちを睨む眼球が蠢いている。
「なんなの、あれ……」
「あんな魔獣、見たことねえぜ、まるで……」
エリィとランディも呆然とするうち、魔獣が低く吼えた。
その唸りは、地響きの如く、辺りの大気を震動させる。
ティオは、ぐっと魔導杖を握りしめた。
「まるで……悪魔です」
大陸にあまねく広まる空の女神信仰と七曜教会。
その聖典には、女神を否定する存在として、悪魔が登場する。
ロイドたちの前に現れた真紅の魔獣も、まさにその聖典に描かれた、悪魔そのものの姿をしていたのだ。
すでにティオは、その脅威を解析しつつあった。
「強度三六！　水属性の有効率０％！　まったく効果はありません！」
「なにっ――！」
「火、風、地属性の有効率も一〇〇％を下回っています！　かろうじて時と幻属性なら通常の効果が得られます！　空属性なら有効率一四五％！」
ロイドは、衝撃警棒を左右に握った。
強度だけ聞いても、ロイドたちが対処したことのない上位の魔獣だ。

「空属性……女神の力に弱いのか、まさに悪魔だな――！」
「でも空属性の導力魔法って……」
エリィも、唇を噛みしめている。
それを生み出すために必要な空属性の結晶回路は、ロイドたちもあまり持ち合わせが無い。
元々、空属性を持つ結晶石の欠片、セピス自体が希少で、おいそれと量産できるものではないのだ。
四人の中で唯一、空属性の魔法が発動できるのは、ティオである。
しかし彼女にしても、苦戦を覚悟した表情だった。
「……私もまだ、強力な空属性の導力魔法は打てません。時属性と、幻属性の魔法も織り交ぜて攻撃するしかないようです」
「他の属性は、厳しいのか？」
ロイドの問いに、ティオはこくんとうなずく。
「あまり効果はありませんが、地属性ならどうにか……火と風は諦めてください」
「わかった……後は、ありったけの必殺技をぶつけるしかないな」
ロイドは、この一戦に全力で挑む覚悟を決めた。
魔獣は、どのような技を使うかも分からない。
まずは、その動きと技を封じるのが上策だった。
「まず俺から行く――　その間にエリィとティオは、導力魔法の準備を……」

「だめだ、ロイド！　奴の方が……！」
ランディの叫びに、咆哮が重なる。
翼をはためかせた悪魔は、巨体とも思えぬ速度で突進してくる。
ロイドは、振り下ろされた爪をまともに浴びた。
「があっ……！」
衝撃と同時に、ロイドは数メートル吹っ飛ばされた。
先制攻撃を受けたロイドは、地面にバウンドし、悲鳴を漏らす。
「しまった……先手を……」
ロイドは、倒れる自分を見下ろした。
身体中に、プラズマのような光がまとわりついている。
それはあらゆる技を封じる魔法的な効果だった。
魔獣に使おうとした攻撃を、先んじてロイドが打たれてしまったのだ。
だがプラズマに抗するように、ロイドの胸の警察記章が輝きだす。
導力魔法が込められたそれは、プラズマを瞬く間に吸収すると、封技を無効化してみせた。
「危ないところだった……気をつけろ、ランディ！」
ロイドが立ち上がる間に、ランディは、斧槍ライアットバスターを振りかざした。
「分かった、時間を稼ごうぜ！」
炎をまとった斧槍が、悪魔の右腕を殴打する。

しかし悪魔は、灼熱など気にもせず、ランディの攻撃をはね除ける。
さらに傷ついた部分も、見る間に塞がれ、回復しているのだ。
「なんて野郎だ！」
それでもランディは、斧槍を自在に振るい、悪魔を押しとどめた。
しかし魔獣は、ランディなど眼中に無いらしく、森の中に避難した乗客たちへ羽ばたいた。
「まずいっ！」
魔獣は、ランディの頭上を飛び越え、木々を押し倒して着地した。
目の前には、震える乗客たち。
老夫婦も、キーアを抱きしめて立ちすくんでいる。
ただ一人、キーアだけがきょとんと魔獣を見上げていた。
「させるか！」
ロイドは、あらためて思念を集中した。
身体から黄金の光を放ち、一直線に悪魔めがけて疾走する。
激突の瞬間、ロイドは左右のバトルハンマーをぶち当てた。
「ブレイブスマッシュ！」
閃光のようなロイドの一撃で、悪魔は大きく後退する。
と、今度は逆に、悪魔の巨体に封技のプラズマが絡みつく。
しかし魔獣は、ぶるんっ！　と身震いすると、プラズマを振り払った。

「くっ……これでおあいこか！」
ロイドは、キーアたちを背にかばって再び身構えた。
「みんな、もっと森の奥へ逃げてください！　ここは俺たちが……」
「ロイド！　キーアもここでおーえんするよ！」
「いいから逃げるんだ！」
そのキーアの声に、魔獣が反応した。
空に向かって咆哮すると、鋭い眼光をキーアに向ける。
ロイドも、その視線に気がついた。
「なんだ……こいつ……」
その時、エリィが導力魔法の準備を終えた。
彼女のかざした手から、赤紫の光が膨れあがる。
「足を止めるわ、カラミティクロウ！」
それは時属性の妨害導力魔法。
悪魔の足下に顕現した力は、紫色の光球となって巨体を包む。
それに飲まれた途端、悪魔は、ぎぎぎぎぎと奇怪な呻きを発した。
エリィが放った導力魔法は、悪魔の動きを抑え、すべてをスローモーション化する。
続けて、ティオが魔導杖を掲げた。
「動けない今がチャンスです！　ダークマター！」

瞬間、悪魔を中心点として、光の波紋が広がった。
空属性の攻撃魔法ダークマターが、その場に悪魔を釘付けにした。
最も苦手な属性に打たれ、悪魔の甲殻が弾け飛び、肉が裂ける。
魔獣は絶叫しつつも、導力魔法に抗い、自らの肉体を蘇生しようと試みている。
ロイドは、ランディと視線を合わせた。
「回復する時間を与えるな！　続けて攻めるぞ、ランディ！」
「おっしゃあ！　合点承知！」
二人は同時に、別方向から悪魔に躍りかかった。
ロイドが、衝撃警棒を打ち込む。
ランディが、斧槍の斬撃を浴びせる。
疾走を加えた両者の一撃は、悪魔の骨を砕き、腕を断ち斬る。
だが悪魔の傷は、ぶくぶくと泡を立て、見る間に塞がれていった。
それでも、その蘇生を上回る速度で、ロイドがまた打ち、ランディが斬る。
次第に悪魔の巨体は、間断無き打撃によってずたぼろにされていった。
「援護するわ、ロイド！」
エリィが、次なる導力魔法、クロノドライブを発動した。
時属性の補助魔法を受け、ロイドの動きは急加速される。
ロイドの衝撃警棒は、もはや軌道が見えぬほどの速さで、悪魔の胴体を乱打していった。

そしてティオが、魔導杖の先端を悪魔に向ける。
「砲撃様式、起動！　導力駆動、最大出力！」
開口した魔導杖の先端が、次第に発光する。
ティオは蓄積した力を、一気に魔導杖から解き放った。
「行きます、エーテルバスター！！」
怒濤の奔流が、悪魔を貫いた。
魔導杖から放たれた閃光が、巨体をど真ん中からぶち抜く。
ティオ渾身の一撃をくらった魔獣は、あえぐように叫び、悶え苦しんだ。
「やったか……？」
しかしロイドの目の前で、魔獣はなおも前へ前へと、ゆっくり歩を進めている。
その視線は、やはりキーアを見据え、腕を伸ばし、捕らえるかのような動きも見せた。
ロイドは再度、悪魔に向かって飛びかかった。
「とどめだ！」
跳躍したロイドは、悪魔の脳天にバトルハンマーを振り下ろした。
一撃が魔獣の頭蓋を砕いた瞬間、巨体ががくりと膝をつく。
続けて爆砕した悪魔は、色取り取りの、無数のセピスに変じていた。
ロイドは、肩で呼吸しながら、悪魔の残骸を見下ろした。
「……しぶとい奴だったな」

「ああ、全力でかからなくちゃ、こっちが危なかったぜ」
ランディも呻いて、背後を振り返った。
すでに乗客たちは安堵し、キーアも老夫婦に抱きしめられて笑っている。
その姿を見て、エリィとティオもほっと息をついた。
「良かったわ。みんな無事で……」
「はい。それにしても今の魔獣、私のデータベースには存在しませんでした。いったいどこからこんな魔獣が……」
ロイドも冷や汗を拭って、うなずいた。
「そうだな……まるで煉獄から湧いて来たみたいだ」
「やだロイド、変な冗談やめてよ」
エリィが、青ざめた顔で言う。
しかしロイドには、自分の発言が、あながち間違っているとは思えなかった。
いつの間にか、夕陽は落ち、吹く風も夜気を孕んで冷たくなっている。
その風に吹かれ、森の木々がざわざわと騒ぐ。
ロイドには、その音が禍々しい凶兆に思えた。

＊＊＊＊

拘置所に、こつこつと冷たい足音が響く。

二人の刑務官は、とある独房の前に立つと、中の様子を覗き見た。

「どうだ、あいつの様子は？」

「あいかわらずだな。ずっとぶつぶつ呟いている」

二人は、肩をすくめてまた歩き出す。

それでも二人の会話は、独房の中の男についてのものだった。

「逮捕されたのが、相当ショックだったらしいな」

「ああ、自分ではうまくいくと思ってたんだろう。市長の暗殺が」

「元々、優秀な奴だったらしいじゃないか」

「うむ、市長の秘書で……相当なエリートだったようだ」

「なるほどねえ。エリートってなあ、一回しくじると、ああなっちまうんだなあ」

二人の足音は、次第に遠のいていく。

そして拘置所には、彼の呟きだけが低く響いていた。

「くくくっ……無知なる愚民どもが……今のうちに惰眠を貪るがいい」

拘束服をつけられた彼は、芋虫のような格好で笑いを噛み殺した。

「間違いなく、その日はもうすぐやって来る……その日になって慌てても、もう遅い。すべてが変わる。この街のすべてが変わるのだ……」

彼は、冷たい独房にあっても、希望に満ちた目をしている。

ただしその希望は、血の色に濁っていた。

「やがて我らは到達する……あの御方の力を借りて……《真なる叡智》に至るのだ。その日こそクロスベルで一番長い日となろう……くくくっ……くくくくっ……」

拘束された男は、その夜も一晩中、笑い続けていた。

クロスベル市長の元秘書、アーネスト・ライズが笑う理由を知る者は、拘置所のどこにもいない。

しかし……

あとがき

「そうだ、京都に行こう」
というキャッチフレーズがありますが。
「そうだ、水着にしよう」
と思って書き始めたのが、この「英雄伝説　零の軌跡2　競売会の少女」です。

こんにちは、市川丈夫です。
ノベライズ版「英雄伝説　零の軌跡」も、長大なストーリーの鍵となる謎の少女、キーアの登場となりました。
ロイドたち特務支援課にとってもターニングポイントとなる黒の競売会事件を、存分にお楽しみください。

さて二巻では、キーアと黒の競売会を書くと決めていたものの、文庫一冊の分量としては、やや足りないことにも気づいておりまして。

そこでゲームの雰囲気が壊れない程度にオリジナル・シーンを追加しようと思い、どうやって膨らませようかと考えるうち……

ふと目にしたのが、日本ファルコムさんによるカレンダーのイラストです。
ミシュラム・ワンダーランドのプールで水着で戯れるエリィやキーアのイラストを見た瞬間、先ほどの言葉が思い浮かびました。
「そうだ、水着にしよう」と。

僕自身、書いてみたかったのは勿論、ライトノベルとしても、爽やかなお色気は必須！
しかもこの先に待ち受ける疾風怒濤のクライマックスでは、キャラクターたちがのんびりするヒマなど無く、遊ぶならここしか！　なのです。

そう、実はこの先の物語、書くことといっぱい過ぎ（笑）。
ゲームをご存じの皆様ならお分かりいただけるでしょうが、アレがああなって、あの人がああなる、エピソードがぎゅうぎゅうに詰まったストーリーが展開するのです。

正直、これ以降をきっちり書くだけでも結構な分量になりますので、すでに三巻を見据えつつ、この二巻を書き進めた、という感じです。

予告編的にあの人が登場したのも、そういうワケです、はい。

しかし内容てんこ盛りな終盤ですが、ただゲームのストーリーだけお見せするのもアレですので、隙あらばオリジナル要素を挿んでいこうかと。

二巻でも、いろいろ膨らませておりますので、元々のゲームとは微妙に異なる部分まで楽しんでいただければ幸いです。

それではまた近いうちに、三巻で……

いや、「クロスベルの一番長い日」で、お会いいたしましょう。

二〇一二年　ハロウィンの夜

ティオの特製ビーフシチューをおかわりしつつ

市川　丈夫

富士見
DRAGON BOOK
546

英雄伝説　零の軌跡②
競売会の少女

平成24年12月25日　初版発行

原作＝日本ファルコム株式会社
著者＝市川丈夫
発行者＝山下直久

発行所＝富士見書房
〒102-8144
東京都千代田区富士見１-12-14
http://www.fujimishobo.co.jp
電話　営業　03(3238)8702
　　　編集　03(3238)8939
印刷所＝旭印刷
製本所＝本間製本
装幀者＝岡村元夫
2012 Fujimishobo, printed in Japan
ISBN978-4-8291-4703-0 C0176

©2012 Nihon Falcom Corporation.
©2012 Takeo Ichikawa, Katsumi Enami, Kashiwa

本書の無断複製（コピー、スキャン、デジタル化等）並びに無断複製物の譲渡及び配信は、著作権法上での例外を除き禁じられています。また、本書を代行業者等の第三者に依頼して複製する行為は、たとえ個人や家庭内での利用であっても一切認められておりません。

※定価はカバーに表示してあります。

落丁・乱丁本は、送料小社負担にて、お取り替えいたします。角川グループ読者係までご連絡ください。（古書店で購入したものについては、お取り替えできません）

電話049-259-1100（9：00～17：00／土日、祝日、年末年始を除く）